

---

**シークレットゲーム      KILLER QUEEN      ~エピソード6~      【手塚編】**

桐島 成実

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シークレットゲーム      K I L L E R      Q U E E N      ～エピソード6～      【手塚編】

### 【Nコード】

N 2 4 4 8 M

### 【作者名】

桐島 成実

### 【あらすじ】

殺伐としたゲームに、1人の悪党が舞い込んできた。

彼、手塚義光はこのゲームの存在を知ると同時に、表情には邪な笑みを浮かべていた。

時には戦いを、時には他人を利用して踏み台にする。その行いはやがて、すべてのプレイヤー達を巻き込む事態へと発展していった。

果たして彼が手にするのは勝利か？死か？

手塚「面白い。せっかくだから、このゲームに乗ってやろうじゃないか。くくくっ」

## 第1話「戦いの幕開け」（前書き）

この小説は、P S 2「シークレットゲーム」K I L L E R   Q U  
E E N」を元に、私が独自に作成したものです。

本作をプレイしていない方、又はプレイしたのが大分前の方は <http://www.yetigame.jp/secretgame/main.htm>

を確認して下さい。

ただし、プレイしていない方はこの小説を読むことはオススメしません。幾分ネタバレを多分に含んでいますので。

なお、この小説はストーリー上、ダーク調な面が強いのでご了承ください。

ちなみに、本作でエピソード1～4までありましたので、それにあやかってエピソード6と命名しました。

当然ながら、エピソード5も掲載しております。他にもエピソード7もあります。

## 第1話「戦いの幕開け」

シークレットゲーム ｝ KILLER QUEEN ｝ 「エピソード6」

### 第1話「戦いの幕開け」

コンクリートで塗り固められた小部屋に、1人の長身の男の姿があった。

手塚「なんだ？こいつは・・・」

その人物は派手な服装に身を包み、頭には帽子を被っていた。

彼、手塚義光が訝しげな目で見ているそれは、彼が目が覚めたこの小部屋にある、小さな机の上に置かれている2つのPDAだった。

手塚が今手に持っているPDAの画面にはダイヤの柄が描かれていて、端に書かれている数字は『10』の数字が書かれていた。

そして、もう一方は道化師らしい人物が、画面全体に大きく描かれ

ていた。

手塚「つつ！くそ・・・」

思考を巡らそうとした手塚を頭痛が襲う。

手塚「たしか、車に乗ろうとした時から記憶がねえから、あの時か・・・」

手塚はそう言いつつ、忌々しそうに顔を歪める。

おそらくここに連れて来た何者かによって、薬を嗅がされたのだろう。

頭の芯に響くような痛みを振り払い、手塚は今の状況を把握しようとした。

まず最初に気づいたのは首に巻かれている首輪らしきもの。

そして今手塚が手に持っているこのわけのわからない機械だ。

元々持っていたものなど、財布と煙草とライター。それに車のキーぐらいのものだったが、それらを持ち去られた形跡はない。

手塚「と、すると怨恨か？」

手塚のこれまでの人生は、とても全うな道を歩んできたとは言いがたい。

それゆえ恨みを買っ心当たりもいくつかあった。

手塚「とはいえ、そう考えるのは早計か」

いくつか思い当たる節はあったものの、極力恨みを被ったり煽ったりしないように、慎重に行動して来たはずだ。

下手に手を出し、身を滅ぼしてきた他の奴等を見てきた手塚は、自分に不利益が降りかからないように注意を払っていたはずだった。

そして拘束されているわけでもなく、ただ小部屋に放り込まれていただけ。なにより、首輪にPDA。どう考えても普通の誘拐じゃない。

手塚「何はともあれ、じつとしているのは性に合わねえなあ」

手塚はいまだ重く感じる身体を動かし、PDAをポケットにしまった後、部屋の扉のノブに手を掛けた。

・  
・  
・  
・  
・

時を同じくして、別の小部屋にも1人の女性の姿があった。

郷田「どうということなの？これは！」

PDAを操作していた郷田は、通信を介して通話しているディーラーに向かって責め立てていた。

ディーラー「すみません、郷田さん」

普段は冷静で無感情なディーラーも、さすがに申し訳なさそうだ。

郷田が文句を言っているのは、プレイヤー、つまり手塚や郷田のことについてである。

ディーラー「どうやら拉致部隊の手違いで、薬の配分を間違えたらしく・・・」

今の状況は、ゲームを運営するディーラー達にとって大きな問題であった。

ゲーム開始から既に5時間あまりが経過していた。つまりルールに書かれている戦闘禁止が解除されてしまうまで、あと1時間もないのである。

にもかかわらず、プレイヤー同士が接触するどころか、今だに目を覚ましていないプレイヤーまでいるという有様だった。

しかも、運の悪いことに何人か通路を歩いているプレイヤーも、まるで意図して行動しているかのように、プレイヤーがいない方へと足を運んでいるのだった。

このままでは、誰もゲームの存在に気づかず、時間だけが流れていく可能性があった。

郷田「言い訳は聞きたくないわ！とにかく」

ディーラーの言い分を遮り、郷田は今の状況を打開すべく、思考を



巡らせていた。

郷田「上にエクストラゲームを申請してちょうだい」

ディーラー「エクストラゲームですか。内容はどのような？」

郷田「簡単なことよ。プレイヤー同士の接触を促すことと、ペナルティで犠牲者を1人出すこと。詳細はあなたに任せるから、いいわね」

郷田は強い口調でそう言った。そして有無を言わず通信を切った。

ディーラー「やれやれ・・・」

気の強い同業者は手に負えない。そんな表情だった。

あとで、拉致部隊の不手際に関して、上層部に判断を下してもらう必要があるそうだ。

それはそれとして、今はゲームを進行することに集中しなくては。

ディーラー「ともかく、早く手を打たないとまずいのは確かか」

ディーラーの手は今日も忙しく動くのであった。

・  
・  
・  
・  
・  
・



## 第1話「戦いの幕開け」（後書き）

序盤から仕掛けられたエクストラゲーム。一体どのような内容で、どのような結末を生み出すことになるのでしょうか？

次回は第2話「エクストラゲームの脅威」手塚を始めとして、他のプレイヤーも数名登場します。乞うご期待

## 第2話「エクストラゲームの脅威」

### 第2話「エクストラゲームの脅威」

作・桐島成実

最初に目覚めた部屋を出てから慎重に通路を歩いていた手塚だったが、その表情は浮かない。

手塚「ったく。どんだけ広いんだ、ここは」

手塚はため息交じりに、そう呟く。

今居る位置まで結構の距離を歩いていた。その間ずっと聞き耳を立てて、周りを常に警戒していたが、物音一つ聞こえてこなかった。

聞こえるのは自身の足音だけ。靴のかかとが出す一定のリズムが、虚しく通路に響き渡っていた。

このままでは出口はおろか、状況が全く見えてこないと判断した手塚は、歩んでいた足を止め、最初に拾ったPDAをポケットが取り出し、それを手に取った。

手塚「こいつが、なんらかの手がかりになるとは思うんだが・・・」

手塚は直感でそう考え、さっそくPDAを起動した。

タッチパネルを指で押すと、画面がパツと切り替わる。

そこには3つの項目があり、それぞれ『ルール』『機能』『解除条件』と書かれていた。

手塚はその内の『機能』の項目を押してみた。

するとさらに画面が切り替わり、新たな項目の一覧が出てきた。

手塚「あつたあつた。こいつか」

最初に目に入ってきた『地図』の項目を押した。

するとこの建物の全体図らしき地図が、画面いっぱいに広がった。

手塚「あん？なんだ、こりゃ」

そのあまりの広さに、手塚はますます疑わしく感じていた。

手塚「こいつは何か、出鱈目か？第一これじゃ、どこに居るかも分からない」

その時、突如PDAからアラームが鳴り響いた。

突然の出来事に、手塚のボヤきは途中で止まってしまった。

何度かのアラームの後、画面が切り替わり、カボチャのマスコット

らしき人物が画面の端から歩きながら現れた。

そして画面の中央まで行き、そこで正面を向く。

スミス『やあみんな！ボクはジャックオーランタンのスミス！みんな、お目覚めかい？』

そのカボチャの怪人、スミスがしゃべっているように見せているのだろう。合成音声と、それと共に軽快な音楽が同時に流れてきた。

スミス『みんなお寝坊さんだねえ。こんな時なんて言うのかな？おはよう、じゃないよね。うーん。おそよう、かな？』

手塚「なんだこいつは・・・」

手塚はますます胡散臭さを感じずにはいらなかった。

手塚「ん、待てよ。みんな、だと？」

俺1人じゃないということか？

手塚の疑問をよそに、カボチャの怪人は、そんなことはお構いなしに喋り続ける。

スミス『そんなお寝坊さん達にお知らせだよ！』

スミスの表情が、意地悪をする子供のような表情に変わった。

スミス『今君たちは別々の部屋で寝てたんだけど、この建物の居るのは君自身を含めて全員で13人居るんだよね』

手塚「13人もいやがるつてのか!？」

手塚は驚きつつも半信半疑だった。今まで20分程歩いていたが、誰とも接触していなかったからだ。

スミス『でもねえ、いまだに誰1人としてお互い顔をあわせてないんだよね。そこで!君たちに、残りの12人を探してもらおうと思つてさ』

スミス『これから3日間、同じ屋根の下で共に過ごすんだからさ、顔と名前ぐらいは知ってもらわないとね』

俺以外に12人、俺と同じ状況に置かれているということか？

手塚は考えつつも、スミスの言うことに耳を傾けていた。

スミス『あ、でもねえ。誰とも会う事が出来なかった最後の1人は、その場で失格になっちゃうから気をつけて!』

スミス『みんなは今もこの1階に居るはずだから、頑張つて探してネ!それじゃ、健闘を祈つておくよ。じゃあね!』

スミスは言いただけ言つて、そのまま画面の端まで消えていく。

手塚はその間ずっと考える仕草をしていた。

手塚「失格、だと・・・?」

何かしらのイベントか何かか？

ここまですべてくると、何かの企画イベントにしか思えなくなっていた手塚だった。

手塚「やれやれ、面倒なこった」

手塚はそう言いつつも、謎が多いこの状況に、興味を持つようになっていた。

PDAといい、スミスとかいうヤツといい、この建物もそうだ。ここまで手の込んだ仕掛けを施す以上、何かしらの深い訳がある。そう思うようになっていったのだった。

そして手塚は、再び一步を踏み出していったのであった。

・

・

・

手塚はその後、ずっと足を運び続けた。

その間、PDAから何か手がかりを探そうと色々操作してみたが、この状況を打開する情報は得られなかった。

手塚「ちつ、これじゃ人を探そうにも探せん」

手塚は今日で何度目かの舌打ちをした。そうこうしながら、PDAを覗き込んでいた目線がふっと正面を向く。



手塚「ん？」

その視線の先に動くものが目に入った。人が2人並んで歩いている。

その2人組はまだ手塚が居ることに気づいていない。

手塚はじつとその2人組を凝視した。

1人は男で、鉄パイプを持っている。もう1人は女か？

その風貌からは、とても誘拐犯には見えない。それに首には首輪が巻かれている。と、すると俺と同じ境遇か？

自身に意味もなく首輪を巻く誘拐犯も居ないだろう。それに何も分からない現状を打開できるかもしれない。そう判断した手塚は、さっそくその人物に接触する事にした。

手塚「おい！その」

手塚は距離が離れている状態で、大きな声で呼びかけた。

その2人組はその声に気づき、手塚の方を振り向く。

総一「あ」

その人物、総一は、手塚の姿を見るなり、驚きの声をあげた。

手塚「見たところ、俺と同じ境遇のようだが、違うかい？」

手塚はそう言いつつ、自身の首輪を指差す。

総一は手塚の首輪に視線を移して、どうやら同じく誘拐されてきたのだと認識した。

もう一方の女性は、手塚の威圧感に気圧されているのか、それとも見知らぬ人物と出会ったせいなのか、少し縮こまっているようだ。

手塚「とりあえず話しがしたいんだが、構わねえか？」

手塚はそう言いつつ両手を挙げて、敵意がないことをアピールする。

総一「わかりました。今からそっちに行きます。行こう、咲実さん」

咲実「あ、はい」

その女性、咲実は、総一に引っ張られるようにして、手塚の方へと近づいていった。

手塚「出来れば、その鉄パイプは下げておいてもらいたいんだがな」

手塚は鉄パイプに注目し、あからさまな笑みをこぼす。

総一「あ、すみません」

慌てた総一は、とっさに鉄パイプを後ろ手に組んで持ちかえた。

手塚「いいってことよ。この状況じゃ仕方ねえ」

手塚は大げさに両手をあげる。

こうして、手塚と総一、咲実が合流したのであった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

手塚達3人は通路を歩きつつ、お互いの状況を伝え合った。そして聞いたことを頭の中で整理する。

手塚「とはいっても経緯はほとんど変わらんな……。この2人も俺と同じく誘拐された事。PDAを持っている事。それと、さっきのスミスの野郎がエクストラゲームを提示してきた事」

とはいえ、今の所スミス曰く失格、という通告はない為、俺達が最後というわけではないようだ。

そこまで話し終えた頃、ゲーム開始から6時間が経過しようとしていた。

一向に状況が見えてこない中、心なしか3人の周りには、重い空気が支配していた。

暫く無言であったが、やがて耐え切れなくなったのか、再び総一が

口を開いた。

総一「あの、手塚さん。これは」

総一の声を遮るように、PDAからけたたましいアラームが鳴り始めた。

3人はそれぞれのPDAを手にとって画面を見る。

スミス『やあ、ボクはジャックオーランタンのスミス』

再びスミスが画面に現れ、本日2度目の台詞を繰り返す。

スミス『みんな搜索お疲れさま！どうやら何グループが出来たみたいだけど、あれ？1人だけいまだに1人ぼっちの人がいるよ』

スミスはあからさまに驚きの表情を作る。

スミス『しょうがないなあ。ま、そんなわけで、今回のエクストラゲームの失格は君だ！』

スミスは恐らく1人でPDAを見ているその人物を指し示す。

スミス『さうで、それじゃお楽しみの罰ゲーム』

スミスのその台詞と共に、ラッパの軽快というか、あまりにも場違いなファンファーレの音が、PDAから流れ出す。

スミス『今日の罰ゲームはコレ！』

スミスはそう言って、画面の下を指差す。

するとそこには、タッチの項目が新たに現れていた。

手塚達3人は、そこでPDAから視線を外し、お互いに顔を見合す。

手塚「押してみるか？」

手塚のその台詞を合図に、3人はその項目を押した。

するとスミスの画面が消え、ある映像と共に、罰ゲームの詳細が書かれた画面が出てきた。

【物体圧縮システム】 二枚の半透明の隔壁が対象者の両脇を挟み、隔壁がせりだして対象者を押し潰す

画面にはイラストで分かりやすく、その詳細が示されていた。

総一「なっ!？」

最初に驚きの声をあげたのは総一だった。

咲実「御剣さん・・・」

咲実は不安そうに総一を見る。

手塚「こりゃあ、ますますもって冗談」

ドオオオオン

手塚が言い終わらない内に、建物を大きく揺らすほどの地響きがどこから聞こえてきた。

総一「な、なんだ!？」

ドオオオオン

続けて2度目の地響きが聞こえてきた。

手塚「こっちか!」

2度目の地響きで、おおその方角が聞き取れた。

手塚は急ぎ足でその場を後にする。

総一と咲実もその後続く。

こうして3人は地響きがした方へと急いだのであった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

手塚「さっきの地響きは、俺達がいた所から結構近くの方で聞こえた気がしたんだがな」

手塚は急ぎ足で通路を駆け抜けながら、振り向きもせず総一に聞

こえるようにそう言った。

総一「そう遠くはないはずです」

総一も同意見のようだ。

その2人の予想は当たっていた。

手塚が通路の角を曲がったところで、途端に足を止めた。

咲実「きゃっ！」

先に行く手塚が突然止まったことにビックリして、総一と咲実も慌てて足にブレーキをかける。

手塚達の行く先を塞ぐ形で、白っぽい壁が立ち塞がっていた。

この壁は明らかに通路の壁と異なる。見た感じはコンクリートではなく、やたら分厚いすりガラスをイメージさせる。

そして驚きなのは、その半透明の壁の向こう側にかすかに見える、人影の姿だった。

まさか、さっきのPDAに書かれていたことが現実には！？

手塚は、それがただ1枚の壁で対峙しているだけとは考えなかった。

こちら側が前方にしか半透明の隔壁がない以上、その人影が2枚の壁に挟まれているのだろう。

そしてその先、待ち受けるのは……。

その疑問に答えるかのように、前方の白い壁が、少しずつ向こう側に動き出した。

総一「手塚さん、まさかこれって……」

総一はすぐ隣に居る手塚に問う。

手塚「間違いねえ。あいつはこの壁に挟まれてやがる」

その人影は、自身に危機が迫っていることに気づき、焦っているのだろう。手塚達の姿を確認するやいなや、必死で壁を手で叩いて助けを求める。

目を凝らしてよく見ようとするのだが、白く濁った不透明な壁に阻まれ、その姿かたちを認識することは叶わなかった。

分かることと言えば、その人物の背丈が、手塚よりかなり低い、というぐらいだった。

総一「助けましょう!」

総一はそう言いながら、手に持っている鉄パイプを真上に振りかぶった。

そして壁めがけて思い切り叩きつける。



ガキーン！

だが壁はびくともしない。

手塚「待て、御剣！」

手塚は壁にそっち近づき、壁を手の甲で叩いた。

手の甲越しに伝わってくる衝撃と音を敏感に感じ取る。

手塚「こいつは・・・、相当に厚みがあるぞ」

軽く見ても20センチ以上はある。材質は、はつきりとはわからなかったが、総一が叩いた部分が、割れるどころか跡すら残っていない所を見ると、相当強度があることが想像つく。

手塚「鉄パイプじゃこいつを壊すのは無理だ」

総一「じゃあ、どうすればいいんです！」

手塚「他に何か」

だが、その必死のやりとりもすぐに沈黙にかわることとなる。

・  
・  
・  
・  
・  
・

両脇を壁で塞がれる形で閉じ込められた少女、北条かりんは、今自分の身に迫る危機に、恐怖と絶望感を全身に彩らせていた。

なぜ、こんなことになってしまったのか？

私はただ、妹のかれんの見舞いの為に病院へと足を運んでいただけなのに！

気がつけば、見たことも無い無機質なコンクリートの中。そしてその周りを彷徨った挙句、訳もわからず命の危険にさらされている。

今かりんの目に見えるのは、白い双壁と、その向こうにかすかに見える3つの人影のみ。

かりんはこれが何かの夢かとすら思った。

だが、助けを求めた際に壁を数回叩いたが、感じる壁の固い感触は、まぎれもない現実のものだった。

その壁はじわりじわりと迫ってきていた。

かりん「わたしは、わたしはっ・・・!!」

その後の言葉が続かない。

かりんは、何も知ることすら許されず、理不尽な己の運命を呪うしかなかった。

・

・・・

総一と手塚は、言い合いながらも壁ごしに見える人影から目線を外さなかった。

その少女の表情は、手塚達には伺い知ることが出来ない。

そして、それは突如訪れた。

グシャツ！！！！

うつすらと見えていた人影は、前触れなく消え去った。

そして、一瞬にして原型を留めない異物へと変化し、白い壁が一面真っ赤に染まった。

死を迎えるその時まで悲鳴は聞こえなかった。壁が妨害しただけではない。

断末魔をあげる間もなかったのだ。隔壁が自身の身体を潰したのは、ほんの一瞬だったからだ。

咲実「あ・・・あぁっ・・・！！」

総一の後ろに居た咲実は、その人影のあまりにもあっけない最後を前に、膝を折ってその場に崩れ落ちた。

手塚と総一は思考が止まり、視線はそれに釘付けとなった。

移動を終えた壁が止まり、あたりは静寂に包まれた。手塚達はその間が無限にも感じられたのであった。

そして、その静寂を打ち破ったのはPDAのアラームだった。それはこれから始まる戦いの開始の合図であった。

『ゲーム開始から6時間が経過しました。お待ちせいたしました！これより戦闘禁止が解除されます』

・  
・  
・  
・  
・

## 第2話「エクストラゲームの脅威」(後書き)

手塚達の目の前で無残な最期を遂げてしまった北条かりん。それは同時に、この殺戮に満ちたゲームの始まりを示すものであった。

次回は第3話「燦ぶる火種」地響きの音を聞きつけ、他のプレイヤー達が何人か集まってきました。一体誰が現れ、そしてどのように行動していくのでしょうか？乞うご期待

### 第3話「燻ぶる火種」

#### 第3話「燻ぶる火種」

作・桐島成実

現在の状態

「グループA」		PDA	状態	手塚と
の関係				
手塚	義光	(10)	健康	
御剣	総一	(?)	健康	
普通				
姫萩	咲実	(?)	健康	
普通				
北条	かりん	(?)	死亡	
知らない				

手塚達3人は、無残な最後を遂げた、かつて人だった亡骸の前にして、驚きを隠せなかった。

そのせいだろうか？手塚はすぐ後ろに他の人物がいることに、声を聞いて初めて気がついた。

??「マジかよ・・・」

その声に反応して手塚が後ろを振り向くと、そこには騒ぎを聞きつけた複数の人の姿があった。

手塚「あん？なんだ、おまえは」

手塚は、一番前に居た少年に視線を向けた。

身長の違いの影響で、自然と見下ろす格好になる。

長沢「お前こそなんだよ」

長沢は威圧的な目つきで手塚の視線とぶつかる。

だが手塚はあっさりと受け流した。

手塚「ハッ、まさかこんな小さなガキまでいやがるとはな。驚きだぜ」

手塚はわざとらしく両手を上げる。

長沢「なにいつ!？」

『小さなガキ』という台詞は、その事を気にしている長沢にとって侮蔑以外の何者でもなかった。

長沢の眉がつり上がり、その口から怒声が発されようとした時、すぐ後ろにいた女性が止めに入る。

文香「ちょっと！こんな時にケンカしてる場合じゃないでしょう」

文香は2人の間に入って止める。

長沢「けど、こいつが！」

長沢は食い下がろうとするが、文香は冷静な口調でなだめる。

文香「長沢君。気持ちはわかるけど、今はこらえて」

長沢「・・・けっ」

そんな手塚達のやりとりを、後ろでずっと見ていた2人の男の姿があった。

彼らは、揉め事がひとまず収まったのを確認してから、手塚達のところへ歩んでいった。

高山「・・・俺達はこのに居る中で、一番最後にやってきたんでな。一部始終を見たわけじゃない。一応確認しておくが、このPDAに書かれていることが現実に起こった。そう思っくいいいんだな？」

高山は自身の持つPDAを確認しながら厳しい表情をしていた。

精悍な顔つきに鋭い視線。手塚は只者ではないことをおぼろげながら感じていた。

漆山「壁がせりだして、とかいうヤツのことかね？高山君」

もう1人は高山とは対照的な中年で小太りの男性だった。どうやら



この2人は直前まで行動を共にしていたようだ。

高山「そうだ。それで、どうなんだ」

高山は再度尋ねる。

総一達はいまだ固まったままなので返事をしなかった。仕方なく手塚が答える。

手塚「ああ、そうだ。ここであっけなく、な」

手塚はそう言っただけで人間だったものを指す。それはいまだ隔壁に挟まれたまま、抜け出せていない状態にあった。

高山「ふむ・・・」

高山は腕を組み、考え込む仕草をした。

文香「物体圧縮システム。説明を読んだときは冗談かと思ったけど、まさかこんな・・・」

長沢「だから言っただろ、文香の姉ちゃん。これは人を使ったサバイバルゲームなんだって」

長沢はPDAを操作しながらそう言っただけで。先ほど見せたショウクの表情は失せ、どこか興奮している様子が垣間見える。

こいつ、楽しんでやがるな。ふてえガキだ・・・。

手塚はそう思っていたが、自身の口元は無意識の内につりあがって

いた。

そんな時、考え込んでいた高山が、ふとこんなことを口にした。

高山「もしかしたら、この隔壁の向こうにも人が居るかもしれんな」

高山は隔壁の方に顔を向ける。だが2枚の重厚な壁は、その向こうの様子をうかがい知ることが出来ない。

手塚「可能性は十分考えられるだろうさ」

手塚は片手を挙げながら言葉を続ける。

手塚「しかし、今の俺達には確認する術がねえ」

どこか楽しげそうな表情を浮かべる手塚に、漆山が話しかけてきた。

漆山「それはどういうことかね？」

漆山はいまだにこの状況をよく把握してないようだ。

そんな漆山に手塚は説明する。

手塚「いいかいオッサン。この向こう側の壁にも俺達同様に騒ぎを聞きつけた人間が少なからず居るはずだ」

実際近くに居た手塚は、あの時の轟音はすさまじいものと感じていた。地響きや建物の揺れとあわせると、よほど離れていないと気づ

かないものはいないとすら思わせる。

実際ここには手塚を含め、7人もの人間が集まっていた。

手塚「だが、俺達はここが建物のどこかを把握していねえ。轟音を聞きつけてあわててやってきたヤツらばかりだ」

手塚「唯一、それらしい地図がこのPDAに書かれてはいるが、現在位置が示されてるわけでもねえ。仮に分かったとしても、この複雑な通路を辿って向こう側に行っている間に、向こうの連中が立ち去る可能性が大だ」

手塚はそう言い、挙げていた片手を落とす。そして誰の目にもそれが笑みだと分かる表情に変わる。

手塚「それに、向こう側にいる連中が、こちらに攻撃を仕掛けてくるかもしれねえからなあ」

手塚のその発言に、総一の手を握っていた咲実がびくつと反応する。

手塚は横目で総一達をちらりと見つつ、肩をすくめる。

文香「・・・とにかく、まずはお互いの経緯とルールの確認をした方がよさそうね」

ずっと厳しい表情をしていた文香がそう提案する。

手塚「ああ、それには賛成だぜ」

こうして手塚達7人は、近くの部屋へと移動した。

手塚はその道中、PDAの地図を見つつ、今まで通ってきた道を元に現在位置を割り出していた。

手塚はここに来るまでの道順を把握していた為、近くの部屋で自己紹介とルールの確認が終わるまでの間に、自分の居る位置を知ることが出来た。

もつとも、それを他の連中に知らせることはしなかったのだが。

・  
・  
・  
・  
・  
・

今この部屋にいるのは俺をはじめ、御剣と咲実、長沢のガキと文香、それと高山の大将と漆山のオッサン。

ルールは、7人もの人数のおかげですべてを知ることが出来た。

もはやここに居る必要はない。そう結論づけた手塚は、木箱に座っていた腰を浮かせ、立ち上がった。

高山「どこへ行く気だ？」

そんな手塚を鋭い眼差しで制したのは、意外にも寡黙な高山だった。

手塚「おいおい、大将。俺の話を聞いてなかったのかい？」

手塚はわざとらしく両手をかざす。

手塚「さつきも言っただろ？あの隔壁の向こう側に居る連中が、俺達を襲うかもしれないってな」

総一「そんな、まさか」

手塚の大胆な発言に、総一はうろたえる。

手塚「どうだかな？向こう側の連中が俺達を襲うとすれば、真っ先に来るのはここだぜ」

手塚は薄ら笑いを浮かべる。この部屋は例の隔壁の場所から離れて  
いるわけではない。隔壁の場所から一番近い部屋といっても過言で  
はない場所だ。

襲おうとしている人物がいれば、ここに来るのも時間の問題だった。

長沢「へっ、俺がその立場だったら、真っ先にお前を襲ってやるぜ」

長沢はそう言っ手塚に挑戦的な態度をとる。自己紹介のうちに2  
度目の揉め事を起こした影響で、すっかり長沢は手塚を敵視してい  
た。

手塚「おー、怖い怖い。じゃあさっさと逃げないとな」

手塚は片手を振りながら、ドアの前へと歩んでいく。

文香「ちょ、ちょっと手塚くん。待って、みんなで協力すれば」

長沢「いいじゃん、行かせてやればさ。手塚のヤツなんかと手を組む気なんて初めから無かったし」

長沢はそう言って手塚とは別のドアの方へと進んでいく。

文香「長沢君。あなたまで1人で行く気なの!？」

文香は必死で止めようとするが、手塚も長沢も足を止めようとはしない。

手塚「じゃあな。機会があったらまた会おうぜ」

もっとも、その時は遠慮なく首輪を作動させてやるけどな。

手塚は心の中でそう覚悟を決めていた。

彼のPDAは『10』だ。首輪を外す為には他人の首輪を5個作動させなくてはいけない。

いまだルールがすべて真実だという確証はないものの、このままここに居ても意味がない。だから後ろを振り返らずに部屋を出て行った。

そして通路に出た所で、さっきまでの余裕な態度を素早く切り替え、手塚は素早く行動を切り替えた。

手塚「面白い。せっかくだから、このゲームに乗ってやろうじゃないか。くくくっ」

手塚の邪な笑みは、誰もいない通路の中で不気味に光っていたのであった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

ここからの手塚の行動は素早かった。彼が最初に行ったのは武器の確保だった。

御剣のヤツは鉄パイプを持っていやがった。こちらでも武装する必要がある、と判断したのだ。

とは言うものの、手塚が今まで見てきた部屋には、家具等しか置かれておらず、まともな武器があるようには見えなかった。

事実、手塚はあれからいくつかの部屋を探索したが、古ぼけた日用品や雑貨類ばかりで、使い物にならないものばかりだった。

手塚「チッ、こりゃあ探索するだけ時間の無駄のような気がするな・  
・  
」

手塚はふと腑に落ちないことに気づいた。

手塚「しかし、俺達をここに連れて来た連中は何が狙いだ？」

自分でこの建物に來た訳ではない以上、当然ながら誘拐犯は存在するはずだ。

最初に死んだあの人物の様に、俺達を殺すのが目的ならば、あのよ  
うな仕掛けを施す必要はないように思えた。

もっと確実で、簡素な方法はいくらでもあるはず。なぜだ？

疑問は他にもある。

ルールの内容を考えると、俺達に殺し合いをさせようとするのは分かる。

だがそれなら、わざわざこんなPDAを用意する必要はないはずだ。

単に殺し合いをさせるなら、PDAの様な請った精密機械なんか作らず、逆に武器をあちこちに置いていてもおかしくはないはずだ。

殺し合いだけが目的じゃないのか、ここに連れて來た連中は……？

手塚の疑問に答えるものはいない。だが、想像はつく。

手塚「要するに俺と同じ考えってこと、か」

楽しんでやがるんだろう。俺達をじつくりといたぶりながら。

手塚のその予想は、ゲームが進行するにつれ、確信へと変わってい



くことになるのであった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

途中で探索に見切りをつけた手塚は、家具を壊して即席の武器を作り、上の階に上がるべく階段へと向かっていた。

もしかしたら上の階には少しはまともな武器があるかもしれない。それは希望的観測ではあったが、このまま部屋を探してもらちがかないと思った。

手塚が最初に見つけた階段は、2階へと続く上り階段であった。

手塚は辺りを見渡し、誰もいないことを確認したのち、階段を上がつていった。

彼自身はまだ気づいていなかったが、彼が上る階段以外の他の5つの階段は、すべて障害物で塞がれていたのであった。

そう考えると、最初に障害物のない階段を見つけた手塚は、今の段階では運が良かったといえるかもしれない。

そして、階段を上りきった手塚は、ホールの壁にもたれかけてPDAを操作している人物の姿が目に入った。

??「えっ!?!」

その人物は、手塚が早くもここに来たことに一瞬驚きの表情を浮かべた。

だが、それはすぐに失せ、手塚の方へと顔を向ける。

手塚「へえ、先客がいやがったとはな」

対する手塚は、手に持っていた木の棒を持ち替えた。

郷田「・・・思ったよりも早かったわね」

郷田は手塚には聞こえないようにそう呟いた。

・  
・  
・  
・  
・

### 第3話「燻ぶる火種」（後書き）

総一達6人と別れ、単独行動をとった手塚。そして郷田との対峙。さて、手塚そして郷田はどのように動いていくのでしょうか？

次回は第4話「油断大敵」手塚、郷田、長沢、そして残された総一達5人。彼らを待ち受けているのは果たして・・・？乞うご期待

第4話「油断大敵」

第4話「油断大敵」

作・桐島成実

現在の状態

PDA

状態

手塚

との関係

手塚 義光

(10)

健康

「グループA」

御剣 総一

(?)

健康

普通

姫萩 咲実

(?)

健康

普通

高山 浩太

(?)

健康

普通

漆山 権造

(?)

健康

普通

陸島 文香

(?)

健康

普通

長沢 勇治

(?)

健康

険悪

北条 かりん

(?)

死亡

知らない

階段を上がり、ホールへと足を踏み出した手塚の視線は、目先に居る女性、郷田の方へと向けられていた。

その目は、さながら獲物を見つけた肉食獣の様な鋭さを秘めていた。

手塚「一応聞いとしてやるが、お前、ここで何してる？」

手塚は奇妙なほどの薄ら笑いを浮かべつつ、郷田の元へ一歩ずつ近づいている。その間、郷田が武器らしいものを手に持っていないことを確認した。

郷田「さあて、何をしてたのかしらね？」

一方の郷田も、余裕な表情で手塚の問いを受け流す。そして自然な動作で手に持っていたPDAをポケットにしまう。

とぼける郷田に対し、手塚は鋭い眼光を郷田に浴びせる。

手塚「そうかい、じゃあ」

手塚は木の棒を片手に掲げ、自身の肩を2、3度叩いていた。

そしてあと2、3歩で郷田に届くまで歩んだところで、その動きがピタリと止まる。

手塚「俺の為に、死んでくれや！」

手塚は自らの表情を邪悪なそれへと変貌させた。

そして持っていた木の棒を素早く両手に持ち替え、頭に上げて振りかぶった。

その事を予想していた郷田は、PDAをしまう為に手を入れていたポケットから、あるものを取り出した。

そして、それを器用に片手の指で動かす。

その手に持つ先端は、銀色に輝いていた。

手塚「なにっ!？」

折り畳み式のナイフだど!？

驚く手塚に対し、郷田は突撃してくる手塚に対し、ナイフを前に突き出した。

木の棒を振り下ろそうとしている手塚に対し、真正面にナイフを突きつけた郷田。どう考えても郷田のナイフの方が先に当たってしまう。

手塚「ぐおおっ！」

それを瞬時に悟った手塚は、振り下ろそうとしている身体をねじって、左に身体を傾けた。

今の状態では振り下ろすことを止められない。ナイフが当たらない位置に避けるのが精一杯だった。

ガッツ！！

そして木の棒が床に叩きつけられる。左に避けたことで、ナイフも木の棒も互いに命中しなかった。

だが無理に身体を傾けたことで、手塚は態勢を崩してしまう。

手塚「チィッ」

手塚は舌打ちしつつ、郷田への視線を外さず態勢を立て直そうとした。

郷田「はぁあっ！」

郷田は手塚が態勢を崩したことを瞬時に見抜き、手の空いている方の手のひらを床につけ、身体全体を伏せた状態で足払いをかけた。

手塚はそれに気づき、両足のかかとに力を入れ、郷田のいない方へ思い切りジャンプする。

ビュン！

うまく回避した為、足払いは空を切った。

だが、そのせいで郷田との間合いが開いてしまった。

さらに追い討ちをかけるように、郷田は手に握っていたナイフの尖

端を手塚に向けて投げつける。

手塚「ぬおっ!？」

手塚は木の棒を横になぎ払い、ナイフを叩き落とした。

手塚「くっ、やるじゃねえか！」

手塚が毒づいている間に、郷田はきびすを返して通路の先へと走っていった。

手塚は追うべきかどうか一瞬考えたが、リスクが高いと身をもって感じた彼は追うことをためらった。

その事に気づいた郷田は、再びPDAを取り出して画面を操作した。

すると、手塚と郷田の間の通路から、何かが勢いよく降りてきた。

郷田「じゃあね」

郷田は一瞬だけこちらを振り向き、そう言った。

ガシャーン!!

それは防火シャッターだった。郷田の姿はそれに遮られ見ることが出来なくなった。

手塚は予想外の敵の反撃に、しばらく呆然としていた。



手塚「何者だ、あの女・・・」

素人が格闘技を習ったというレベルではない。明らかに玄人、しかも相当戦い慣れているということが、一連の動作を鑑みて分かる。

しかも、さつきから聞くあの女の言動や一連の行動から、俺の知らない何かを知っている気がする。

手塚「こいつは、もっと手堅く行く必要がありそうだな」

今の経験は手塚にとって、油断が命取りになるということを十分に思い知らせる結果となった。

この分だと、一見か弱そうな女性や、長沢のガキなんかが相手でも慎重に行く必要があると手塚は考えた。

手塚「やれやれ、面倒なことになってきやがったな・・・」

だが手塚は面倒くさがっているわけでも、恐怖しているわけでもない。むしろその表情は楽しげそうだった。

・  
・  
・  
・  
・

郷田「ふう、今は結構危なかったわね」

郷田は手塚の姿がシャッターの向こう側に消えたのを確認すると、

距離をとる為にしばらく移動した。そして小部屋の中に逃げ込んだ後、深いため息をもらした。

郷田「エクストラゲームの結果報告を、ディーラーから聞いていたとはいえ、油断してしまったわね・・・」

郷田は自らのミスを悔いていた。なぜなら、さっき足払いをかけた際に、ヒールの高い靴を履いていたが為に、足を捻ってしまう失態を犯してしまったからである。

郷田「つく！」

さきほどは必死だった為痛みは感じなかったが、次第に痛みが鮮明になっていく。

動けないほどではないが、さっきの様な戦闘を行うのはほぼ不可能とっていいだろう。

郷田「最初の通信で、ディーラーに怒鳴りつけたけど、これじゃ人の事は言えないわね」

郷田は何度かため息をつき続ける。

郷田「この分じゃ、私の首輪を解除するのがやっとかしらね・・・」

郷田のPDAは『5』である。自らの首輪を解除する為には、PDAに記載されているチェックポイントである24箇所をすべて通過する必要があった。

その為、必要以上に動き回らなくてはいけない事が分かっている郷田は、少し焦っていた。

他のプレイヤーに出会わない事はゲームマスターとしての権限を利用すれば出来ることだ。だがしかし、自らの首輪は自らの足で外す必要があった。

でなければ、ゲームの体裁を崩すことになってしまうからだ。

郷田「グチっててもしょうがないわね。とりあえず現状の把握つと」

郷田は頭を切り替え、本来の仕事を果たすことにした。

PDAを操作して、他のプレイヤーの現在地を確認する。

郷田「この5つの反応が、御剣君達ね」

そこには5つの光点が示されていた。ちょうど1階の階段を上がってくるところだった。

郷田「みんな思ったより行動が素早いわねえ・・・」

ディーラーからの報告とあわせると、総一達5人はそのまま行動を共にしているのだろう。

郷田「うーん、これはちょっと多すぎるわよね」

郷田はPDAを再び操作した。

郷田「これで分断の準備は整った、と。あとは・・・」

連中にゲームの恐怖を植え付ける為には、もう一つアクションを加える必要があった。

郷田「私が襲撃を仕掛けることは出来ないし、かといって分断だけではすぐに合流される危険性も・・・」

考えあぐねていると、5つの光点より少し後ろの方に、追従する形で1つの光点が総一達の後ろにあった。

郷田「これに賭けてみましょうか」

この光点が誰かは、PDAでは伺い知ることが出来ない。ディーラーに確認を取らせる時間もない為、ハッキリとは分からない。

まあ、ダメだった場合は次の手を考えればよし。

郷田はそう決断し、作動のスイッチを押したのだった。

・  
・  
・  
・  
・

総一「どうなってるんだ、これは・・・！」

総一達5人は、2つの柵に阻まれる形で、3つのグループに分断されていた。

2枚の柵の左側に高山と漆山、右側に文香、そして2枚の柵の中央に総一と咲実が、それぞれ分断されていた。

総一が柵に手をかけるが、金属製のそれはビクともしない。シャッターと違い隙間がある為お互いの姿は確認できるものの、とても人が通るほどのスペースはない。

高山「どうやら、罫が仕掛けられていたようだな」

高山は冷静に判断する。

文香「なんてこと……。みんな、無事？」

文香は柵の向こう側にいる他の4人に呼びかける。

漆山「け、怪我はないが、これは一体どうしたらいいんだ？」

漆山は落ち着きのない様子で、すぐ横にいる高山と柵を交互に見渡す。

すると突然、総一達が居る場所の天井が開き、そこから梯子が下りてきた。

総一「これは、梯子を上れってことか？」

総一は梯子が下りる様子をじっと見ていた。咲実はどうしていいかわからず、ただ総一とつないでいる手をギュッと強く握り締めた。

高山「何か柵を上昇させるスイッチなんかはないか？」

高山はまわりの壁を調べる。漆山もそれに続く。

だが見る限りそれらしきものは見当たらない。

文香「これじゃどうしようもないわね……。とりあえず、どこかで合流した方が」

文香は総一達の方を向き、総一達は梯子の方、高山達は壁の方を向いていた。

だからその存在に気づいたのは、事が起こった後だった。

シュツ

文香「!?!」

文香の身体のすぐ横を一瞬何かが通り抜けた。それは文香の背中の方角から来たように思えた。

ガキーン!

そしてそれは文香の前の柵へと接触した。

軌道がズレた飛来物は、真っ直ぐ総一達の元へと向かっていった。

総一「なっ!?!」

咲実「え……。?」

2人は突然の出来事に状況が飲み込めず、身動き一つしなかった。  
だからそれをかわすことが出来なかった。

ザシュツ！！

そして、それは身動き一つしなかった咲実に突き刺さった。

咲実は一瞬何が起こったの分からなかった。だが、自らに刺さった  
それを目にした瞬間、状況を把握した。

咲実「き、きやあああああつ！！」

それは痛みによる悲鳴ではない。自らの身に起こった出来事による  
驚愕の悲鳴だった。

総一「咲実さん！！」

総一は咲実の異変に気づき、梯子を見ていた視線を瞬時に咲実の方  
に向けた。

総一「な！！？」

咲実の右のふとももには、長細い何か突き刺さっていた。これは、  
矢！？

咲実「あ、あぐっ！」

驚きに続いて痛みが全身に駆け巡ったのだろう。咲実はうめき声を  
あげて体勢を崩す。

文香「後ろから！？え、あ、あなたは・・・」

文香は飛んできたであろう後ろを振り返り、その表情は驚きに染まっていた。

長沢「へへっ、とりあえずは命中つと！」

それは先ほど総一達と別れた、長沢の姿だった。

彼は両手にクロスボウを持ち、それを文香達の居る方へと向けていた。

矢がなくなったクロスボウを床に捨て、あらかじめ床に置いてあったもう一つのクロスボウを手を取った。

高山「！？まずいぞ、避ける！」

最初に我に返った高山は、全員にそう呼びかける。

長沢「さっきは狙い通りにはいかなかったからな。次は確実に当てるぜっ！」

長沢の狙いは1発目同様、最前列に居る文香だった。

文香「くっ！」

文香はとっさに相手の射撃方向を素早く見切り、射程圏内から逃れた。だがその瞬間、文香の後ろには総一と怪我をした咲実がいることを思い出し、慌てて彼らを庇う為に、彼らの真正面の位置へとジ



ヤンプする。

シュッ

そして2発目が発射される。

ガキーン！

文香がとっさに動いた為、長沢の手元が狂い、狙いは大きく外れた。

ガッ！

狙いの逸れた矢は、そのまま壁に突き刺さる。

長沢「ちっ、思ったよりすばしっこいなあ」

長沢が持っているクロスボウは2つ。だから次を撃つ為には装填しなくてはならない。

長沢「次はジツとしてくれよなっ！」

長沢は好き放題いいながら、矢を装填し始める。

文香「今しかないっ！」

柵に阻まれている以上、後ろにいる4人にはどうにも出来ない。今長沢を止める事が出来るのは文香しかいなかった。

だから、装填する隙を狙って文香は長沢に突進した。

総一「咲実さん！しっかりしてください！！」

総一は、もはや茫然自失の咲実に向かって必死に呼びかける。

咲実「あ、うう・・・」

だが咲実は総一の呼ぶ声に、ぴくりとも反応せず、ガタガタと震え続けていた。

総一「い、一体どうすれば！」

高山「考えるのは後だ！とりあえず梯子を上って逃げろ！」

高山はそう促すが、大切な人に生き写しの咲実の危機に、総一は完全につるたえていた。

総一「い、今すぐ手当てを！」

高山「馬鹿言うな！一刻も早くここから離れろ！」

総一「で、ですが・・・！」

なおも慌てふためく総一にしびれを切らした高山は、とつさに柵の中に手を入れ、叫び続ける総一の口を塞ぐ形で、無理やり閉じた。

そして驚きの表情を見せる総一に向かって叫ぶ。

高山「いいか、今嬢ちゃんを助けられるのは少年、お前だけだ！お前が彼女を奮い立たせるんだ！」

総一「・・・!!」

高山のその声は重く、それでいてしつかりした口調だった。

そして、高山は塞いでいた手をのける。

総一「わ、わかりました」

総一はようやく冷静さを取り戻し、今だ我を失っている咲実を担ぎ上げつつ、優しくゆっくりと語り掛ける。

高山「3階で待っている、俺達がそこに行つて合流する!」

高山はきびすを返して、通路の奥の方へと駆け出した。

漆山「た、高山君、待ってくれえ」

漆山も慌てて高山を追いかける。

その後、誰も犠牲者を出さずに乗り切ることが出来たのは、ひとえに文香が長沢をつまき追い払ったおかげであった。

・  
・  
・  
・  
・

#### 第4話「油断大敵」(後書き)

総一達の分断、総一と咲実は苦心の末3階へ、高山と漆山は2階、文香と長沢は2階の反対側の通路へ。

そこに手塚は、そして他のプレイヤー達はどのように接触し、どのような展開を見せるのでしょうか？

次回は第5話「残酷という名の足枷」タイトル通り残酷と言えます・  
・。どうなるのかは次回

# 第5話「残酷という名の足枷」

第5話「残酷という名の足枷」

作・桐島成実

現在の状態

PDA

状態

手塚

との関係

手塚 義光

(10)

健康

「グループA」

御剣 総一

(?)

健康

普通

姫萩 咲実

(?)

足を負傷

普

通

「グループB」

高山 浩太

(?)

健康

普通

漆山 権造

(?)

健康

普通

陸島 文香

(?)

??

普通

長沢 勇治

(?)

??

険悪

郷田 真弓

(5)

足を捻挫

敵対

北条 かりん

(?)

死亡

知らない

郷田とのいさかいの後の手塚は、より一層慎重な行動を心がけていた。

まわりを警戒しつつ、まず手塚が行ったことは、やはり適当な部屋を探索する事からだった。

手塚「さっきの女はナイフを所持していやがったからなあ」

手塚が持つ木の棒では心もとない。それに2階と1階に違いがあるのかも確認しておきたかったという理由もある。

そうして手塚がいくつかの部屋を調べていく内に、それを発見した。

手塚「これだこれだ。こういうのが欲しかったんだよ」

手塚は思わずニヤリと笑う。その手には大型のサバイバルナイフが握られていた。

そのナイフの鞘を抜くと、キラリと光るナイフの切っ先が姿を現す。

手塚「案の定こいつがありやがったか」

しかし手塚はそれを予測していたのだろう。その目には動揺の色はかけらも無い。

そしてナイフの感触を確かめるかのように、ナイフを横になぎった  
り、前に突き出したりした。

手塚「こいつあ、扱いやすくていいな」

一通り堪能した後、ナイフを鞘に戻す。そして、他に何か無いか再び物色した。

手塚「それとこいつは・・・」

別の木箱には、食料と思わしきものがあつた。

缶詰めがいくつかと、飲料水が入ったビン。それと乾パンもあつた。

ご丁寧なことに、そこに割り箸なんかも添えてあつた。

手塚「へっ、用意がよろしいことで」

手塚は半ば呆れていた。ここに連れて来た連中は一体何を考えていやがるんだか。

手塚「まあいい、ちょうど腹がすいていた頃合だったしな」

手塚はドアの前に側にあった家具を移動させ、すぐには出入り出来ないように封鎖した。

手塚「さてと、それじゃ一時の晚餐といくか」

手塚は缶詰めを一つ空け、その中身のサバの煮込みを一口放り込んだ。

・

・

・

総一達5人が分断され、散り散りになった場所に、1人の人物が近づいてきた。

麗佳「・・・これは」

その人物、矢幡麗佳は目の前に下りている2枚の柵に注目していた。

麗佳「ここで何かがあったみたいね」

そう言うって思案する麗佳は、最初のエクストラゲームの際に郷田と幼い少女の2人と出会っていた。

そして2枚の隔壁がせり出して対象者を押しつぶすというペナルティが開始された際、麗佳達3人は総一達とは隔壁を挟んで反対側の位置からその様子を目撃していた。



つまり2枚の隔壁に阻まれて分からなかったが、すぐ近くに手塚達と麗佳達が居たことになる。

それを目撃し、ゲームが本物であることに気づいた麗佳はいち早く郷田達と別れ、行動を開始した。

幸か不幸か、今の所は誰とも接触しておらず、話すことも戦うこともなかった。

そんな経緯があり、今に至る。

柵を調べていた麗佳は、2枚の柵の間にかすかに血痕があることに気がついた。

麗佳「誰かが襲われた、ってことかしら？」

麗佳の顔が自然と厳しいものへと変わる。

すぐ横には梯子がある。2枚の柵に阻まれて怪我をした誰かは、そこから上の階に上っていったということは容易に想像出来る。

その血痕を凝視していると、突然それは起こった。

麗佳「え!？」

ガラガラガラ・・・ガコン

麗佳の目先にあった2枚の柵が、突如上昇を開始したのだ。

柵は完全に上がりきり、残されたのは血痕と、そのすぐ横にある梯子だけだった。

麗佳「私を誘っている・・・？」

この梯子を上れと、そして怪我をしている誰かの元へ行けと。

何者かのそんな意図が読み取れた麗佳は、言い知れぬ不安を覚えていた。

上るべきか、避けるべきか。

梯子を見上げる麗佳だったが、ふと右手が自身の腰の部分に触れる。

そこには先ほど見つけたサバイバルナイフが下げられていた。

麗佳「・・・いよいよ覚悟を決める必要がありそうね」

麗佳は自身を鼓舞した。それは先ほどから感じている不安を紛らす為だった。

人に襲われる恐怖、逆に自らが襲う恐怖。死んでいった最初の人間。そして何者かの意図。不安な要素ばかりだった。

そして麗佳は意を決したように、その梯子に手を掛けた。

・  
・  
・

・・・

食事と休息を終え、通路を警戒しつつ先に進んでいた手塚は、煙草を燻らせつつPDAを確認していた。

手塚「もう少しで3階か」

思ったより早かったな。何か予期せぬ自体では発生するかと思っていたが、すんなりと階段に着くことが出来た。

手塚「さっき見つけた階段は、完璧に塞がれちゃっていたからなあ」

手塚は使える階段が各階に1つずつしかないことに、塞がれた階段を目撃した際に気がついていた。

手塚「ここで待ち伏せして獲物を待つ、という手もあるが・・・」

今後の方針を考えつつ階段が間近に迫っていた。

ここから手塚はより一層警戒を強めた。

なにせ、逆に誰かが階段で待ち伏せしている可能性があったからだ。

そして階段のあるホールの一つ前の通路の角を曲がった際、それを発見した。

手塚「・・・ん？」

そこで手塚が目撃したのは、通路にワイヤーらしきものが張り巡らされていた。

それはまるで編み物のように幾多もの数が床を埋め尽くされていた。

手塚「何かの罠か？それにしちゃあ・・・」

あまりにもあからさま過ぎる。手塚が一目見てそれがあると認識出来たぐらいなのだから。

これでは罠とは到底言えないだろう。まるで見つけてくれといわんばかりのシロモノだ。

手塚「かと言って、何もないと考えるのは無理があるな」

手塚は迷っていた。この罠の狙いがイマイチ読めなかったからだ。

ワイヤーは網目のように張り巡らされているが、所々にそれが途切れていた。

それはちょうど人間の歩幅ぐらいの間隔で開いており、その間に足を通して歩いていけばワイヤーに触れることなく抜けていくことが出来そうだった。

手塚「だが待てよ。本当にワイヤーに触れば罠が作動するのか？  
一体どんな・・・？」

暫く考えあぐねていた後、やむを得ず通路を迂回することにした。

手塚「遠回りになっちまうが仕方ねえか。下手に作動させちまうと何があるかわからねえしな」

幸い先行していた手塚は、まだ時間的に随分と余裕があった。

ゲーム開始から約14時間が経過していた。ルール通りだとすれば、1階が進入禁止になるまであと10時間はある。

さらに2階が進入禁止になるにはいくらか時間があるだろう。

そう結論づけた手塚は、身を翻して通路を戻っていった。

そうして再び通路の角を曲がり、しばらく進んだ手塚だったが、進んでいる通路の前方に人の足音がする事に気がついた。

手塚「ん？」

手塚は警戒し、素早く横へと曲がる通路へと進み、そこからやって来る人物の様子を伺った。

足音がだんだんと近づいていって、その人物が通路の先へと姿を現した。

手塚「あいつは・・・」

たしか最初に出会った、あの受付嬢だ。

どうやら見たところ彼女1人だけのようだった。

そしてその人物は手塚の存在に気づくこともなく、急ぎ足でそのまま階段のある通路へと進んでいった。

手塚「妙だな」

手塚はその様子を疑問に思っていた。なぜなら警戒している様子がまるで伺えなかったからだ。だからこそ手塚があんなに早くに気づいたともいえるのだが。

手塚「襲われない自信がある、と言うよりどこか慌てている様に見えるが」

どちらにせよ、以前の不審な女性との一件がある。手塚はさっきの様にいきなり襲うことはせず、慎重にその女性の後をつけていった。

するとその受付嬢は最初に手塚が向かった階段の方へと歩んでいった。

当然罫もそこに存在する。

そのことに気がついた手塚は、その口元を緩ませた。

・  
・  
・  
・  
・  
・

文香「これは・・・？」

文香は、先ほど手塚が目撃した罨に、驚きの表情を作っていた。暫く呆然とした後、しゃがみこんでその罨をじっくりと調べる。だがしかし、何かが分かるわけでもなく、その表情は困惑に染まっていた。

文香「早く高山さん達と合流して、総一君達を助けないと。・・・心配だわ」

文香の脳裏には、先ほど分断された時の出来事がよぎっていた。

あの時咲実はふとももを負傷した。

はつきりと確認したわけではないが、あれでは歩くことすら困難かもしれない。

もし怪我をしている状態で誰かに襲われでもしたら。手当てもせず、に走ろうとすれば激痛が走るはず。

そうした不安を押し殺しつつ、今自分がどうするべきかを文香は考えて行動してきた。

まず、同じ2階で別れた高山さん達と合流し、それから総一君達の救助に向かう。

となると問題は、どこで高山さん達と合流するかだが、それは必ず通るであろう階段が一番だということは状況から見て明白だった。

だが高山さん達と階段の位置関係を見ると、自身が急いで階段へと歩まないことには、行き違いになる可能性が高い。だから自然と急ぎ足でここまで来ていた。

しかしながら、そこに罠があらかじめ仕掛けられているとは、さすがに想定していなかったのである。

文香「別の通路から階段に行くことも出来るから、高山さん達はもう階段の所にいるかも。とは言っても、このまま闇雲に渡るわけにもいかないわね」

文香は顎に手を当てて暫く考えていたが、

文香「近くの部屋から何か持ってきて、投げつけてみようかしら？」

文香にとっては通路を迂回する余裕はない。だから罠の真意を確かめる為にそう決めた。

そして通路を翻そうとしたその時に気がついた。

手塚「いんや、その必要はないぜ」

文香「！手塚くん！？」

文香は驚きの声と共に思わず身構える。なぜなら文香が居る場所からある程度離れた位置から、彼がその右手に刃を剥き出しにしたナイフを持って構えていたからだ。

手塚「アンタが代わりにそこを渡ってくれば済むことさ」



手塚はそう言いつつ余裕のある表情で、しかし眼光だけは鋭く文香を貫いていた。

そして手に持つナイフを軽く揺らして挑発する。

文香「くっ・・・！」

文香はその様子に、到底友好的に事が終わるとは思えなかった。

目の前にいるこの男は、私を生贄にするつもりだ。私を渡らせ、畏にかけるつもりなのだ。

文香はとつさに自身の所有物を探る仕草をする。だが不幸な事に、この時文香は武器らしいものは何一つとして持っていなかった。

そしてその先に待ち受ける自分の運命に、唇をぐつと噛み締める。

手塚「何があつたか知らねえが、もうちょっと自らの身を案じるべきだったな」

手塚の口元から笑みがこぼれる。それは見る人にとっては恐怖を与えるしかない冷徹な笑みだ。

手塚はナイフを前方に構えたまま、間合いから大きく外れた位置で静止していた。

その距離を完全に詰めるには、全力で走っても数秒は掛かる。

これじゃ、隙について逃げ出すことも出来ない。

文香はこの男が、どうしてもこのワイヤーの罠を渡らせるつものなのだと気づいていた。そしてその事に恐怖と絶望を覚える。

文香「このままこうしていても、埒があかない。どうすれば・・・」

大声で近くにいるかもしれない高山さん達に助けを呼びかける？

でもそんなにタイミング良く来るとも思えないし、逆に新たな敵を呼び寄せる可能性の方が高い。

文香「渡るしか、ない・・・？」

文香は手塚と対面しつつ、背後にある罠について必死に考えていた。

手塚との距離を考えると、時間を掛けずに早く渡れば、追いつかれることなく逃げ切ることが出来そうに思えた。

問題はこの罠の性質だった。

あのワイヤーは結構な強度を持ち合わせているように見えた。人が足を引っ掛けたくらいでは切れることはないだろう。

振れるだけで作動する可能性も考えたが、網目の様な数のワイヤーがすべてそうなら、何らかの要因で誤動作する可能性が高い。

文香「と、すると、もしかしたらワイヤーの隙間にあるあの穴こそが、罠？」

文香は行き着いた考えがそれだった。

そうして1分ほど過ぎただろうか。手塚はさらに文香を煽る。

手塚「さあ、どうする文香さんよ。このまま何時間も仲良く一緒に居てくれんのかい？」

文香「面白いことを言ってくれるわね。冗談じゃないわ！」

そう毒づく文香だったが、その声は焦りを含んでいた。そして先に動いたのは文香だった。

文香「く・・・、一か八か」

文香は意を決し、ワイヤーの上へと足を掛けた。

何かが起こる様子はない。

文香は恐る恐るそのワイヤーの上にその身を乗せた。

だが結局何も起こらなかった。

文香「ふう・・・」

文香は思わず深いため息をついた。寿命が大きく縮んだ感じがした。

つくづく自身をないがしろにした事を嘆いていた。

文香は手塚から目線を外さず、慎重にワイヤーの上を後ずさりし始めた。

手塚「なるほど、そうやって渡るのか」

手塚はことさら感心したようにそう言っただけ。

その間口元はずっと緩んだままだったが、ふとその形が三日月状のそれへと変わる。

手塚「せっかくだから、その穴に足を入れたらどうなるか試してみてくれや」

手塚はそうあざ笑う。

文香「そうね。あなたがココを通る時に入れてみれば」

文香の受け流しが、一瞬にして途切れる。

手塚はとたんに全力疾走して間合いを詰めだしたのだ。

文香は急いで、かつ慎重にワイヤーの上を渡っていたが、もう少しで渡りきれるところで、手塚が罾の前まで迫り、ナイフを構えなおして、刃先を文香めがけて投げつけた。

文香「な!？」

文香はとっさにそのナイフをかわす。ナイフはそのまま文香の横を通りすぎ、彼方へと飛んでいった。

文香「つと」

文香は体勢を崩したが、なんとか穴には落ちずに済んだ。

手塚「ほお、ならばコイツで！」

手塚はずつと後ろに回していた左手を前に出す。

そこには先ほどの晚餐で手に入れた空ビンが握られていた。

それを文香めがけて投げつける。

文香「きゃあっ！！」

空ビンは体勢を崩した文香の顔面に直撃する。その衝撃で一瞬視界がぐらついた文香はその場で2歩ほど足踏みする。

なんとか体勢を立て直そうと踏ん張ろうと左足を前に出した時、先ほどぶつけられてワイヤーの上に落ちた空ビンを誤って踏みつけてしまう。

文香「あっ　！？」

文香がその事に気づいた時、もう手遅れだった。

踏ん張った足を取られた事で、完全に身体は宙に投げ出され、頭からワイヤーの穴へと落ちてしまった。

すると次の瞬間、

ガチリッ！！

上半身が床と密着した文香に向かって、勢いよく何かが噛み付いた。

文香「！？きゃああっ！！」

手塚「なにっ！？」

思い通りに事が進んで内心喜んでいた手塚だったが、示された結果に思わず驚きの声を挙げる。

それは狩猟に使われるような捕獲用の罠だった。

形はギザギザした金属製の罠で、中央の金具に触れると肉食獣の噛み付きの様に真っ二つに噛み合わされ、ギザギザが噛みついたものに食い込むというものだった。

それがワイヤーの下にいくつも仕掛けられていた。

文香「くっ！あ、ううっ！！」

捕獲用のこの罠は命を奪うようなものではない。噛まれても怪我をする程度だった。

だが、その罠は無情にも文香の左肩と右の二の腕に噛み付いていた。

文香は上半身を固定され、動くことすら許されなかった。

手塚「やれやれ。連中とんでもない罠を仕掛けやがるぜ」

ただ殺すだけではなく、じわりといたぶる罠。このような罠を仕掛けた連中の底意地の悪さは相当なものだ。

そんなものがこの先いくつも仕掛けられていると思うと、さしもの手塚でも身震いをせずにはいらなかった。

手塚は一度周りの様子を伺い、危険がない事を確認すると、ゆっくりとワイヤーの上を歩いていった。

ワイヤーを踏み外すまいと確実にワイヤーの位置を確認していたが、その時、今も激痛と絶望に囚われ続ける文香の姿が再び目に入った。

その首に巻かれている首輪は、今も健在している。

手塚「・・・せめてもの救いだ。楽に死なせてやるか」

このままにしているても、死ぬまでには相当な時間がかかるだろう。命が少しずつ削られる様を考えれば同情しないわけでもない。

手塚は自身のPDAを手を持ち、床と捕獲用の罠に触れない様につつ、細心の注意を払いながら、文香の首輪へと接続した。

『あなたは解除条件を満たすことが出来ませんでした。15秒後にペナルティが開始されます』

無機質な電子音声为首輪と文香の持つPDAから流れてくる。

PDAはどうやら、文香のポケットに入っているようで、取り出すとしたら、文香自身を動かさなければならぬようだ。

手塚「さすがにPDAは回収不可能か。まあしょうがねえ」

手塚はあっさりとPDAを諦めた。

手塚「あと15秒の辛抱だ」

手塚はそう言い残し、ワイヤーの罠をすべて通りきった。

そして、文香のいる位置からある程度距離を置き、その様子を伺った。

手塚「さて、何がどうなるか」

あっという間に15秒が経過した時、それは起こった。

最初に目に入ったのは、壁から出てきた機関銃だった。

黒い塊に見えるそれは文香のいる位置へと向きを変え、そして

ズガガガガガッ

そこから弾が発射された。

それは文香の身体を貫いた。

さらに、それはワイヤーを裂き、床にいくつもの穴を作っていた。



それが引き金となり、残りの捕獲用の罠が次々と作動する。

ガチッ！！ガチャッ！！ガッツ！！

それはワイヤーが切られたことにより、床に完全に落ちた文香の身体を次々と噛み砕いていった。

手塚「うおっ……」

あまりの惨状に、さすがの手塚も思わずうめき声を漏らす。

もはや身動き一つ出来なくなった文香は、自身の命を失うその最後まで、自らの定めを呪わずにはいられなかった。

その時、手塚のPDAからアラームが鳴る。

手塚はとっさにPDAを取り出すと、そこには新たな説明書きが増えていた。

手塚「オートマチックシステム、だと？」

それはルール違反か解除条件を満たすことが出来なかった人物を狙撃するペナルティだった。

その銃撃はいまもなお続いていた。

手塚は、文香が死んだことを目で見て確認した後、3階への階段へと足を踏み入れた。

そして幾分か後、あたりは再び静寂に包まれた。

・  
・  
・  
・  
・

## 第5話「残酷という名の足枷」（後書き）

あまりにも無残な最後を遂げてしまった文香。本当に恐ろしいのは手塚ではなく、このゲームそのものの、なのかもしれません。

次回は第6話「思わぬ遭遇」手塚の首輪を解除する為には、残り4人の首輪を作動させる必要があります。しかし、すんなりと首輪を作動出来るわけでは当然ありません。そして、事態は急展開を迎えることに。乞うご期待

# 第6話「思わぬ遭遇」

## 第6話「思わぬ遭遇」

作・桐島成実

現在の状態

との関係

手塚 義光

(10)

健康

PDA

状態

手塚

「グループA」

御剣 総一

(?)

??

普通

姫萩 咲実

(?)

??

普通

「グループB」

高山 浩太

(?)

??

普通

漆山 権造

(?)

??

普通

長沢 勇治

(?)

??

険悪

矢幡 麗佳

(?)

健康

接触

未

郷田 真弓

(5)

? ?

敵対

陸島 文香

(?)

死亡

敵対

北条 かりん

(?)

死亡

知らない

3階の階段に上がり、すぐ近くの部屋を探索していた手塚は、その手に今しがた木箱から発見した拳銃を手にしていた。

手塚「予想どおり、コイツがありやがったか」

手塚は、先ほど文香に対して行われたペナルティの一部始終を見た時から、拳銃があることを確信していた。

あのような機関銃が存在している事、そして何よりプレイヤー同士で争わせようという主催者側の頑強な意思がある以上、拳銃が存在するのは火を見るより明らかであった。

手塚「しかし、コイツが3階にあるということは・・・」

1階には口クなものがなく、2階にはナイフ。そして今手塚が居る3階では拳銃。

この流れでいくと、上の階に行けば行くほど強力な武器があるらしい。

手塚「と、するとなおさら先を急ぐ必要があるな」

手塚は探索もそこそこに、当初の予定通り上の階へと急ぐことにした。

・  
・  
・  
・  
・

通路を警戒しつつ進んでいた手塚だったが、4階への階段の近くまで進んだ所で、前方に誰かが居ることに気がついた。

手塚「ん・・・？」

手塚は気づかれない様に曲がり角に潜み、そつとその人物の方を覗き込んだ。

その人物はまだこちらの存在に気づいておらず、やや小走りのペースで手塚の居る方角とは反対側の方へと進んでいた。

手塚「あいつもこのゲームの参加者か？」

遠目から見てもかなり幼い少女の様に見えるが、首輪の有無はここからでははっきり見えない。

手塚「しかしまあ、俺にもツキが回ってきたということか」

あの受付嬢に次ぐ獲物を発見し、手塚は笑みが止まらなかった。

手塚は腰に差してあった拳銃を手に持ち、その少女に気づかれないうちに注意を払いながら、そつと後を追った。

いくつかの通路の角を曲がっていく内、拳銃で狙える位置まで接近した手塚は、銃口をその少女に向ける。

少女「・・・!？」

だがその少女は気配を察したのだろうか、トリガーに指を掛けて撃つ直前というところで手塚の存在に気がついた」

手塚「ちっ、少しペースを上げすぎたか」

手塚の目に迷いはなかった。手塚は走る速度を上げつつ、拳銃を発砲する。

ガン！ガン！！

まだその少女との距離はそれなりにあり、2発とも命中にはいたらなかったが、その少女はびくつと身を震わせた。

手塚「ハッ、これで2人目ってな！」

手塚は自身の勝利を確信し、慌てて逃げ出したその少女の後を追ったのだった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

漆山「ヒィッ」

目の前にあるそれを目撃した漆山は、あまりの惨状にか細い悲鳴をあげる。

高山「こいつは、陸島・・・だな」

しゃがみこんでそれを調べていた高山が、そう呟く。

総一達に合流する為に3階への階段を目指していた高山と漆山は、今文香らしき亡骸を目の当たりにして驚愕の表情を浮かべていた。

『らしき』というのは、それがあまりにも惨たらしい姿だったからだ。

生前の彼女を知る高山達は、それが同一人物であるとは一瞬思えなかったのだ。

漆山「た、高山君。こ、これは一体どういう・・・？」

漆山は声を震わせ、まるで高山に助けを請うようにそう尋ねた。

その訴えるような目は怯えを含んでいる。



高山「おそらく、何らかの罠に掛かった後、銃撃を受けたのだろう」

漆山「銃撃!？」

銃痕も流れる血も、戦場で暮らしてきた高山には慣れているものではあったものの、さすがに眼前にあるそれは異質だった。

銃撃により破壊されたと思わしき鉄くずが、幾多もの罠に掛かったことを暗示していた。

殺すだけなら銃撃で事足りる。高山はそこに悪意があると感じていた。

さらに亡骸は通路を塞ぐ形で倒れていた。ここを通っていく為には、その亡骸をこえていかなければならない。

高山「とにかく、ここは慎重に行くべきだろう」

高山は立ち上がり、他に罠が残されていないか丹念に調べつつ、慎重に3階への階段へと歩いていく。

漆山も、その亡骸から目を背けるように通過し、高山の後に続く。

階段にたどり着くまでの間、高山は表にこそ出さなかったが、ずっと考え込んでいた。

自身の首輪の解除の為には、どうしてもJOKERが必要だ。

その為、誰が持っているか分からない現状では、多人数に付いてい

く方が確率的にJOKERにありつけるのではないかと踏んでいた。

だが分断された上、咲実の負傷、そして文香が死んだ事を踏まえると、総一達と合流するメリットがあまり感じられなくなっていた。

それよりも、より確実な方法を取るべきではないか。高山はそう考え始めていたのだ。

高山「漆山」

高山は後ろを振り向き、いまだ落ち着かない様子の漆山に話しかけた。

漆山「な、なにかね、高山君」

高山「4階への階段へと向かう。それでいいか？」

高山はそう提案する。

漆山「あのボウズ達とは合流しないのかね？」

率直な疑問を口にする漆山だったが、高山は言葉を続ける。

高山「合流するからこそ、だ」

高山はさも当たり前のようにそう告げる。

漆山「一体どういう事かね？」

高山「御剣達と別れた場所を目指しても、もうすでに居ない可能性が高い」

高山「ならば、いずれ行くであろう階段を見張る方がより確実だ」

漆山「な、なるほど」

漆山は状況に流され、そこまで考えていなかったのだろう。高山の提案に疑問も持たずに頷く。

だが高山は内心、階段にて総一達と合流出来るとは考えていなかった。

咲実が足を負傷した以上、歩行速度は目に見えて落ちているはず。

ならば早い内から誰かに殺されるか、もしくはエレベーターを使つて6階へと一気に上がる可能性が高い。

そして何より武器の確保、進入禁止エリアが1階から拡大していくというルール。そして人との接触出来る数少ないポイント。それらを考えた上での結論だった。

高山「さて、階段で合間見えるのは一体誰か・・・」

相手が総一達や、話が出来そうな人物なら交渉を、そうでないなら・・・。

漆山「何か言ったかね？」

高山の呟きに、漆山が反応する。

高山「いや、何でもない。．．．とにかく先を急ごう」

漆山「う、うむ、わかった」

だが、ゲームの行方が既にコマを進めているという事を、この時の高山達は知る由もなかった。

・  
・  
・  
・  
・

手塚「弾切れとはなあ．．．。しくじったぜ」

高山達が向かおうとしている4階の階段前のホールにいた手塚は、もはや役に立たなくなった銃を床に投げ捨てた。

そして近くの壁に背をもたれて、ポケットから煙草を取り出し、ライターで火をつけた。

手塚「ふう．．．」

そして煙草を一口吸うと、ゆっくりと息を吐いた。

手塚「．．．あの小娘、思ったよりすばしっこかったな」

手塚はつい先ほどまでその少女に攻撃を仕掛けていたのだが、相手の行動が思ったよりも迅速で、撃った弾はことごとく的外れ、そ

の結果数少ない弾はすべてなくなり、不覚にもその姿を見失ってしまっていた。

手塚としては、2、3発撃てば仕留められると思っていただけに、その表情は浮かない。

手塚「だがまあ、4階に行けば、また武器を確保できる、か」

手塚はそう言つて4階へ上がる階段がある方へと視線を向けた。

手塚自身、くやしがつてこそいたものの、落胆はしていない。楽しみが後回しになっただけのことなのだ。

その言葉を最後に、煙草を一本吸い終わるまで無言でいた手塚だったが、吸い終わった煙草を捨てようと手を動かした際、ふと通路の角の向こう側に人の気配を感じた。

手塚「ん？誰がいるのか？」

手塚は吸っていた煙草を床に投げ捨て、腰にあったナイフに手を持つていき、すぐ抜ける様に構えを取った。

銃を無くした今となつては手塚に不利だが、ここで背を向けて逃げるわけにはいかない。

そんなことをしたら良い的になるだけだからだ。

気配がする方にじつと視線を送っていた手塚だったが、とたんに通路の角から人の姿が現れた。

総一「手塚さん！」

通路の物陰に隠れていたその人物は、姿を少しだけ出して話しかけてきた。どうやら警戒しているようだ。

手塚「おう、お前か」

一方の手塚は険しい表情を崩して、戦いの構えをとる。

やれやれ、取り越し苦労だったな。てつきり長沢のガキあたりが攻撃を仕掛けてくるのかと思っただぜ。

手塚は両手を挙げて敵意がない事を示した後、再び壁にもたれて煙草を取り出した。

総一は、ひとまずの危険がないと思い、手塚の方へゆっくりと近づいていった。

その間煙草を燻らせていた手塚は、息を吐きつつ尋ねてみた。

手塚「お前1人か？」

総一「あ、それは、その・・・」

なぜか総一は口ごもる。

手塚「なんだ？はつきりしねえか、御剣よお」

手塚は明るい表情のまま、総一に笑いかける。

総一「あ、いえ、実は連れがいまして・・・」

総一はおずおずとそう答える。

手塚「連れだと？もしかして最初会った時にお前と一緒にいた、あの女か？」

姫萩、と言ったか？たしか。

手塚は前にルール確認を行った一連の記憶を引っ張り出す。

御剣のヤツに支えられる形でずっと怯えていたが、まさかあの足手まといと一緒に居やがるってのか？

手塚は心の中で半ば呆れていた。

総一「ええ、それとあと2人ほど。向こうの通路に」

手塚「ってことは4人居るってのか？」

総一「そうです」

総一は手塚の問いに頷く。

手塚「ほう・・・、それで？一体何の用だ」

回りくどいのも面倒なので、単刀直入に聞いてみた。

総一「4階への階段、通して貰えませんか？」

なるほど、俺が邪魔で通れないってことか。

手塚は総一とやりとりをしている間、総一の装備をチェックしていた。

銃は・・・、1丁持っていやがるな。

もしかしたら通路の向こう側に居る他の3人も武器をもっているかもしれない。

しかし、それなら奇襲をかけて殺すか追い払ったりすればいいものを。何か事情があるのか、それともただ臆病なだけか・・・。

いずれにせよ、今の状況は手塚には不利だ。

ならばこの状況を利用するか。

そう結論付けた手塚は、総一の問いに首を縦に振った。

手塚「ああ、いいぜ。ただし一つ条件がある」

総一「なんです？」

手塚「俺も一緒に連れて行け」

手塚は総一に対してそう申し出た。

総一「え・・・？」

総一にとってはこの台詞は意外だったのだろう。当然といえばそう



なのだが。

手塚「俺も正直困っていたところだ」

手塚はいかにも困ったように両手を挙げてみせる。

総一「あ、ええ。それは願ってもないことですけど・・・」

手塚「どうした、歯切れが悪いな」

勘付かれたか？

だが手塚のそれは杞憂に終わった。

総一「他の3人と相談してきてもいいですか」

手塚「あん？別に構わんぜ」

手塚はあっさりとそう言っただけ。

総一「あ、じゃあ」

手塚「まあ、出来れば通路から姿を出してくれると話が早いんだがな」

そう言いつつ通路の向こう側に視線を向ける。

手塚「そこに居るんだろ？」

手塚は不敵な笑みを浮かべる。

葉月「・・・どうやら気づかれたようだね」

そして通路の角から次々と姿を現す。

そこには総一の言うとおり、連れが3人出てきた。

総一「ひとまず大丈夫です。こちらへ来てくれませんか？」

総一は3人に向かってそう叫ぶ。

葉月「分かった。じゃあ行こうか」

葉月が先頭に立って後ろの2人を庇いつつ、手塚の元へと歩んでいく。何か不測の事態が発生した時の用心なのだろう。

渚「じゃあ、行こっか。咲実さん」

咲実「あ、はい」

その後ろに足を怪我をしている咲実を肩で支えつつ、渚と咲実の2人も後に続く。

やれやれ、こりゃあまた揃いも揃って足手まといばかりだな。

手塚は表にこそそれを出さずに、心の中でほくそ笑んでいた。

まあ、御剣が交渉しに出ている時点で、ある程度は想像ついてはいたが・・・。

だがまあ、この選択は間違っちゃいないな。

手塚の目に映っているのは4人の首輪。

最初のエクストラゲームで死んだあいつは、首輪が作動しているのか否かが隔壁に阻まれていた為、判別がつかなかった。

すると今の所確実なのは、俺が仕留めたあの受付嬢ただ1人、ということになる。

こいつらをうまく利用すれば、さほどの苦勞をせずに首輪を作動できるな。

だから手塚は心の中で笑っていたのだ。カモがネギをしょって出てきたも同然なのだから。

そんな手塚の企みを知らず、総勢5人となった総一達は、共に4階への階段を上がっていったのであった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

## 第6話「思わぬ遭遇」（後書き）

手塚のこの企みは果たしてうまくいくのでしょうか？そして総一達はそのことに気づくことは出来るのでしょうか？

次回は第7話「死への誘い」この異色ともいえる組み合わせ。さて、今後どのような展開へと発展していくのでしょうか？乞うご期待

## 第7話「死への誘い」

第7話「死への誘い」

作・桐島成実

現在の状態

PDA

状態

手塚

との関係

「グループA」

手塚 義光

(10)

健康

御剣 総一

(?)

健康

普通

姫萩 咲実

(?)

足を負傷

普

通

綺堂 渚

(?)

健康

普通

葉月 克己

(?)

健康

普通

「グループB」

高山 浩太

(?)

健康

普通

漆山 権造

(?)

健康

普通

長沢 勇治

(?)

??

険悪

矢幡 麗佳	(?)	??	未
接触			

郷田 真弓	(5)	??	
敵対			

色条 優希	(?)	健康	
敵対			

陸島 文香	(?)	死亡	
敵対			

北条 かりん	(?)	死亡	
知らない			

4 階への階段を上りきった手塚達5人は、ホールの中央にいた。

どうやら敵の待ち伏せではなく、あたりは静かなままだった。

手塚「それで？これからどうするよ」

総一達の後ろを歩いていた手塚は、前に居る4人にそう問いかけた。

4人はそれぞれ顔を見合わせていたが、年長者である葉月が代表で

答えた。

葉月「まず、お互いの状況を確認しあった方が良さと思うんだが」

手塚「そうだな。場所を変えるか」

そう言っただけで歩き出そうとした手塚を、葉月が制した。

葉月「あ、待ってくれ。出来ればこのホールでお願いしたいんだが」

手塚は一步踏み出した足を止める。

手塚「あん？話し合っている間に奇襲を喰らうかもしれんぜ？」

葉月「それは事情を聞いてくれれば分かってもらえると思う」

手塚「・・・まあ、別にかまわんがな」

葉月「ありがとう」

葉月は軽く礼を述べた。手塚はこれ以上異論を言うことはなく、お互いの状況を話し合った。もちろん、文香を罫に追い込んだことは伏せたのだが。

葉月「実は、僕と渚さんが総一君と会う前に、他に仲間がいたみたいだね」

手塚「仲間だと？」

葉月「それに関しては総一君達の方が詳しいはずだよ」

葉月はそう言って総一の方に視線を向ける。

総一は今、怪我をして満足に歩けない咲実に肩を貸していた。

総一「ええ、手塚さんも会ったことがあると思いますが、文香さんと、高山さん。それと漆山さんの3人なんです」

手塚「ほう？」

総一「俺達も含めて5人で通路を歩いていたんですが、突然柵が天井から降りてきまして」

手塚「柵？だと」

なるほどな。罾は多種類に上るってコトか。

総一「そのせいでお互い別れざるを得ない状況になってしまったので」

総一「その時に長沢の奇襲を受けまして、咲実さんが・・・」

総一はそこで咲実のことを気にかける。

手塚「長沢のガキか・・・にしても、足を怪我してよく逃げられたもんだな、嬢ちゃん」

手塚はそこで咲実の方を向く。



咲実「御剣さんのおかげです」

咲実は軽く微笑むと、総一を優しい目で見つめる。

敵に襲われて、それでも足手まといを連れてくつてか？理解出来んね。

そのことはおくびにも出さず、無難な台詞を返した。

手塚「まあ、無事ならそれでよかったじゃねえか」

咲実「はい」

その返事は力強い。最初の頃は怯えきっていたはずだが、すぐ側に信頼出来る人がいるおかげで、咲実は無事を取り戻していた。

総一「あとは、文香さん達が無事で居てくれるといいんですが・・・」

手塚はそれを聞いて、心の中で笑みを浮かべた。

なるほどな。御剣達はあの受付嬢の顛末を知らねえってコトか。

だから手塚は何事もなかった風を装った。

手塚「まあ、無事であることを祈ろうぜ」

手塚はあえて明るく振舞った。その微笑みが、邪悪なものであることは、今の総一達には知る由もなかった。

総一「ええ。それでお願いがあるんですが」

手塚「なんだ？」

総一「状況から見て、文香さん達がまだ下の階に居ると見て間違いないと思います。だからここで見張って彼女達と合流したいんですが・・・」

手塚「なるほどな。それでこのホールで話し合おうってコトになったわけだ」

総一「そうなります」

手塚「けどよ、この4階には恐らく下の階よりさらに強力な武器なんかがあると思うぜ。そっちを先に確認した方が良いんじゃないかね？」

総一「それはそうですが・・・」

手塚「その穢ちゃんが怪我をしている以上、奇襲を喰らったら逃げる事が出来んぜ？それなら強力な武器を手に入れて、いざという時に備えておいたほうが賢明だと思うんだがな」

葉月「うーむ。なら、こうしたらどうだろうか？」

2人の間に葉月が割って入る。

葉月「とりあえず咲実さんを戦闘禁止エリアに連れて行って、動ける我々でココを見張るといのはどうかな？」

手塚「だが、どうやって戦闘禁止エリアを探す？」

葉月「それなら心配ないよ。さっき『地図の拡張』のソフトを手に入れてね。渚くんのPDAにインストールしたんだが。渚くん、PDAを彼に見せてやってくれないか？」

渚「はいはい」

ずっと成り行きを見ていた渚は、自身のPDAを操作し、画面を手塚に向けた。

手塚「ほお、戦闘禁止エリアだけでなく、倉庫や警備室なんかも書かれているわけか」

感心しつつも、各々の部屋に名前を目で順に追っていく。

手塚「じゃあ、それで行くとするか。で？一番近くの戦闘禁止エリアは一体どこにあるんだ」

渚「えーとお、今私達が居るのはココだから・・・」

葉月「！？手塚君！」

葉月の声が突然張り詰めたものになった。他の者が渚のPDAに注目している中、葉月は階段のある方に釘付けになっていた。

手塚「ん？」

手塚もその視線を追う。

そこにたった今しがた階段を上ってきた人物がいた。その人物は手塚達の姿を目撃するやいなや、大声を出して走ってきた。

漆山「！？ま、待ってくれえ」

総一「漆山さん！」

それはさっき話にも出てきた、漆山だった。彼は息を切らしながら、必死で総一達を呼び止めていた。

葉月「そうか、彼が話に出てきた総一君達の仲間の一人、というわけだね」

葉月と渚は漆山とは面識がなかった為、とっさには気づかなかった。

漆山は重い足取りながらも、なんとか総一達の前までたどり着いた。

漆山「ぜえぜえ、も、もうこんな目に会うのは嫌だ・・・」

息が荒い中、なんとかそれを口にする。

葉月「大丈夫ですか？これを」

葉月は持参していた水入りのペットボトルを差し出した。以前探索の時に発見したもので、それを同じく見つけたリュックサックに入っていたのだ。

漆山「ふうふう、す、すまない」

漆山は水を一気飲みすると、ようやく落ち着いたようで、深いため息を一つつく。

落ち着いたのを見計らって、総一がさっそく問いかける。

総一「一体何があったんですか？たしか高山さんも一緒にいたはずじゃあ」

漆山「あ、ああ。そうだったんだが・・・」

漆山はそこで言葉を途切らせる。

葉月「まあ、待ちたまえ総一君」

葉月が総一を制する。

葉月「はやる気持ちもあるが、咲実さんの事もあるし、とりあえず戦闘禁止エリアに移動してからゆっくり伺おうじゃないか」

手塚「だな」

渚「じゃあ、さっそく出発しましょうかあ」

PDAをずっと調べていた渚の誘導で、手塚達一行は戦闘禁止エリアへとたどり着いたのだった。

・

・  
・  
・  
・

手塚「ああん？なんだよそりゃあ」

手塚は大げさに呆れた声を出す。

手塚「じゃあアンタは、戦ってる大将を放ってここまで逃げてきたつてのか？」

漆山の話では、高山と共に3階へ上がってしばらくした後、長沢の襲撃を受けたそうだ。

それで高山は応戦しようとしたのだが、長沢の銃撃に驚き、高山を置いて逃げてきたそうだ。

漆山「や、やむをえないじゃないか！銃撃が、耳のそばを通り抜けたんだぞ！」

漆山は半ば開き直っていた。

葉月「まあまあ。とにかく、あなただけでも無事で何よりです」

葉月が2人の仲を取り持つ。

手塚「・・・まあ、逃げてこれただけオッサンにしちゃ上出来か」

手塚はそう言い、そっぽを向いた。

総一「それにしても、まさか文香さんが・・・」

漆山の口から、文香の顛末についても聞かされていた。

咲実「御剣さん・・・」

みんなの表情は暗い。

総一「もしかして文香さんを殺したのも長沢・・・か!？」

他の人たちが悲しみにくれる中、総一はただひ一人怒っていた。総一の隣には咲実が居る。その咲実に怪我を負わせたのは、他ならぬ長沢だったからだ。

葉月「そう決め付けるのは早計だと思うが・・・。どうしたものか」

葉月もポツリとそう呟く。

手塚「全くだ。長沢のヤツ、きつとんでもねえ解除条件でも引き当てたんだろうぜ。・・・いや、あいつは賞金にも目が眩んでいたから、そっちが理由か？」

手塚もやれやれといわんばかりに両手を軽く上げる。

手塚「だがまあ、悲しむのはこのふざけたゲームが終わってからでも遅くはねえ。今は俺達の身を案じるべきじゃねえのか？」

手塚は他の人たちにそう問いかける。

葉月「・・・文香君には悪いが、ここは堪えよう。今は我々がどうすべきかを考えようじゃないか」

葉月はそう言い、感情をぐっと押さえつける。

総一「・・・とにかく、高山さんが心配です。早くホールに戻りませんか？」

総一は冷静さを取り戻しつつ、そう提案する。

手塚「いんや、そりゃオススメできねえな」

手塚は否定する。

総一「なぜです？」

手塚「漆山のオッサンの話、聞いたろ？大将が長沢の野郎に攻撃を受けてるんだ。それも銃でな」

手塚は言葉とは裏腹に楽しそうな表情を浮かべていた。

手塚「そんなところに、俺達がぞろぞろと出て行つてどうする？ましてホールじゃあ隠れる場所もねえし、格好の的だぜ」

手塚の意見に全員口をつぐんで考えるしぐさをする。

渚「あのお、それなら、ホールのすぐ近くの部屋で見張ればいいのでは？」

渚がおずおずと提案する。



葉月「なるほど、この部屋の入り口からホールを見張ればいいというわけか」

咲実「それに、もし襲われたとしても、この部屋なら反対側の扉から逃げる事が出来ますね」

咲実はPDAの地図を確認しつつ、葉月に賛同する。

総一「あとは、すぐには部屋に出来ないように、簡単なバリケードを作る、とか」

葉月「そうだな。それなら相手側に先にこちら側の存在に気づかれたとしても、対応出来ると思う」

総一「手塚さんはどう思います？」

総一はいつの間にか壁にもたれて煙草をふかしている手塚に目を向ける。

手塚「ん？ああ、いいんじゃないか？」

手塚は適当に相槌を打つ。

総一「じゃあ、そうしましょうか」

総一達は、全員一致の元、行動を開始した。

咲実と、看病役の渚を残し、総一達はホールのすぐ近くの部屋へと移動した。

・  
・  
・  
・  
・  
・

総一達4人は部屋とホールの間に適当な家具などを並べて、簡素なバリケードを作った。

銃弾を防ぎきるには、いささか不備とはいえるが、敵の進行を遅らせるのには十分だった。

話し合った末、手塚と漆山、総一と葉月の組み合わせで、交替で見張りをすることにした。

ゲーム開始から28時間余りが経過していた。既に1階は進入禁止エリアとなっている。

あまり悠長にはしてられない。だから、4時間ごとの計8時間見張りをして、遭遇出来なければ先へ急ぐという方針に決めた。

手塚「じゃあ、俺達が先に見張るとするか」

総一「お願いします」

手塚達が見張りをしている間、総一達は部屋で待機だ。

部屋を出た手塚は、ドアを背にして座り、煙草を一本取り出す。

手塚「一本どうだい？オッサン」

漆山に煙草が数本入ったケースを漆山に向ける。

漆山「いや、すまんが俺は煙草は吸わんだ・・・」

手塚「そうかい」

手塚はケースをポケットにしまい、ライターで火をつけた。

そうして、しばらく無言の状態が続いていたが、ふと手塚がこつ切り出した。

手塚「そついや、オッサンの首輪の解除条件はなんだい？」

手塚はまるで友達を相手にしているかのようなフレンドさで話しかけていた。

漆山「なっ！？」

漆山はいきなり核心を突かれ、驚きの表情を見せる。

手塚「色々ゴタゴタがあつて聞きそびれちゃったからな。いい機会だからお互い解除条件を明かしておこうかと思つてな」

手塚はそう言いつつ、PDAの画面を漆山に向ける。

手塚「俺は『J』（ジャック）だ。24時間以上行動したものとずつと一緒にいなきゃならねえ。アンタは？」

漆山「あ、ああ、俺は『7』だ」

あまりにも手塚があっさりと解除条件を明かしてきたので、つい乗せられてそのまま答えてしまった。

もちろん手塚が示した『J』は、持っていたJOKERを偽装したものだ。

手塚「と、すると・・・」

腕を組んだ手塚は、続いて問いかけた。

手塚「それ、御剣達は知ってたのか？」

漆山「い、いや。色々ありすぎて教えることすら思い付かなかった」

漆山は慌ててそう答えた。

手塚は頭で次の行動を考える。そして一つの考えへと行き着いた。

手塚「なるほどな・・・」

クックククツ、やっぱりアンタはこのゲームにや向いてねえよ。

手塚は密かに邪な笑みを浮かべていたのだった。

・

・  
・  
・  
・  
・

手塚「・・・ん？」

手塚がホールがある方とは反対側の通路に視線を向けた。

漆山「ど、どうしたのかね？手塚君」

漆山もその視線を追う。

手塚「いや、今チラッとだが、人影が見えた気がしたんだが・・・」

漆山「それは本当かね？」

手塚「ああ、結構幼い少女っぽかったな。恐らく以前俺が目撃したヤツだと思っただが」

漆山「若い少女・・・？そんな子まで参加しているというのかね？」

いつもの漆山なら、ここでいやらしい表情を浮かべていたかもしれない。

だが、この状況を理解している漆山は、その事を気に止めなかった。

手塚「だろうな。じゃあさっそく行くとするか」

手塚はそう言って立ち上がる。

漆山「い、行くとは、どこに？」

手塚は呆れたそうに漆山を諭す。

手塚「あのなあ。アンタ、さっきPDAが『7』で解除条件が全員との遭遇だって言っただろうが。だから協力してやろってわけよ」

それを聞いた漆山はすべてを理解した。

漆山「そ、そうか！？それは助かる！」

漆山にとっては、願ってもない申し出だった。

文香の惨たらしい死体を見た漆山は、このゲームを無事に乗り切る自信をすっかり無くしていた。

そんな中、一緒に居てくれる仲間が存在が、純粹に頼もしいと感じていた。

手塚「ま、俺もパートナーが居なきゃ解除条件を満たせねえからな。お互い様ってこった」

手塚はそう言って歩き出す。

漆山「あ、ま、待ってくれ。ボウズ達にも知らせたほうがいいんじゃないか？」

漆山は嬉々としつつも、その事に気がついた。

手塚「今呼びにいったら見逃すかもしれん。ちゃっちゃと終わらせ  
そうぜ、オッサン」

漆山「わ、わかった」

手塚達は見張りを放棄して、その場を立ち去った。

・  
・  
・  
・  
・  
・

手塚と漆山は、見かけた人影を追って、とある部屋へと入り込んで  
いた。

漆山「・・・本当に、ここに入っていったのかね？」

漆山はいぶかしげな表情を見せる。

手塚「おっかしいなあ、たしかにこっちの方へ来たはずなんだが・  
」

2人は部屋の中の雑然とした木箱やダンボールを避けつつ、部屋中  
を探すが、人の姿はどこにもなかった。

手塚は不思議そうに帽子越しに頭をさする。

手塚「見間違いだったか？しゃあねえ、引き返すしかねえか」

手塚はそう言っただけで扉のドアノブに手をかける。

漆山「そうか・・・」

漆山は残念そうに頭を垂れる。

手塚「まあ、そんなにしょげなさんな。次があるさ」

手塚は元気付ける為に、わざとらしいほどの明るさでそう励ました。

だが、ドアノブに手を掛けていたその手がとたんに止まる。

手塚「と、まあ、そう言いてえんだが。オッサン、アンタはここで舞台を降りてもらうぜ！」

手塚の顔が、一瞬にして邪な表情へと変貌する。

漆山「はえっ？！！」

漆山の目が驚きに大きく開く。それもそのはず、手塚はいつの間にか腰にぶら下げていたナイフを手にとっていたからだ。それも、漆山に向けて。

漆山「ど、どど、どついつもりだね！」

漆山は突然の展開に頭がついていかなかった。



手塚「どうもこうもねえ。見りや分かるだろ？」

手塚はあざ笑う。その意味する所を悟った漆山は、恐怖のあまりガタガタと身体を震わせた。

漆山「じよ、冗談はよしてくれ！手塚君！」

漆山のその声は声高く震えていた。そしてやっとの思いで、一步後ずさる。

だが、後ろは木箱やダンボールで塞がれており、出口は手塚の居るドアだけだ。

手塚「冗談？冗談ねえ・・・」

手塚は含み笑いをしながら、しかし目だけは漆山を捉えたまま、一步前へ踏み出る。漆山のそれとは違い、堂々とした足運びだった。

手塚「どこまでもおめでたいヤツだ。なあ、オッサン」

そう言い終わる頃には、すでにナイフは振り下ろされ、真横へと掻き切られていた。

その刃先は、真っ直ぐ漆山の喉元へと向かい、そして。

ザシュッ！！

ナイフは、まるで無抵抗の漆山の首の側面に突き刺さり、その様はまるで横からナイフの柄が生えているように見える。

漆山「があっ！！！！ぐうつ・・・！」

悲鳴らしい悲鳴はあがらなかった。いや、あげられなかった。

漆山は、目を見開いたまま、その身体を宙へと投げ出す。

手塚「わりいな、オッサン。アンタの死は無駄にはしないぜ」

手塚はまるで虫を見るかのように漆山の最後を看取った。もはや呼吸をすることすら叶わないまま、この世を去ったのだ。

その死を確認し終えた手塚の顔は、いつものうすら笑いに彩られていた。だが、目は笑ってはいなかった。

手塚「これで2人目、ってな」

手塚は何事もなかったかの様に、漆山の首輪に自身のPDAを差し込む。

そのPDAには、手塚の本来の解除条件を示す『10』の数字が描かれていた。

手塚「このPDAはもらってくぜ、じゃあな」

漆山のPDAをポケットに仕舞った手塚は、素早くその部屋を後にしたのだった。

・

• •  
• •  
• •  
•  
•

## 第7話「死への誘い」（後書き）

漆山を惨殺してしまった手塚。さて彼は、この後どのような行動をとっていくのでしょうか？

次回は第8話「偽りの仮面」殺すだけでなく、欺くことも彼の得意とすることなのです。乞うご期待

## 第8話「偽りの仮面」

第8話「偽りの仮面」

作・桐島成実

現在の状態

PDA

状態

手塚

との関係

手塚 義光

(10)

健康

「グループA」

御剣 総一

(?)

健康

普通

葉月 克己

(?)

健康

普通

「グループB」

姫萩 咲実

(?)

足を負傷

普

通

綺堂 渚

(?)

健康

普通

高山 浩太

(?)

??

普通

長沢 勇治

(?)

??

険悪

矢幡 麗佳	(?)	? ?	未
接触			

郷田 真弓	(5)	? ?
敵対		

色条 優希	(?)	? ?
敵対		

漆山 権造	(7)	死亡
敵対		

陸島 文香	(?)	死亡
敵対		

北条 かりん	(?)	死亡
知らない		

漆山が死んだことを知る由もなく、総一と葉月はつかの間の休息をとっていた。

総一「咲実さんたち、無事かな・・・？」

総一は独り言を漏らす。

本来なら、わずかな時間でもきちんと睡眠をとるべきなのだが、総一はその事が気がかりで仕方なかった。

葉月「彼女達のことを心配かい？」

隣にいた葉月も同じ気持ちらしく、寝付けなかったようだ。

総一「ええ、こんな場所に閉じ込められて、色々ありましたから・・・」

総一はそこで目を伏せる。

葉月「すまないね。彼女達を戦闘禁止エリアに置いておくように提案したのは僕だからね。・・・最初こそ、その方が良いと思っていたのだが、やはり一緒に居た方が良かったと今は思っているよ」

2人がこうしている間に、何かに巻き込まれていないか。戦闘禁止エリアだから襲われる心配はないとはいえ、やはり気になるのだった。

総一「いえ、俺もそれが良いと判断しましたから・・・」

そう言う総一の声は暗い。だから葉月は励ますように言った。

葉月「だからせめて、僕たちが無事である姿を、再び彼女達に見せることが、彼女達の為だと思うんだ」

総一「ええ、そうですね。・・・その為にもしっかりしないと」

総一は頬を叩いて気合を入れなおす。

そんな総一を見て、葉月も微笑みを取り戻す。

葉月「総一君。今は休むべき時だから、気合いをいれたらおかしいんじゃないのかい？」

総一「あ、そうでしたね」

総一も笑い返す。

そんな時だった。

バン！

総一達の前方にあるドアが、突然勢いよく開かれる。

総一「え！？」

とつさに総一達は慌てて立ち上がった。

手塚「はあ、ぜえ・・・」

それはドアの外で見張りをしているはずの、手塚の姿だった。

その様子から、切羽詰っていることが伺える。

総一「ど、どうしたんですか！？」



総一の問いに、息を切らしながらなんとか答える。

手塚「お、オッサンが・・・！」

そういえば、漆山さんの姿が見えない。

その事に気づいた総一は、手塚の肩をつかんで問いつめる。

総一「漆山さんがどうしたんです！？」

手塚「オッサンが・・・、殺された！」

総一「なっ！！」

2人は驚愕の表情を見せる。

葉月「漆山さんはどこに？」

葉月はなんとか冷静な声で聞いてみる。

手塚「あ、あっちだ・・・」

手塚は通路の向こう側を指差した。そして総一達3人は漆山がいるであろう部屋へと走っていった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

葉月「こ、これは・・・」

葉月は思わず口を押さえる。

そこには、全身血まみれになった、かつての漆山の姿だった。

総一「漆山さん・・・」

総一の顔も蒼白だ。

手塚「・・・俺のせいだ」

そんな中、2人の後ろにいた手塚は、頭を垂れた状態で、ポツリとそう漏らした。

総一「・・・どういことですか？」

いぶかしげな表情を浮かべる総一に、手塚はこう答えた。

手塚「俺のPDA、『7』で、全員と遭遇する必要があったんだ」

心なしか、その声に哀愁が含まれる。そこにいつもの余裕はない。

手塚「それを漆山のオッサンに教えた。ちょうどそこに人影が見えた。だからオッサンは、俺の首輪を外す為に協力してくれるって」

手塚の声は震えていた。そしてその目には、いつしか涙を浮かべていた。

手塚「それで人影を追った方がいいが、逆に襲われて、それで・・・」

手塚はそこで嗚咽を漏らす。

その様子は、後悔と自責の念に囚われていた。そのことに気づいた葉月は、そっと肩に手を置く。

葉月「・・・手塚君のせいではないよ。誰だってそうする。たまたま相手が悪かったただけなんだ」

葉月は務めて優しく語り掛ける。それに触発されたのか、手塚の目から涙がこぼれる。

葉月「君は何も悪くない。悪いのは、ここに連れ込んだ連中なんだから。だから気に病む必要はないんだよ？」

手塚「・・・すみません」

手塚は腕で、両目を拭う。

総一「手塚さん・・・」

総一にとっては、今までに見たことも無い手塚の姿だった。

正直、今まで手塚の時折見せる笑みに、畏怖さえ覚えていた。だからこそ、この目の前にいる人物に対して警戒していたし、どこか信用していなかった。

だが、それは間違いなのだと気づいた。

ただ不器用なあまり、素直に感情が出せなかったただけなのだ。だからあえて強がっていたのだ、と。

もしかすると、総一自身、ありもしない恐怖の概念に囚われて、畏怖の人物像を自身の頭の中で作っていたのかもしれない。

総一は、そして恐らく葉月も、そう思うようになっていた。

だが、それはとんでもない過ちだった。

手塚「くくくくつ、こんな茶番に騙されてやがんの」

心の中の手塚は、ちつとも悲しんでなどいなかったのだ。

手塚「居るもんだなあ、お人好しって」

手塚はすっかり騙されている総一達を前に、心の中であざ笑う。

手塚「とりあえず、漆山を殺したのは・・・、そうだな、最初に俺が襲ったあの妙年の女、あいつが殺ったことにしておくか」

何かといわくつきの女だったしな。罪を着せるにはうってつけだ。

その事は後でそれとなく伝えておくとして・・・。

手塚「さてと。この調子で、あと3人仕留めていくか、ククク」

この調子だと、さほど苦勞せずに済むな。いちいち獲物を探す手間を省けるしな。

手塚の企みは、このゲーム全体に多大な影響を与えていくのだった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

渚「ねえ、咲実さん」

ベッドに寝ている咲実の怪我に巻いている包帯を交換しながら、渚はふと尋ねた。

咲実「なんですか？」

咲実のその表情は決して沈んではいなかった。それだけ総一達の事を信じているのだろう。

渚「あの、こんなことを聞くのは失礼かなあ、と思うんだけど」

そう前置きしつつ、それを口にした。

渚「咲実さんは、どうして総一君のことが信用出来るの？」

それは、今まで総一達と行動を共にしてきて、しだいに膨らんでいった疑問だった。

咲実「え・・・？」

咲実はきょとした表情を浮かべる。

渚「もしかしたら、咲実さんを利用しているかもしれない、そうは思わないの？」

咲実が負傷してから、これまでずっと総一は咲実を支えてここまでやってきた。

渚にとっては、そこが不可解だった。

咲実はいばらく思案していたが、ふっと微笑みを浮かべた。

咲実「・・・それは、ありえません。私の知る御剣さんは、決して」

渚「どうして？」

いつの間にか、渚の口調は、本来ののんびりとしたそれとはかけ離れていた。静かだが、しっかりとした口調。真剣そのものだった。

咲実「私は正直、足手まといにしかありません。もし、御剣さんが、私を騙しているのだとしても、ここまで支えてくれるとは思えません」

渚「けど・・・！」

咲実「私はずっと御剣さんの側にいました。そして思ったんです。この人は私を、うつん、私だけでなく、みんなを助けるだけに必死なんだって」

渚「助ける為・・・？」

咲実「それは生半可な正義感じゃありません。もっと、こう、しっかりとした自分の意志を感じます」

渚「咲実さん・・・」

包帯を巻くその手は、いつしか止まったままになっていた。

だが、2人ともそれに気がついていなかった。

咲実「それがどのような経緯で生じているかは分かりません。けど・・・」

咲実はそこで言葉を切った。

咲実「御剣さんは、私のことを信じてくれます。だから、私も信じてみようと思うんです」

それは、明らかな自分の意志。確信にも似た信頼関係だった。

そこで、咲実我真剣な表情を崩し、再び微笑んだ。

渚「でも・・・！でも、たとえ今はそうでも、追い詰められたら・・・」

なおも食い下がるうとする渚、彼女にとっては、この世で一番重要な事柄だからだ。

咲実「ええ。・・・昔、私と、私の家族とも絆が切れてしまった。

恐らくこの世に切れない絆なんてないと思います」

咲実「でも、だからこそ皆、絆を失わないように大切にする。それをあの人は十分すぎるほど理解してるんだと思います」

咲実「もし、この世に切れない絆がたくさんあったら、誰も大切にしようなんて思わないじゃないですか」

渚「あ……」

それはまるで哲学的だと思えるほど、咲実の言うことには説得力があった。

渚「……そっか」

渚はそれきり何も言わなかった。そして、再びその手を動かし始めた。

心なしか、その表情は晴れやかな風に、咲実の目には写った。

そうして、咲実の包帯を巻き終わった渚は、ふうと一息ついた。

咲実「ありがとうございます、渚さん」

渚「いえいえ、い〜んですよお」

いつの間にか、本来の渚へと戻っていた。

渚「そういえば、ここに食材とか、結構あったりしましたよね〜」



この部屋の初めて侵入した際、誰か他に人がいないかと探し回ったのだが、見つけたのはいくつもの食材ばかりだった。

咲実「御剣さん達、お腹空かせてるでしょうか？」

渚「んー、じゃあ、キッチンもあるし、何か作って総一君達の所に届けよっか？」

咲実「え！？それは危険ですよ。あと4時間ほどでこちらに来るはずですから、それにあわせて」

ガチャツ！

咲実「え？」

突然、ドアが開いた。

咲実と渚は、そのドアの方へと目を向けた。

渚「総一君！」

一瞬驚きの表情を浮かべていたが、そこに入ってきたのは、総一達3人の姿だった。

総一「無事でしたか！？渚さん」

総一は2人の無事を確認すると、安堵の表情を浮かべる。

咲実「御剣さん、みんなも・・・」

咲実はいみんなの無事を確認すると、ほっと息を撫で下ろした。

渚「あれえ？漆山さんは？？」

先に気づいたのは渚の方だった。総一の後から2人が続いて部屋に入ってきたが、本来、その後には続くはずの漆山の姿がなかった。

すると、安堵の表情を浮かべていた総一は、さっと表情を引き締める。

総一「あ、実は・・・」

渚「はうわ！？」

話し始めようとする総一を遮る形で、渚がすっとんきょうな声を出す。

総一「わあっ！？と、突然なんです？」

渚「あ、あのね！えと、今気付いたんだけど」

のんびりした口調に、慌てている感じが加わって端からみれば滑稽に見える。

渚「もしかして、この戦闘禁止エリアってすごく危険だったりしたりして・・・」

葉月「と、いうと？」

渚の発言に、葉月は頭にはてなを浮かべている。

渚「えっとお、この部屋、ドアが1つきり、だよね？」

興奮している為か、その口調は途切れ途切れだ。

渚「それで、さっき総一君達が来た時、思わずビクウゝて驚いちゃったんだけどお」

手塚「・・・なるほどな、そういうことが」

手塚には思い当たることがあつたらしく、納得したようにうなずく。

咲実「どういうことです？」

意図が読めない咲実に、手塚が説明する。

手塚「いいかい、嬢ちゃん。もし、このドアの前に敵が待ち構えたら、アンタどうする？」

咲実「え、それは・・・」

手塚「ドアの外側から銃なんかで撃たれたりしたら、ひとたまりもないぜ？反撃したとたんに首輪が作動しちゃう」

咲実「あ・・・」

咲実も気づいたようだ。

本当のところ、これは手塚がそのまま行おうとしていたことだ。だが、手塚はいまだ銃は持っていない為、今回は断念した訳なのだが。

まさか俺以外、それも鈍そうな渚が気付くとは。もしや、俺と同じで・・・。

いや、いくらなんでも考えすぎか。それを言ったらどいつもこいつも疑わしくなる。

手塚「とりあえず、近くの部屋に移動して、そこから方針を決めていくとしようや」

まあいい。時間はたっぷりある。じっくりと見極めさせてもらうぜ。

手塚の余裕の笑いは、やむことはなかった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

## 第8話「偽りの仮面」(後書き)

各々の思惑が交錯する中、一際存在感を増す手塚。彼は今後どのように行動していくのでしょうか？そして渚は、このまま総一達の味方となっていくのでしょうか？

次回は第9話「危機一髪」手塚達に待ち受ける危機、それは一体・  
・？今まで出番の少なかったあのプレイヤーが絡んできます。乞う  
ご期待

# 第9話「危機一髪」

## 第9話「危機一髪」

作・桐島成実

現在の状態

PDA

状態

手塚

との関係

「グループA」

手塚 義光

(10)

健康

御剣 総一

(?)

健康

良好

姫萩 咲実

(?)

足を負傷

良

好

綺堂 渚

(?)

健康

普通

葉月 克己

(?)

健康

普通

高山 浩太

(?)

??

普通

長沢 勇治

(?)

??

険悪

矢幡 麗佳

(?)

??

接触

未

郷田 真弓	(5)	??
敵対		
色条 優希	(?)	??
敵対		
漆山 権造	(7)	死亡
敵対		
陸島 文香	(?)	死亡
敵対		
北条 かりん	(?)	死亡
知らない		

咲実達と合流した手塚達は、武器や新たなソフトウェアを獲得する為、まわりの部屋を探索していた。

本来ならあと4時間、高山を階段近くで待ち伏せして合流する予定だったのだが、漆山の死により、より強い武器を確保するべきという結論に至ったのだ。

またその際、各人のPDAの数字をそれぞれ教えあった。

総一と咲実のPDAはそれぞれエースとクイーン。これには他の3

人共驚いたが、肝心の2人はお互いそれを知っていて、なおかつ一緒に行動していたらしく、2度驚かされた。

葉月のPDAは『4』、渚は『<sup>ジャック</sup>J』。

手塚のPDAは『7』。最もこれは漆山のPDAを自分のだと偽っているのに過ぎないのだが。

なにはともあれ、今すぐ首輪を解除することが出来ないと判明した為、先に入る物を探索しよう、となったわけだ。

葉月のPDAにインストールされている地図の拡張を使い、各部屋の名称から推測して、倉庫と書かれている部屋ならば、何か手に入られるのではと考え、そこに移動していた。

今手塚達が居るのは、その倉庫であった。

手塚「こいつは、想像以上だな・・・」

そこには、かつてないほどの武器の数々が、部屋中に埋め尽くされていた。

以前手塚が使っていた銃が、この武器の山からすれば、まるでオモチャみたいに見えるほどだ。

明らかに経口が大きい銃、サブマシンガンと呼ばれる連射式の銃、日本刀なんかもあり、予備の弾薬まで種類別に大量に置かれていた。

反面、救急箱や食料などの類はほとんどなく、武器の存在感に圧迫



される形で、隅の方にポツンと置かれているのみだった。

手塚「3階で武器の心配をしていたのが、まるでバカみてえだぜ」

手塚は心の奥底でほくそ笑んでいた。

手塚「コイツで、今ここにいる連中を駆逐してもいいんだが・・・」

手ごろなサブマシンガンを両手に持ちつつ、総一達に気づかれない様に、そう思案する。

ここで連中を始末し、首輪を解除したのち、下の階へと逃げ込んでゲーム終了まで待つ。

手塚にとって、それが一番安全ではないかと思えた。

だが手塚は考えあぐねていた。なぜなら不可解な部分がいまだ見えてこないからだ。

手塚「ゲームが開始して、もうずいぶんと経つが、いまだに出会えていねえヤツもいやがる」

手塚が不可解に思っているのは、そこである。

ただでさえ広いフロアが、6層にも別れて存在している。

これでは、俺達13人すべてを戦わせることは難しいのではないか？連中の狙いが争わせることならば、それは矛盾している。

手塚「・・・ん？」

考えつつ、ダンボールの中を物色していたその手が、ふと止まる。

手塚「コイツは・・・」

それに手を伸ばし、拾ってみる。

手に掴んだそれは、プラスチックの材質で出来た、四角い箱の形状をしていた。

“Tool:Player Counter”

そして表面には、細かい文字でそう記されていた。

手塚「ツール？なるほどな、こいつが以前、葉月のオッサンが言っていたソフトウェアってことか」

葉月のPDAの機能も、これから得たものなんだろう。

手塚「しかし、待てよ・・・？」

手塚の頭にあることが浮かんだ。

もし、人物の位置を特定する機能があったとしたら・・・？

もしそうなら、たとえ下の階に避難したとしても、他の首輪を外したヤツが、その機能を使って俺を奇襲する可能性もあるかもしれないな。

そうになると、何も知らない手塚の方が圧倒的に不利だ。

手塚「少なくとも俺が、その機能の類を手に入れてから、の方がよさそうだな」

そうなってくると、探す人手が多い方が良い。

俺か、もしくは連中がそれを見つけ、俺が連中を殺してそれを奪う。

手塚は、ちらりと連中の方に視線を向ける。

手塚の企みに気づいている様子はなく、懸命にダンボールや木箱をあさっている。

すると、総一が何かを発見した。

総一「あ・・・、葉月さん」

総一は探索の手を止め、それを取り出した。

葉月「なんだね？総一君」

葉月が振り返る。

総一「これって、もしかして前に葉月さんが言っていたソフトウェアアじゃないですか？」

総一はそう言って手に持っていたものを葉月に差し出す。

葉月「ああ、これは、間違いない」

葉月がまだ渚と2人で行動していた頃に、これを見つけたのだが、その時は、どのように使うのかが分からなかった。

その時、一緒に居た渚が、遊び半分でPDAの端子部分に、この四角い箱の端子を差し込んだ所、この機能の存在に気づいた、とのことだった。

総一「それと、こつちも・・・」

総一はさらに、さっきと同じ様にものを2つ取り出した。

それは2つで1セットとなっており、2つをコードの様にもので繋がれている。

葉月はとりあえず、最初に受け取ったマッチ箱ほどの大きさのそれを、目を凝らしてじっと見た。

葉月「むう・・・、そろそろ老眼かな・・・?」

細かく書かれた文字は見にくく、顔を近づけるものの読み取ることができない。

渚「ツール、ドア、コントローラー?」

いつの間にそこに居たのか、探索を中断した渚が、その文字を覗き込んで読み上げる。

渚「うーんとお・・・???」

だがピンと来ないのか、首をかしげる。

総一「とりあえず、PDAにインストールしてみませんか？」

葉月「そうだな、そうしようか」

そんなやりとりを、遠目から手塚がじっと伺っていた。

。 単純に訳せば、人物の場所を特定するものには思えんが・・・

総一「・・・なら、俺のPDAにインストールして構いませんか？」

葉月「そうだね。出来るだけ分散した方が良い」

総一「手塚さんもそれでいいですか？」

総一は振り向き、手塚に同意を求める。

手塚「あ？ああ、構わんぜ」

どの道PDAを奪う予定である手塚は、無理に反対しようとは思わなかった。

そしてインストールしたのち、PDAのトップ画面へと戻す。

すると『地図』の項目の部分が点滅し、新たな機能が追加されたことを知らせていた。

総一「地図・・・？」

遠くにいた手塚も、近づいて総一のPDAを覗き込む。

総一は試行錯誤しながら、PDAをあれこれと操作していた。

暫く後、この機能の意味が判明した。

ガチャ！

手塚「うん？」

手塚は音のした方を向いた。

すると、部屋へと続くドアが大きく開いており、部屋の中が見えるようになっていた。

葉月「なるほど、これはドアの開閉をする為のソフトというわけだね」

葉月は納得したようにうなずく。

総一「敵に追われた時なんか、うまく使えそうですね」

ひととおり理解した総一は、もう一方のコードで繋がれたソフトを手にとった。

総一「じゃあ、こっちのソフトは、と」

総一はしばらくそのソフトを色々な方向から眺める。

総一「2つのPDAにインストールしなくちゃいけないのか……。分散させるんだから、渚さんと……」

渚「ええと。わたし、とつさにうまく使えそうにないから、他の人にインストールしてほしいかなあ……」

渚は弱弱しい声で、そう呟く。

総一「うーんと、と、すると、咲実さんに、それと……」

そこで総一は手塚の方を見る。

総一「手塚さんのPDAにインストールお願いしますか？」

手塚「ん？ああ、別に構わんぜ」

手塚はそう言いつつ、PDAにそれをインストールする。

もう一方の咲実かというと、1人で歩くことが出来ない為、壁によりかかった状態で座っていた。

総一「咲実さん、PDAを貸してくれないかな？」

咲実「あ、ええ。……すみません、御剣さん。私だけみんなの役に立てなくて」

総一「いいんだよ、咲実さん」

全くだ。御剣達が側に居なければ瞬殺する所だぜ。

心の中で密かにそう思っているのは、当然手塚である。

手塚「早くしてくれ」

総一「あ、はい」

総一は咲実のPDAを持って、慌てて戻ってきた。

そしてインストールした後、トップ画面の機能の項目を押してみる。

ガ・・・ガ、ガ・・・。

手塚「む？コイツは・・・」

手塚がそう言つと、手塚自身の声が、別の方角からも聞こえてきた。

総一「これは、通信機能、ですかね？」

手塚「らしいな」

総一「けど、今の所役には立ちそうもないですね」

手塚「だな」

その後も、いくつかの部屋を探索し続けた。



手塚はその間に、さきほど見つけたソフトを、連中の目を盗みつつインストールすることにした。

さっそくソフトのコネクターをPDAに差し込む。

「プレイヤーカウンター 機能：残りの生存者数をトップ画面に表示する」

「バッテリー追加消費：極小 インストールしますか？ YES / NO」

バッテリーを余分に消費するのか。漆山のオッサンの方のPDAにインストールして良かったぜ。

手塚はYESに触れる。

すると暫く後、インストールが完了した。手塚はPDAを操作し、トップ画面を呼び出した。

「ゲーム開始より32時間26分経過 / 残り時間40時間34分」

「ルール・機能・解除条件」

その項目より更に下の部分に新たな項目が追加されていた。

「残りの生存者数 10名」

10名ねえ。最初に死んだヤツと、俺が始めた2人、ということか。

他のヤツラ、思ったより慎重だな。あと2、3人は死んでるかと思  
っていたんだが。

だが逆に考えれば、俺を攻撃してくるヤツもそれだけ居るとい  
うことになる、か。

手塚は暫く唸っていたが、御剣たちに気づかれない様、探索を再開  
した。

だが結局、新しいソフトは発見できなかった。

肝心の武器は、総一と手塚、葉月がサブマシンガン、女性陣2人は  
単発の拳銃。

救急箱や食料の類は、渚がリュックサックに入れて持っている。そ  
の方が、咲実の包帯をかえる時や、食事の準備をする時とかに便利  
だから、だそうだ。

手塚「こんなもんでいいだろう。とりあえず先に進もうぜ」

手塚のその一言で、探索を切り上げたのであった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

手塚を含む5人は、5階への階段へと向かっていた。

先頭を俺と葉月のオッサン、後ろを渚、そしてその間に御剣と、御剣に支えられる形で咲実の嬢ちゃん。

その5人が、ちょうど5階の階段のあるホールの前へと足を運んだ時、全員がそこに立ち止まった。

手塚「誰か待ち構えているかもしれないねえ」

手塚は覗き込む形で、ホールの様子を探った。

他の階よりも明らかに広いホールには誰もおらず、しんと静まり返っている。

手塚「・・・どうやら、誰もいないみてえだな」

手塚は、隣にいる葉月に小声でそう呟く。

葉月はうなずき、慎重にホールへと足を踏み入れた。

総一と咲実も後に続く。

最後尾は渚が居る。

そうして、ホールへ2、3歩足を踏み入れた時だった。

手塚「・・・ん？」

その時、手塚が気づいた。

??「・・・」

鋭い視線が俺に突き刺さっている気がする・・・どこからだ？

手塚は立ち止まった。そして側にいる葉月に目配せする。

その顔からは、緊迫した表情が伺える。

射抜くような視線、どこことなく殺意を感じるが・・・

俺は挿しているサブマシンガンを手に取りすぐに射撃出来るように構える。

そして全身に神経を集中させ、気配を探る。

するとホール前方、そこには広々とした空間だったが、その先から、わずかに動く気配を感じた。

手塚がこの事に気づいたのは、ひとえに彼のスタイルのおかげといえるだろう。

手塚は刹那的な刺激を求める性格だ。それゆえ、危険な事に対して本能的に鼻が聞く。それと同時に慎重な性格も兼ね備えている。

だからだろうか？彼はこのゲームの参加者として選ばれたのだろう。演出の引き立て役として。

俺は銃口を前方に向ける。

だが

ズドン！！

手塚が引き金を引く前に、その音はホールに木霊した。

その直後、更なる変化が起こった。

葉月「ぐあああっ！！」

手塚「なにっ！？」

前方から何か、恐らく銃弾が飛んできた。それは手塚の隣にいる葉月の肩を貫通した。

総一「葉月さん！！」

総一は慌てて駆け出そうとするが、咲実を抱えているので、おぼつかない。

葉月は銃弾により、後ろに倒れた。

咲実「わ、私の事より、葉月さんを！」

咲実が総一に行くよう促すが、総一は戸惑った。

手塚「ハッ、最後の1人とご対面、ってか」

手塚の目先には、ホールの遙か向こう側にある階段だった。そこには、いつの間にか人の姿があった。その階段の数段上の所から、手塚達に向けて銃を撃ったのだ。

しかも、その人物は、手塚達がまだ遭遇したことの無い人物だった。

麗佳「・・・次も、命中させて見せる！」

それは冷静な表情のまま、スコープを見て狙いを付けている、矢幡麗佳という名をもつ女性だった。

しかもその両手に握られているのは、長距離の狙撃用ライフル銃だった。

手塚「うまいこと考えやがったぜ」

初対面ではあるものの、その着眼点の良さに、舌を巻いていた。

階段はホールほど広くはなく、人が2人横に並んで歩けるほどの広さでしかなかった。

その為、ホールの中央、しかもある程度近づかないと壁に阻まれて攻撃が当たらない。

その上、階段を少し上がれば、あつという間に射程圏内から外れてしまう。

逆に、麗佳側からすれば、ただっ広いホールには障害物がなく狙い撃ちしやすく、ライフル銃である為に、必ず先制出来るという利点がある。

手塚「おい、オッサン！無事か！？」

手塚は視線は麗佳に向けたまま、そう呼びかける。

葉月はもんぞりうつたものの、すぐに身を起こした。

葉月「ぐ・・・、ああ、なんとか大丈夫だ」

肩を貫通したものの、動けないわけではないようだ。

ズドン！！

その時、麗佳の銃から2発目が発射される。

手塚はサブマシンガンの引き金を引いて反撃する。

だが、この距離からでは、サブマシンガンの攻撃が届かない。正確性に欠ける連射銃では、遠距離の攻撃には向かないのだ。

麗佳が撃った弾は、手塚のすぐ横を通りぬけ、壁にめり込んだ。

手塚「チイツ、おまえら、一旦引くぞ！」

不利だと悟った手塚は、素早く身を引くことにした。

本来なら、手塚は総一達のことを気にかけるようなことはしない。だが不幸なことに、逃げる通路には、総一達が進行を塞ぐ形で立っていたのだ。

総一「わ、わかりました」

手塚「オラ、オッサン、走れるか？」

葉月「な、なんとか、ぐうつ、いけそうだ。早く逃げるとしよう！」

手塚達は、もと来た通路を引き返す。

ズドン！！

3発目の弾が発射されるも、間一髪のところ、当たらずに済んだ。

その弾は葉月が倒れて起き上がった所を通過した。

一歩判断が遅れていたら、今頃葉月は命を落としていただろう。

手塚達はなんとかその場から逃れることが出来たのだった。

麗佳「・・・逃げられた？」

麗佳は覗き込んでいたスコープから目を離し、銃を下ろした。

麗佳「あの人数だし、深追いはしない方がよさそうね」

どの道、ここは通らなければならないものね・・・。進入禁止のルールがあるから。

麗佳のPDAには、ルールの一覧が書かれた画面が映し出されていた。



麗佳「私は生き残ってみせる。たとえ、誰かを殺してでも・・・！」

麗佳のその両目には、決意が見て取れた。

・  
・  
・  
・  
・

## 第9話「危機一髪」(後書き)

手塚達に立ちはだかる麗佳。一旦引いた手塚達は、この難関をどのようにして突破していくのでしょうか？

次回は第10話「駆け引き」各々の思惑が交錯し、火花を散らすこととなります。乞うご期待

# 第10話「駆け引き」

第10話「駆け引き」

作・桐島成実

【残りの生存者数：・・10/13人】

現在の状態

PDA

状態

手塚

との関係

「グループA」

手塚 義光

(10)

健康

御剣 総一

(A)

健康

良好

姫萩 咲実

(Q)

足を負傷

良

好

綺堂 渚

(J)

健康

普通

葉月 克己

(4)

肩を負傷

良

好

高山 浩太

(?)

??

普通

長沢 勇治

(?)

??

険悪

矢幡 麗佳

(?)

健康

敵対

郷田 真弓

(5)

? ?

敵対

色条 優希

(?)

? ?

敵対

漆山 権造

(7)

死亡

敵対

陸島 文香

(?)

死亡

敵対

北条 かりん

(?)

死亡

知らない

麗佳に襲われ、負傷した葉月を庇いながら、手塚達は2、3ブロッ  
ク離れた場所へと避難した。

幸い、麗佳の追撃はなく、ひとまず危険は脱したと考えた5人は、  
比較的広い部屋の一室へと逃げ込んでいた。

葉月「あっ、っ」

手塚「オラ、おっさん、大丈夫か？」

葉月「あ、ああ、なんとか」

葉月は床に腰をおろした際に、顔をしかめたが、他の人達に心配させまいと、なんとか強がっていた。

渚「いますぐ手当てしますからあ」

渚はさっそく自身が背負っていたリュックサックを降ろし、救急箱を取り出し、ガーゼや手当てを開始した。

手塚はその様子を横目で見つっ、次の行動を考察していた。

手塚「ひとまず、ここで休息。いや、睡眠をとるとしようか。オッサンの怪我もだが、色々あってまともに休んでもいないからなあ」

総一「・・・そうですね」

前に休息をとった時は、漆山の一件があっただので、ロクに休息出来ていなかった他の4人は、その提案に反対するものはいなかった。

手塚「じゃあ、お前達はゆっくりと休んでな。俺が見張りをしておいてやるからよ」

手塚はそう言い、ドアの方へと足を向ける。

総一「あ、悪いですよ。以前の休息の時、手塚さんは全く休んでないんですし・・・それに」

総一からすれば、漆山の死を目の当たりにした手塚が、一番休息が必要なのではないか、と考えていた。

だが、手塚はあえて明るく振舞った。

手塚「なあに、俺はこう見えてしぶとなのが自慢なんだぜ」

手塚は背を向け、顔だけを総一達の方に向き、そう言った。

総一「ですが・・・」

なおも食い下がる総一に対し、手塚は少し真剣な眼差しになった。

手塚「・・・お前は嬢ちゃん達の側にいてやんな。それがそいつらの為だ」

その言葉に、総一も反論しなかった。

それを確認した手塚は、ドアを開いて、部屋を出て行った。

そしてドアのすぐ隣の壁にもたれかかり、慣れた手つきで煙草を一本取り出し、味わうかのように一息吸った。

そして深く吸った息を、ゆっくりと吐いていった。

手塚「ふう、やれやれ・・・」

手塚自身、疲れがないかといわれれば、違うとはいえない。

だが一つの油断が命取りだということは、彼自身のこれまでの経験

と、このゲームを体験した上で、重々承知していることだった。

手塚「この分だと、あと30分、ってところか」

そう言いつつ、その顔にはいつしか薄ら笑いを浮かべていた。

彼は意識しているのだろう。疲れ以上に、このゲームがもたらす、危険極まりない状況を楽しんでいる自分に。

危険があるからこそ輝く男。それが手塚義光という男の生き様だった。

・

・

・

同じ頃、別の場所にて、手塚同様に一服をしている男の姿があった。

高山「……………」

以前、総一達と強制的に別れさせられ、漆山ともはぐれてしまった彼は、その後ずっと単独で行動していた。

彼は煙草を口にくわえ、両手で自身のPDAを操作していた。

彼のPDAには今、ある名が書かれたソフトをインストールしている最中だった。

高山「こんなソフトもあるとはな」

吸い終わった煙草を床に拭き捨て、それを足で踏みつける。

高山のPDAには今、首輪の位置を特定するソフトと、各フロアが進入禁止エリアになるまでの残り時間を表示するソフトが組み込まれていた。

今インストールしているのを合わせると、計3つということになる。

『インストール完了しました』

高山はPDAに差し込んでいたソフトを取り外すと、地図の画面を呼び出す。

そして操作を行い、その画面上に赤い1点を差す表示が加わった。

その近くには5つの点滅する光点が存在していた。

高山「ふむ、確率的に言えば妥当な線か」

赤い光点から矢印が引かれ、そこにある文字が表示されていた。

「JOKERの現在位置」

そう、彼がインストールしたのは、JOKERの位置を特定するソフト。



JOKERを欲している彼にとって、これほど好都合なソフトはなかった。

高山「5人が相手か……。とはいえ、行かないわけにもいかんか」

彼はそう言い、脇に挟んであった口径が大きい拳銃を、片手で構えなおした。

方針がはっきりした高山は、さっそく行動を開始するのであった。

・  
・  
・  
・  
・

煙草を何本か吸っていた手塚だったが、あつという間に30分が過ぎた。

PDAの時間を見ていた彼は、さっそく行動を開始した。

手塚はドアに耳を密着させ、物音がしないかどうか伺った。

手塚「それらしい音はなし、か。しっかり休んでいやがると見た」

それを確認した後、一段階上の薄ら笑いを浮かべた。

だが目は逆に笑っておらず、真剣そのものだった。

手塚は手に持っていたサブマシンガンを構え、ドアノブに手をかけた。

そして、ゆっくりとドアを開く。

手塚「さあて、ショータイムの始まり」

その台詞は突如切られた。

渚「あらあ、手塚さん。どうしたんですかあ？」

葉月は薬が効いているのか、毛布に包まって寝息をたてていた。

御剣と、その隣に咲実が並ぶ形で、葉月と同じく眠りについていた。

そのすぐ側に、まるでその2人を守る形で、渚が直立不動で立っていた。

さらに手塚を驚かせたのは、その渚が、恐らく総一が持っていたであろうサブマシンガンを両手に持っていたことだ。

手塚「いんや、ちょっとノドが渴いてな。飲み物かなんかくれれば嬉しいんだがな」

手塚は目論見が外れたことに、内心舌打ちしていた。

渚「あ、はいはい。ちょっと待ってくださいねえ」

渚は側にあつたりユックサクを片手で器用にあさっていた。

もう一方の手はサブマシンガンを握ったままだった。

コイツ、まさか勘付いたか？

渚からしてみれば、手塚が見張りをしている時点で、わざわざ自身まで見張りをする必要はないはずだ。

だが、渚のその表情を見る限り、とてもそうには見えない。

渚「コーヒーしかないですけど、どうぞ」

手塚「ああ、サンキューな」

手塚は缶コーヒーを受け取る。そして足早に部屋を立ち去った。

その表情から、笑いは完全に失せていた。

部屋を立ち去った手塚を確認した渚は、ホッと一息ついて安堵していたが、その事に手塚が気づくはずもなかった。

通路に出た手塚は、見張りを続行するフリをして、その場を後にした。

手塚「コイツは、とんだジョーカーが紛れていたかもしれねえ……」

手塚は渚に対し、脅威を感じずにはいらなかった。

冷静に考えてみれば、あの油断のないしぐさは、どう見ても素人に

出来るものではなかった。

だから、ひとまず距離を置いた方が良くと判断したのだ。

手塚「しかし、一体何者だ？アイツは・・・」

しばらく通路を歩いていたら手塚は、見通しの良いフロアの壁に腰掛け、煙草が入った箱を取り出した。

だが、中身を取り出そうと指を動かすが、何も掴めずに空を切る。

煙草を切らしたことに気づいた手塚は、忌々しそうにその表情を歪め、空になった箱を握り潰す。

手塚「ったく、ツイてねえぜ、こんな時によお」

潰した箱を遠くに投げ捨て、PDAを取り出す。

手塚「おいコラ、スミス。どうせ聞いてるんだろ？」

手塚はPDAに向かってそう問いかける。

スミス『んゝ、なんだい？手塚君』

その答えに応じ、前にエクストラゲームの時に現れた、カボチャのキャラクターが、画面一杯に姿を映した。

手塚「悪いんだけどよお、煙草をくれねえか？」

手塚はさっきまで毒づいていたものの、既に本来の調子を取り戻し

ていた。

スミス『君が吸ってたのと同じ銘柄？残念だけど、ここには置いてないよお』

スミスは困ったような表情に変わる。

手塚「じゃあ、何ならあるんだ？」

スミス『えーとお、そうだなあ……。まあ、基本的なのは置いてあるんだけど』

スミスは暫く間を空けた後、そう返答した。

手塚「この際なんでもいい。ニコチンはキツイやつな」

本来なら憎むべき相手のはずなのだが、彼はそれを表に出さなかった。

スミス『はいはい。手配しておくよ。それにしてもこの状況で、煙草を要求してくる人も珍しいよ』

やはり、このゲームは幾度となく繰り返されてきたってことか。

手塚は飄々としていたが、油断なく一語一句を逃さず聞いていた。

手塚「ついでに強力な武器やソフトなんかも調達してくれると嬉しいんだがな」

手塚はわざとらしくニヤつく。

スミス『あー、調子に乗ってるね、キミ。まあいいや。とりあえず煙草1ダースほど用意しておくね』

スミスも、画面には現れていないものの、わざとらしい口調が、甲高い声で表現されて伝わってくる。

手塚「おー、そいつはありがてえ」

1ダースときたか……。しかも相当の種類が置いてあると来た。

それがあらかじめ用意されているということは、それだけ吸う人間が居るということだ。

もちろん、それは俺達じゃない。

これを見ている観客、とでも言うべきか？それだけの人数が居るってわけか。

スミス『適当なところに置いておくから、あとで取りにきてね。場所指定しとくから』

手塚「へいへい」

生半可な返事を返すものの、思考は常に働いていた。

スミス『用件はそれだけかな？じゃあこっちも忙しいから、それじゃ、バイバイ』

スミスは最後までスミスらしく、画面の隅へ歩いて姿を消した。

手塚「へっ、ご丁寧なこつて」

しかし『置いておく』ときたか。他に人がどこかに潜んでいて、ソイツが置いていくのか。はたまた、ロボットか何かを使って運ぶ、という可能性もあるにはあるが……。

どちらにせよ、煙草があらかじめこの施設内に置かれているわけじゃないさそうだ。

もしそうなら、あんな返答はしないはずだ。場所さえ指定すれば済むことだ。

と、すると、ヤツらが居る場所から運んでくるということだろう。

そして何よりも、煙草を出し入れする空間は、確かに存在するということだ。

手塚はこのゲームの概念に囚われず、あらゆる情報から答えを導きだしていった。

手塚「……まあ、このゲームを降りるつもりはねえんだがな」

せつかくの楽しみを提供してくれたんだ。存分に楽しんでやろうじゃないか。

あとは煙草の味が旨けりやそれでいいんだがな。

手塚は余裕の表情で、そう呟いたのだった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

スミスとのやりとりから15分ほど経過した時、PDAから電子音が流れ始めた。

手塚「ほお、用意出来たってか」

手塚はそう言いつつPDAの画面を覗き込む。

すると、地図の項目が点滅しており、そこをクリックすると、地図ががめん一杯に映し出され、ある一点が印で示されていた。

手塚「って、オイオイ、階段の近くじゃねえか」

示された場所は、5階へと行く階段からさほど離れておらず、手塚が居る場所よりも、階段との距離の方が近いほどだった。

手塚「コイツは何か企んでやがるな。ったく、悪知恵ばかり働きやがるぜ・・・」

手塚はそう言いつつも、その示された場所へと足を運び始めた。

危険な香りはするが、興味を引かれたのも事実なのだろう。もしかすれば、何か目新しい情報が得られるかもしれないも思っていた。



手塚「ヤツラに乗せられる形つてのが、気に食わねえがな」

まあいい、勝つのは俺だ。煙草を吸いてえのも事実だしな。

手塚のその推察は、的を得ていたのであった。

・  
・  
・  
・  
・

示された場所へと続く通路を進み、その場所へと辿りつく為に、最後の角を曲がったあたりで、遠くから銃声がいくつもするのが、耳に入ってきた。

手塚「なるほどな。スミスの野郎が見せたかったのは、これが」

銃声は、階段がある方角から聞こえていた。

手塚「階段……。例の金髪の嬢ちゃんか？それとも別のヤツか？」

気にはなったが、まずは例のブツを入手することにした。

手塚はひとまず示された場所の部屋へと足を運んだ。

手塚「……。本当に用意しやがるとはな……。」

しかも、数種類の煙草が1ダースずつ、目新しいダンボールの中に目一杯詰まっていた。

気分が良いようにも感じたが、これだけ手の込んだ施設を作る連中だけに、これぐらい何でもないのだろう。

手塚「こんなにあってもしょうがねえ。適当にどれか物色しておくか・・・」

手塚は煙草の山から、2、3箱適当に選んでポケットにしまった。

手塚「あん？」

先ほどから、銃声が絶えず鳴り響いていたが、だんだんと音が大きくなっていくのを感じた。

手塚「近くにいやがるのか・・・いずれにしても、逃げ道のないこの部屋に留まるのは、正解じゃねえな」

手塚は周りをいつも以上に警戒しつつ、部屋へ出る。

ガーン！ガーン！ガガガガッ！

すると、銃声はかなり近くから発せられていることがわかった。

しかも、今のは階段の方ではなく、手塚がこの部屋へと歩んできたであろう方角から聞こえてきた。

手塚「移動してやがるのか。片方は単発の銃。もう一つは俺の持つ

サブマシンガンと同じヤツか・・・？」

手塚は銃声がしたであろう通路の角の前まで来て、そつと様子を伺う。

すると、2人の姿が手塚の居る側に向けて通路を直進してくるのが目に入った。

片方が追われ、もう片方がそれを追いかけるという形だ。

手塚はその2人に見覚えがあつた。

追われているのは、以前手塚が襲つた幼い少女だった。そして追っているのは・・・。

手塚「長沢のガキか。へっ、面白くなつてきやがつたぜ」

手塚は躊躇なく、手元にあるサブマシンガンを構えるのであつた。

・  
・  
・  
・  
・  
・

## 第10話「駆け引き」（後書き）

優希、長沢、そして手塚と、ますます混沌としてきた情勢。

さて、一体誰が死に、誰か生き残ることになっていくのでしょうか？

次回は第11話「混戦」手塚が加わったことにより、戦いという名の烈火は激しく燃え上がるのです。次回も乞うご期待

第11話「混戦」

第11話「混戦」

作・桐島成実

【残りの生存者数・・・10/13人】

現在の状態

PDA

状態

手塚

との関係

手塚 義光

(10)

健康

「グループA」

御剣 総一

(A)

??

良好

姫萩 咲実

(Q)

??

普通

綺堂 渚

(J)

??

不穏

葉月 克己

(4)

??

良好

高山 浩太

(?)

??

普通

長沢 勇治

(?)

??

険悪

矢幡 麗佳

(?)

?  
?

敵対

郷田 真弓

(5)

?  
?

敵対

色条 優希

(?)

?  
?

敵対

漆山 権造

(7)

死亡

敵対

陸島 文香

(?)

死亡

敵対

北条 かりん

(?)

死亡

知らない

長沢「くそお、さっさと撃たれちまえよ！」

長沢の持つマシンガンが火を吹く。

ガガガガッ!!

優希「ひっ」

優希の近くに銃撃が通り過ぎる度に、か細い悲鳴をあげる。

かれこれ10分ほど経過しただろうか。優希は間髪入れずに長沢にずっと追いかけれ続け、度々銃で狙われていた。

長沢からすれば、これほど格好の獲物はなかっただろう。

優希と出会った長沢は、躊躇することもなく、先制とばかりに優希に攻撃を仕掛けていた。

優希も慣れない銃を手に持ち、何度か反撃はしたものの、追いかけていたという状況の為、狙いがつけられないでいた。

しかも、銃を撃った時の反動で、手が大きくブレてしまい、弾は壁や床に当たり、大きく外れる結果となっていた。

優希「た、助けて・・・、誰かッ・・・！」

助けを呼ぶ声も、息を切らし続けている今の状況では、その声もかすれて途切れ途切れにしか聞こえない。

長沢「ぜえ、ぜえ、弱虫のくせにっ！」

長沢は再び銃口を優希に向ける。

優希は直進状の通路を走り抜け、左右に分かれる曲がり道を、左に曲がろうとした時、目先に人の姿が見え、びくりと大きく身体を反

応させた。

手塚「よお、また会ったな」

優希「！！？」

通路の角の先には、かつて自身を銃で襲った男が、堂々と優希の目の前に立ち塞がっていた。

優希「あ・・・ああ・・・」

逃げ道を塞がれたことで、優希の身体は瞬間的に硬直した。

だから、反対側の曲がり角に逃げればいいと気付く前に、長沢の銃撃が、動けぬ優希の身体に突き刺さった。

ザシュザシュッ！！

優希「あ！う・・・！」

硬直しきった優希は、悲鳴をあげることもできずに、身体から力が抜ける。

優希に注目していた為、その先に手塚がいることに長沢が気付いたのは、優希が倒れこんだ後だった。

長沢「お前は手塚！！、やっと見つけたぞ、この野郎！！」

長沢は勢いそのままに、銃口の先を、通路の角の向こう側にいる手塚にかえた。



手塚「おーおー、相変わらず元気なこつて」

対する手塚は、顔だけをわずかに通路の角から出した状態で、余裕の口ぶりであった。

手塚「だがよお、ちったあ自身の愚かさ、ってものを自覚した方がいいぜ」

長沢「なんだとっ!!」

手塚の挑発に、律儀に長沢は反応する。

手塚「銃を持つ相手に突っ込んでくるバカさ加減を自覚しろ、って言ってるんだよ」

手塚は口ぶりは余裕であったものの、その動きに無駄はなく、通路の角から銃口をわずかに出し、引き金を引こうとした」

長沢「な!?!」

長沢は勢いよく走っていた足を、わずかに乱す。

手塚「ん?」

手塚は一瞬、長沢が身の危険を悟って動揺を見せたのだと思った。

だが、長沢の目線が、手塚が向ける銃口から逸れていることを読み取り、それが違うということに気付いた。

ここは階段近く、度重なる銃撃、そして長沢の目線

その答えが一瞬にして手塚の脳内を駆け巡り、反射的に床を蹴って後ろへ跳んだ。

ガーン！ガーン！！

そこへ銃撃が飛んで来た。

長沢「うわっ！」

長沢も思わず身体を仰け反らせる。

銃撃はちょうど手塚と長沢との真ん中の壁へと突き刺さった。

手塚「やっぱりアンタだったか、嬢ちゃん」

そこには、いつの間に近づいてきたのか、手塚や長沢が来た通路とは別の方角に、麗佳の姿があった。

その手には、前に持っていたライフル銃ではなく、口径の大きい単発銃だった。

単発ではあるものの、命中すれば致命傷になりかねないほどの威力を秘めている大型の銃だ。

手塚は跳んだ勢いを両足で踏ん張り、再び体勢を構えた。

手塚の視界からは麗佳の姿は、角の壁に遮られて見えない。つまりある程度は距離をとっている、ということだった。

今3人は、Y字型の3方向の通路に、別々に居る状態へとなっている。

状況としては、Y字型の中心部の間近に居て、身をさらけ出している長沢が一番不利だ。

とはいうものの、手塚も麗佳もすぐには攻撃を仕掛けなかった。

手塚「コイツはまずいな、たとえ長沢を葬ったとしても、その瞬間を狙って攻撃を仕掛けてくる」

恐らくあの嬢ちゃんも俺と同じく、そう考えていることだろう。だが長沢のガキのことだ。そんなことはお構いなしに攻撃を仕掛けてきたら、否が応にも、2人を同時に相手にしなければならぬ。

素早く状況を理解した手塚は、きびすを返して2人の居ない通路の方へと駆け抜けていく。

長沢「待ちやがれッ！手塚ッッ！！」

長沢は手塚の予想した通りに突っ込んできた。

手塚「まったく、やっぱりガキはガキか・・・」

手塚はやれやれといわんばかりに、構わず通路を走り続けた。

そして、長沢が通路の角を曲がって銃を撃つ前に、手塚はその向こうの通路の角を曲がった。

長沢「くく！！どいつもこいつも逃げてばかりじゃねえか！！」

自身の思い通りにいかない状況に長沢は憎々しそうにイラつく。

手塚が曲がって逃げた通路の角を、長沢も続いて曲がる。

手塚「・・・大体、あれだけ声を張り上げていたら、それだけ息が続かなくなるっつの、まだ気付かないのかねえ？」

手塚は長沢の猪突猛進ぶりに、ほとほと呆れを見せていた。

長沢「おいコラ！腰抜け！！さつさと」

とたんに長沢の声が遮断される。

長沢「え！？」

いつの間にか、長沢の足は宙を浮いていた。

長沢が走っているはずの通路。長沢が居る部分の床が、ぽっかりと穴が空いていた。

追い続けることに夢中だった長沢は、自らの足で落とし穴の罠を作動させてしまったことに、全くといっていいほど気付いていなかった。

長沢が状況を理解したのは、すべて事が終わってからだった。

長沢の足は、バタバタと空回りしたまま、まるで無抵抗そのままに、その穴へと落下した。

長沢「うわあああつ!!」

長沢の悲鳴も、落ちた後にすぐ穴が閉じられたせいで、それきり声は全く聞こえなくなった。

手塚「・・・究極のバカだな、アイツは」

手塚はそう呟いたが、すぐに気を締めなおした。

手塚「おっと、まだ気を緩めるわけにはいかなかったな、嬢ちゃん」

手塚は麗佳が居るであろう通路の先の方に目を向け、そう言い放つ。

だが、麗佳は沈黙を保ったままだった。

手塚「あん？返事をしない、というよりは・・・」

まるで気配が感じられない。考えてみれば、全力で走っている俺を追って長沢が追いかけていたわけだから、長沢は背後を無防備にしていたはずだ。

すると、あの嬢ちゃんにとっては、狙いどころのはずなのに、銃撃がまるで聞こえてこなかった。

手塚「・・・逃げやがったか」

そう結論づけた手塚は、ひとまず優希が倒れている場所へと向かつ

た。

自身の首輪を外す為、優希の首輪を作動させる為に。

・

・

・

手塚は一応は周りを警戒していたものの、ここで麗佳が奇襲を仕掛けるとは思っていなかった。

近くに居るとわかっているのに、奇襲を仕掛けるのはあまり意味がないことだと分かっているからだ。

手塚「長沢のガキと違い、結構頭が切れやがるな、あの金髪の嬢ちゃん・・・」

手塚の予想どおり、あれから麗佳が姿を見せることはなかった。

その疑問は、すでに亡き者となっている優希を前にして、すぐに解けた。

手塚「なるほどな。あの嬢ちゃん、俺たちよりもPDAを回収することを優先させやがったか」

目的は俺たちじゃなくPDAってことか。結果的に、一番漁夫の利を得たのはあの嬢ちゃんだったのかもしれないな。

手塚「とはいえ、俺も収穫を得たわけなんだがな」

手塚は『10』の図柄が描かれたPDAを、ぴくりとも動かなくなつた優希の首輪へと差し込む。

『あなたは、解除条件を満たすことが出来ませんでした。15秒後にペナルティが施行されます』

手塚は素早くその場を離れる。

しばらくして、その幼い少女の身体に無数の銃撃が撃ち込まれる。

手塚「生死に関係なくペナルティが施行される、か」

手塚の眩きも、銃撃にかき消された。

・  
・  
・  
・  
・

優希の首輪を作動させた後、ほんの少し離れた所で煙草をふかしていた手塚だったが、通路の向こう側から複数の足音が近づいてくるのがわかった。

聞こえてくる方向から、それが御剣達なのだと、すぐに予想がついた。

恐らくそこには渚の姿もあるのだろう。ならば逃げるのが良策のようにも思えた。

だが彼はあえて逃げなかった。なぜなら……。

総一「で、手塚さん!!」

手塚「おう、お前らか」

手塚の予想は当たっていた。

慌てた様子の総一に対し、片手を挙げて呑気に応じる手塚。その違いは端からみれば滑稽にも見えた。

御剣以下4人は、手塚の元へと走ってくる。

総一「一体どうしたっていうんです!?!いきなり姿をくらましたりして……」

総一は血相を変えてそう詰め寄る。

手塚「あー、前に言っただろ? 幼い少女の姿を見かけたことがあるってな。そいつが長沢のガキに追いかけてたんで、助けようと思っただけ」

手塚は嘘八百をかまし続けた。

手塚「お前達を呼んでたら姿を見失うかもと、とっさにそう思っただけ、仕方なく1人で追跡した、というわけさ」

総一「そ、そうだったんですか……」



その言葉に、総一の怒気も失せた。

手塚は今まで起こった状況をかいつまんで説明していった。

長沢がその幼い少女を撃ったこと。そこへ金髪の嬢ちゃんが攻撃を仕掛けたこと。

そして、長沢を撒いた後、ここへ戻ってきたところ、首輪が作動していたこと。

手塚「恐らく、あの金髪の嬢ちゃんの仕業だとは思うんだがな・・・

」

総一「と、いうことは彼女は『10』のPDAの持ち主だ？」

総一の疑問に、手塚はかぶりを振る。

手塚「いんや、そうとは限らんぜ。首輪を他のヤツらに渡したくなかったからかもしれないし、ただペナルティがどのようなものを把握したかっただけなのかもしれない」

手塚は吸っていた煙草を床に投げ捨てた。

手塚「いずれにしても、金髪の嬢ちゃんが階段のところにずっと居座っていたことは確実だ。ということは」

手塚の続く言葉を、他の4人はじつと聞き入る。

手塚「この近くには人が集まっているってことさ。長沢の野郎もいずれここにやってくる」

すると、沈黙を守っていた葉月も口を開く。

葉月「すると、手塚くんの首輪を外すチャンス、ということになるのかな？」

あー、そうだった。確か俺のPDAは『7』で、他のヤツらと遭遇する必要がある、ってことになってるんだっただな。

面倒だな、こりゃ……。だが下手なことを言って感づかれても困るな。

手塚「そうしたいのはやまやまだが、ここで襲われたら金髪の嬢ちゃんとか挟み撃ちになるのがオチだ。ここはヤツの居る階段を突破する方が利口なんじゃねえか？」

手塚の問いに各々が考え込む。

咲実「問題は、どうやって突破するか、ですね」

手塚「そうなるな」

暫くの沈黙後、総一が唐突に切り出した。

総一「俺もその方法をずっと考えてました。で、恐らくこうすればいいと思うんですが……」

総一の話す突破の方法に、手塚がうなずく。

手塚「ああ、いいんじゃないか。やってみようぜ」

手塚はさも感心した様に振舞ったが、目はギラついていた。

ここにも、油断ならないヤツがいやがったか・・・。

ただの銃撃を逸らすバリケード、ぐらいにしか思ってたんだがな。

手塚はそう思いつつ、麗佳が居るであろう階段へと足を運んでいったのであった。

・  
・  
・  
・  
・

## 第11話「混戦」（後書き）

互いにぶつかりあい、そして命を落としていく人達。この戦火はいまだ止む事を知らずに続けられていくのでした。

次回は第12話「再来」階段で待ち構えているであろう麗佳。一体どのように突破していくのでしょうか。そしてこちらへ向かっているであろう高山は一体？乞うご期待

# 第12話「再来」

第12話「再来」

作・桐島成実

【残りの生存者数・・・9 / 13人】

現在の状態

PDA

状態

手塚

との関係

「グループA」

手塚 義光

(10)

健康

御剣 総一

(A)

健康

良好

姫萩 咲実

(Q)

足を負傷

普

通

綺堂 渚

(J)

健康

不穩

葉月 克己

(4)

肩を負傷

良

好

高山 浩太

(?)

??

普通

長沢 勇治

(?)

??

敵対

知らない	北条 かりん	(?)	死亡
敵対	陸島 文香	(?)	死亡
敵対	漆山 権造	(7)	死亡
敵対	色条 優希	(?)	死亡
敵対	郷田 真弓	(5)	??
敵対	矢幡 麗佳	(?)	健康

手塚達5人は、5階へと上がる階段の、ホールの手前の通路までたどり着いていた。

総一「どうです?」

総一は、ホールを覗き込んでいる手塚に小声で問いかける。

手塚「どうだろうな？少なくともホールには、居ねえことはたしかだが・・・」

手塚も小声で返事をする。

居るか否かというのは、もちろん麗佳の事である。

総一「と、すると、やっぱり前に来た時と同様、階段を少し上がった所に居るんですかね？」

手塚「そりゃ分からんが、かえって好都合なんじゃねえか」

総一「そうですね」

ホールのすぐ手前に居るのは、手塚と総一の2人だけである。

他の3人は、少し後ろの方で後方の警戒をもらっている。

今回の奇襲は、人数は少なくとも問題はないのだ。

総一「じゃあ、さっそく・・・」

総一は自身のPDAを操作した。

そして、一通り操作が終わると、2人は揃ってホールへと飛び出した。

麗佳「！来た！？複数、かしら？」

階段の少し上の方で、ホールから大きな足音が木霊するのを聞いた

麗佳は、階段を下りつつ、手に持っていたライフル銃のトリガーに指を掛け、いつでも発射できる様に構えを取った。

その時だった。

ガラガラガラ・・・

足音をかき消すほどの、狭い間隔の階段に、轟音とも言えるほど大きな音が、麗佳の耳に入ってきた。

麗佳「！なっ！？」

その音は、麗佳のすぐ近くから聞こえていた為だ。

階段上の天井から一番下の段に向けて、何かが勢いよく降りてきた。

ガシャーン！！

それは、対火災用の防火シャッターだった。

麗佳の目先に降りてきたそれは、こちらに突っ込んできているであろう人物とホールの情景を、一瞬にして塞いでしまった。

だが、一瞬だけその人物の姿を見ることが出来た。

麗佳「あれは、さっきの・・・」

そのことに気付いた麗佳は、考えるよりも先に、行動へと移していた。



対する手塚と総一は、ホールを横断し、防火シャッターの前まで迫った。

その間、総一はPDAを再び操作していた。

そして手塚の手には、催涙ガス弾が握られていた。

これは、先ほど総一達が休憩していた場所の、隅の方にあつた小型の木箱の中に入っていたものだ。

その部屋には、他に武器らしきものが見当たらなかった為、最初に見つけた総一は、それが武器だとは思わずに封を開けたそうだ。

だが、それが催涙ガス弾だと気付いたのは、その横の方に、ご丁寧に説明書が付いていた為だ。

更には、その隣に防毒マスクが2つ置かれていたのだ。

今手塚達2人は、これをそれぞれ付けている状態だ。

この催涙ガス弾は、殺傷力こそないものの、一時的に相手の動きを封じこめることが出来る。

手塚は、その催涙ガス弾を投げる構えを取り、側にいる総一に問いかける。

手塚「御剣！まだか！」

防毒マスクをかぶっているせいか、その声は少しくぐもっていた。

総一「もう少し、・・・出来ました！」

総一のその言葉が終わった時、目の前にある防火シャッターが再び開き始めた。

手塚「よしっ！今投げ込めば・・・！」

足元にわずかに出来た隙間から、催涙ガス弾を階段の方へと投げ込む。

シューウウウウ

撒き散らされたガスは、階段全体をあつという間に覆いつくした。

手塚「いけっ！素早く取り押さえるんだ！」

総一「はい！」

総一、手塚の順に、大分開いているシャッターを潜り抜け、階段へと足を踏み入れた。

御剣の野郎が金髪の嬢ちゃんを相手にしている所を、俺が背後から拳銃で2人を仕留める。

渚のヤツはここには居ねえし、首輪を作動させれば俺の首輪が外れる。

と、そんな手塚の密かな企みも、すぐに泡となった。

手塚「あん？・・・どうやら、逃げられたようだな」

階段に居るはずの麗佳の姿は、うずくまっているわけでもなく、どこにもない。

総一は、階段を駆け上がり、5階へと足を踏み入れ、周りの様子を探る。

総一「どうやら、そうみたいですな」

やはり、麗佳の姿は影も形もなかった。

手塚「・・・自身の危機を察知して、瞬時に引き上げやったか。でなきゃ、逃げ切れるとは思えねえな」

ともあれ、麗佳という障害を取り除いた手塚達は、他の3人を引き連れて5階へと足を踏み入れたのであった。

・  
・  
・  
・  
・

5階の通路を歩いていた5人は、先頭を手塚と総一が、その後ろに渚と、渚に支えられている咲実、後方を葉月が、それぞれ警戒していた。

渚「ふう・・・」

渚が軽く息をつく。

咲実「あの、すみません、本当に」

渚が持っていた荷物は、今は総一が背負っているものの、女の手で一人を支えるのは、結構な重労働だった。

渚「いいんですよ、咲実さん。困ったときは、お互い様って言うでしょ」

咲実「それは、そうなんですけど」

これまでは総一がずっと支え続けていたのだが、先ほどの奇襲を行う際に渚と代わってもらったのだ。

その後、総一は再び交代を申し出たのだが、渚は「私も総一君と咲実さんのことが好きだから」とそのまま支え続けているのだった。

なおも申し訳なさそうな表情の咲実に、葉月も口ぞえをした。

葉月「いいんだよ。本来なら、大人の我々がしっかりしなくてはいけないんだ。それに泣き言を言っていたら、ここまで君を支えてきた総一くんに申し訳がないからね」

葉月はそう言いつつ優しく微笑む。

渚「うう、私はまだ18ですよ」

葉月の言う大人に自身が含まれていることに不満だったのか、渚が

頬を膨らませて抗議する。

葉月「ああ、ごめんごめん。そうだった、かな？」

謝っているものの、引がかかった疑問に首を傾げていた。

渚「・・・心は」

渚のボソツと付け加えた台詞に、約1名を除く他の人達が吹きそうになる。

その1名は、先頭を歩きつつも、ずっと背後に居る渚達を警戒していたのだが。

咲実「・・・そう言えば、高山さん、無事なんでしょうか？」

咲実は、これまで色々あって言い出せなかったが、はぐれてしまった高山の事をずっと気にしていた。

高山の総一に対するゲキがあつたからこそ、今の総一が、咲実が居るといっても過言ではない。

・・・もちろん、長沢を追い払った文香の功もあるが、その彼女は既にこの世の人ではなくなっていた。

その事があつただけに、余計に気になるのだろう。

渚「うーん、私は、その人には会ったことがないんだけどお、大丈夫って思った方がずっとマシだよー」

渚は不安を吹き飛ばそうと明るく振舞う。

咲実「・・・そうですね」

渚の明るい励ましに、咲実も軽く微笑む。

その様子を、ずっと前を警戒していた手塚が、横目で冷やかに見ていた。

ハッ、お気楽な連中はいいいね。何時殺されるかもわかんねえってのによ。

手塚は最初に総一達と合流してから、総一達を消し去ろうとずっと隙をうかがっていた。

それが実行に移せなかったのは、総一と渚の存在だった。

他の2人は素人同然なのだが、総一のいざという時の行動力には目を見張るものがあるし、渚という女も一見天然ボケを振舞っているが、垣間見せる隙のない動きは、油断ならないものがある。

その為、ふんぎりがつかないのであった。

もし、4人共素人同然だったならば、手塚は迷いなくその牙をむいていたことだろう。

2人の存在が、手塚をより慎重な行動へと抑制していたのである。

手塚「オイ、お前ら！おしゃべりしてねえで、ちったあ」

振り向いた手塚は、4人の後ろで素早く動く『何か』が目線を横切った。

それは手塚達が居る少し後ろの、横に曲がる通路から飛び出してきた。

??「動くな！」

そして、その人物は、手に持っている銃を、最後尾に居る葉月の身体へと密着させる。

葉月「なっ　!?!」

葉月は後ろを警戒していたものの、その俊敏な動きに、後手に回る結果となってしまった。

渚「あ、あなたは・・・」

すぐ後ろに居た渚も、咲実を支えている為、身動き出来なかった。

咲実「高山さん！」

噂をすればなんとやらか。その出で立ちは、間違いなく高山本人だった。

だが咲実達に喜びの感情は沸き起こらなかった。先ほど高山が発した低く鋭い言葉。そして総一達に向けている銃。

明らかに総一達を警戒していた。

総一「高山さん！なんで・・・」

総一の率直に口にした疑問は、高山の鋭い言葉に掻き消える。

高山「どうしてお前がここに居る。手塚」

高山が警戒していたのは、銃を突きつけている対象の葉月でも、総一でもなく、その向こうに居る手塚だった。

手塚「居ちや悪いかい？」

対する手塚はたじろぐ素振りも見せず、余裕の表情だった。

咲実「高山さんっ！私達は争う気はありません！だから銃を下ろしてくださいっ！」

咲実の必死の呼びかけにも、高山は動じない。

高山「確かにお前達はそうだろうな。しかし・・・」

高山自身、ここに手塚が居ることは想定していなかった。

高山は首輪の探知の機能を使い、ここまでやってきた。当初の予想では、これが総一達である可能性が高いと踏んでいた。

そして通路からその5人の様子を伺っていた所、緊張感に欠ける笑い声が聞こえ、それに誘われる形で姿を表した。

だが、その集団に隠れて見えなかったが、先頭に手塚が居ることに気付いたのは、通路に飛び出した瞬間だった。



手塚と高山が顔を合わせたのは、ゲームが始まった時のみだが、高山はその時、この男から発する危険極まりない二オイを嗅ぎ取っていた。

その男と総一達が共に居る。それは高山の想定範囲外だった。

高山「・・・まあいい。一つ尋ねたいのだが」

咲実「な、なんでしょう？」

不安そうな顔を向けつつ、咲実はそう返事をする。

高山はひとまず手塚の存在は置いて、交渉に入った。

高山にとっても、手塚にとっても、すぐには攻撃出来ない位置に居た。

なぜなら、その間に総一達が居るから。

この瞬間、総一達はこの2人の実質上のバリケードと化していたのだった。

高山「単刀直入に言おう。JOKERを俺に渡してもらいたい」

高山は今も銃を葉月に向けたまま、微動だにしない。

当の葉月は、間近にある銃の為に身動き一つできない状態だった。

そこに、手塚が割り込んでくる。

手塚「オイオイ、大将。その言い方だと、まるで俺達がJOKERを持っている、って口ぶりだな」

手塚は大げさに片手を軽く上に挙げる。

高山「お前達が持っているのだろう？」

その声はさらに鋭く、目も射抜くような目線を手塚達に向ける。

手塚を除く総一達は、お互いに顔を見合わせる。

だが、手塚はそれを待たずに、高山のその目線を受け流した。

手塚「いんや、知らないねえ」

手塚は即答する。今自身がJOKERを持っていることを、総一達に知られたくはなかったからだ。

妙な女1人でも大変だというのに、他の連中にも今まで黙っていたことを不審に思われてしまう。警戒されるだけならまだしも、全員が一斉に銃で狙ってくる事態にでもなれば、手塚に避ける術はない。

総一「・・・俺達も持ってますん」

総一は、誰も持っているとは言わなかった為、代表してそう答える。

高山「そうか、残念だ」

高山は鋭い視線を向けたまま、密着していた銃口を葉月から放す。

葉月「！」

その事に気付いた葉月だったが、その銃口ははまだ総一達に向けられていた。

そして、少しずつ後退していく。

総一「ま、待ってください！高山さん。一体どうしたって言うんです！？」

高山は通路の角の前まで後退した後、その視線が総一の方に向けられる。

高山「一つ忠告しておく。その男とはすぐ縁を切った方がいい」

総一「え・・・？」

総一の疑問をよそに、高山は通路の角に身を隠し、そのまま立ち去ってしまった。

手塚「やれやれ」

その言葉の意味する所を理解していたのは、この場に居る中では皮肉にも手塚本人だけだった。

渚「……………」

実際の所は、もう一人居たのだが・・。

・  
・  
・  
・  
・

## 第12話「再来」（後書き）

高山との対立。郷田、長沢、麗佳、そして高山。

果たして手塚は、この者達とどのような命の削りあいをするようになるのでしょうか？

次回は第13話「渚の決意」ここまで影の薄かった渚ですが、彼女もまた、何かを企んで行動を起こすのでした。乞うご期待

# 第13話「渚の決意」

第13話「渚の決意」

作・桐島成実

【残りの生存者数：．．9 / 13人】

現在の状態

P  
D  
A

状態

手塚

との関係

「グループA」

手塚 義光

(10)

健康

御剣 総一

(A)

健康

良好

姫萩 咲実

(Q)

足を負傷

普

通

綺堂 渚

(J)

健康

不穩

葉月 克己

(4)

肩を負傷

良

好

高山 浩太

(?)

??

陰悪

長沢 勇治

(?)

??

敵対

矢幡 麗佳

(?)

健康

敵対

郷田 真弓

(5)

??

敵対

色条 優希

(?)

死亡

敵対

漆山 権造

(7)

死亡

敵対

陸島 文香

(?)

死亡

敵対

北条 かりん

(?)

死亡

知らない

高山が去り、その場に残された総一達は、しばらく啞然としていたが、すぐに我を戻した後、行動を開始した。

【3階が進入禁止になりました！】

このままぐすぐずしていたのでは、いずれ5階も進入禁止となってしまう。

ルールという呪縛に囚われている以上、ゲームを放棄するヤツは、

すなわち『死』を意味するのだから。

手塚は残り時間を確認しようと、ポケットにしまっていたPDAを取り出す。

手塚「つと、こつちじゃねえな。こ・・・」

その動きがピタリと止まる。

手塚「なんだ？偽装機能が解除されてやがる」

そのPDAはかつて手塚が最初に見た、道化師の姿へと戻っていたのだ。

手塚「俺自身が操作したわけじゃない。と、すると・・・」

その疑問の意味をたぐりよせた結果、一つの答えへとたどり着いた。

手塚「なるほどな、高山の大将のPDAは『2』ってコトか」

ルールの一覧に『2』のPDAの持ち主が半径1メートル以内に来ると偽装機能が自動的に解除されるって、書いていやがったな・・・。

そうすると、大将がJOKERを欲しがっていた理由も分かる。

手塚「コイツは、ますます面白いことになりそうだな」

遅かれ早かれ、いずれ再会することになりそうだな。



手塚はそんな風に考えていた。

そんな中、部屋を搜索していた手塚達は、溢れんばかりの銃器の数々に、驚きを通り越して呆れるしかなかった。

手塚「あの金髪の嬢ちゃん、5階で例のライフル銃を手に入れた後、階段前を見張っていた、ってことになるな」

手塚の手には麗佳が使っていた銃と同じものが手に握られていた。

総一「そうなりますね」

総一はそう言いつつ、別の木箱を開けてみる。

だが、いくら強力な銃であっても、相打ちじゃあ意味がねえな。

手塚は、新たな武器を手にするたび、側に居る総一達を攻撃しようともくろんでいた。

それが出来ない一番の理由は、渚の存在があつたからだ。

渚は、常に銃を構えており、手塚が裏切らないか否かずっと見張っていた。部屋を探索する時でさえ、彼女は手塚と総一達の間を割って入る形をとっていた。

それは、総一達に銃を向けることを許さぬ、堅固たる意志の表れのように手塚の目には映っていた。

この時点で、渚が只者でないことを手塚自身、揺ぎ無い確信を持っていた。

手塚「・・・もしかしたら、早い内に大胆に切り込んでいた方が楽だったかもな」

手塚はそう嘆く。現実さを優先させた結果となっているが、その方が性に合っていると自覚していた。

渚「何か言いましたかあゝ？」

手塚の嘆きに、近くに居た渚が反応する。

手塚「いんや、何でもねえよ」

手塚はそうはぐらかす。

だが、恐らく、いや確実にこちらの意図を読み取っている。

手塚はこの目の前に居る女性に、イラ立ちを感じずにはいられなかった。何もかも見抜いている上で、あえて泳がされている。そんな気がするからだ。

結局のところ、狐と狸の化かしあい、ってトコか。

だが、それもいささか飽きたな。

そろそろ、ヤツの化けの皮を剥いでやりたいところだが・・・。

その機会は、もうすぐやってくるのであった。

最も、手塚自身もそれに気づくはずもなかったが。ただ一人を除いては……。

・  
・  
・  
・  
・  
・

一方その頃、手塚達と別れた高山も、着々と準備を整え、行動をおこしていた。

高山「殺しの手伝いをしてもらいたい」

長沢「なっ!？」

高山の前に今居るのは、突然の出来事に驚いている長沢の姿だった。

長沢は最初、急接近してきた高山に対し、慌てて銃を構えようとした。

するとそこへ『待て!話がある』と高山が言った矢先に、この申し出である。

長沢は、その意図が読めずに困惑していたが、すぐに邪な笑みを浮かべ始める。

長沢「……もしかして前に俺がアンタを襲ったこと、もう忘れち

まったのかよ。ボケる歳でもないだろうにさあ」

高山「問題はない」

長沢の問いに、高山はキツパリと答える。

高山「その過程で、首輪なりPDAなり必要であれば、お前にくれてやろう」

長沢「つまり、俺と手を組めって言いたいわけ？」

高山「そうだ」

そのあまりにも整然とした態度に対し、長沢はあざ笑うように口元を歪ませる。

長沢「しかし、一体誰を殺そうってんだ？」

長沢は、高山の真意を探る為に、そう聞いてみた。

高山「お前が嫌っている、手塚という男だ」

長沢「へえ・・・」

その答えに、長沢の口がさらにつり上がる。

高山「お前も、人を殺すことに躊躇いはないのだろう？」

一方の高山は、いつもと変わらず無表情なままだ。

長沢「それは奇遇だね。俺もあいつは殺そうとずっと思ってたんだ」

一度、手塚の面前で落とし穴の罠にかかって落ちたという事實は、プライドが高い長沢にとって、屈辱以外の何者でもなかった。

そのせいか、もはや彼には手塚を殺すことで頭が一杯だった。

高山「そうか」

高山も、この長沢が手塚に対して反感を持っている、ということは理解していた。

その為、手塚を葬る為に手を組むのは最適だと判断した。

高山「幸い、手塚の位置はこちらで特定出来る。その気になればすぐに攻撃を仕掛けることが出来るだろう」

長沢「ああ、わかったよ。ただし、とどめを刺すのは俺だ。首輪やPDAが壊されたらイヤだからね」

長沢は、自身の解除条件を明かすつもりは毛頭なかった。だから何のPDAを持っているのか分からない様にする為に、そんな言い方をした。

高山「いいだろう。・・・ただし俺を殺すのは、手塚を葬ったあとにした方がいい」

長沢「・・・へっ」

・  
・  
・  
・  
・  
・

部屋の探索をしばらく行っていた手塚達であつたが、怪我をしている葉月の状態が芳しくないことに、総一達は気づき始めた。

葉月「つつ・・・ふう・・・」

総一「大丈夫ですか？葉月さん！」

葉月は弾で肩を貫通していた。その弾は決して小さなものではなく、包帯には今も血がへつとりついていた。

抗生物質により発熱等はないものの、この2日近くに及ぶ身体の酷使は、さすがに疲労を蓄積しているようだ。

実際、初老にさしかかっている葉月にとっては、相当なものだろう。

渚「今、手当てをしますからあゝ」

渚はさっそく、救急箱を取り出し、丁寧に手当てしていく。

だが、その間も、手塚から目を背けるようなことはしなかった。

葉月「すまない、迷惑をかけるね」

葉月は本当に申し訳なさそうだった。

総一「それは言いっこなしですよ、葉月さん」

この2日あまりの共同作業で、すっかり打ち解けている風であった。

もともと、手塚にとってはどうでも良いコトであったが。

手塚「に、しても、さすがに疲労もピークだな。今まで休憩のたんに何か起こりやがったからなあ」

総一「あ、じゃあしばらくはここで休憩をとりますか？」

手塚「仕方ねえなあ。先に急ぎてえ気持ちもあるが、今は休め」

手塚はそう言いつつ、部屋を出て行くとする。

葉月「あ、待ってくれ！君もずっと動き詰めじゃないか」

すると、痛みに呻いていた葉月が、手塚を引き止める。

たしかに葉月の言うとおり、休憩を取るたびに、手塚は外の見張りを買って出ていた。

葉月「こんな僕が言うのもなんだが、君も少しは休んだほうがいいんじゃないのかね？」

葉月の言うことももっともだ。

だが、心から相手を信用しきれない手塚にとっては、連中と一緒にいることの方が心が休まらないのであった。

手塚「気遣いは無用だぜ、オッサン。・・・それよりも、しっかりと身体を休めとくんだな」

手塚は足早に、その場を立ち去った。

そして、いつもの様に、廊下に背をもたれ、スミスから貰い受けた煙草を取り出し、一服する。

本来ならば、不審な行動ばかりが目立つ渚が居るこの集団から、今すぐ逃げ出すのが良策なのかもしれない。

すぐ側に渚が居る場合は別として、今は壁一枚を隔てている。不測の事態さえ無ければ逃げることも可能だ。

手塚「だが、それじゃあヤツが何者かがわからんしなあ」

なんとか、ヤツの尻尾を掴ませることが出来ないか。このまま泳がされっぱなしってのもシヤクにさわるしな。

彼は自身のPDAを取り出し、状況を整理しつつ、今後のことを考え始める。

脅威を取り除くに越したことはない。脅威に目を背けることは、かえって自身に迫る危機を見逃すことにもなりかねないからだ。

それは自身の首輪を外し、下の階に逃げた後でも例外ではない。



手塚「まあ、ヤツの正体は、ヤツ自身に聞くのか一番手っ取り早いことか」

それならばと、と思案していた矢先。

ガチャッ！

部屋のドアがゆっくりと開いた。

そしてそこから人が姿を現す。

渚「手塚く〜ん」

・・・まさか、ヤツの方から姿を現すとはな。

手塚は内心、チャンスだと思った。

手塚「何だ？ 手当てはもう済んだのか？」

フレンドリーな感じで返事を返した手塚に対し、渚の表情はどこか硬い。

その渚は後ろ手にドアを閉め、ゆっくりと手塚の方へと歩んでいく。

渚「もう芝居はやめにしましょう」

その口調は、かつての渚のものではなかった。

冷たく、感情の籠っていない、だが、静かな鋭さを秘めている口調

だった。

手塚「ほあ、只者じゃないって認めるわけだな」

手塚は笑っていた。だがその目は鋭く渚を見続けていた。

渚「ええ、そうよ。あなた、どうやら私の正体が知りたいらしいわね」

渚は、油断ならない目つきで、手塚の放つ鋭い目線に、真っ向から挑んできた。

手塚「盗み聞きしてたってか？　たく、油断ならねえアマだな」

渚「聞かれたくない事なら、口にするのは間違いだった。そうよね、手塚君」

渚のその手には、今もアサルトライフルが握られている。

手塚「言ってくれる。で？　わざわざ自身の正体ってのを、ご高説ってか？」

手塚は冗談めかして言っているものの、一触即発の空気では張り詰めていた。

渚「その必要はないわ」

そう言って渚は握っていたライフル銃を前に構え、手塚の方へと向ける。

手塚「くくくつ！まさかそっちから挑んできやがるなあ、こりゃ予想外だったぜ」

手塚は爽快に笑い飛ばしてみせた。銃を向けられているのに、むしろ余裕の表情だった。

渚「無駄よ、今の状況を考えればすぐわかるわ」

手塚「テメエに向けて銃を向けたその瞬間に、俺を撃つてか？」

手塚は銃こそ手元にあるものの、構えて狙いを定めているわけではなかった。

そう考えると、まるで自然な動作で手塚に狙いを定めた渚の方が、歴戦を潜り抜けたという感がありありと浮かぶ。

渚「そうよ。今のあなたは逃げられやしない」

恐らく本当だろう。これがハツタリでないことは手塚もよく理解していた。

手塚「だがよお、なんでわざわざ一人で来た訳だ？俺を殺すつもりなら、多人数でかかった方が確実じゃねえか？」

渚「・・・あの人達には、人殺しはさせられないわ」

渚はその時だけ、沈んだような表情を浮かべた。

手塚「くつくつくつ、はははははっ！！」

今度の笑いは、豪快ともいえるものだった。

手塚「テメエ、さては今まで相当人殺しをしてきやがったな？その人殺しが一人前に偽善者ぶるってか！？」

手塚は、さも面白おかしく笑い転げる。

渚「あなたの言う通りよ。・・・私は人殺し、それは言いようのない事実」

一方の渚は、まるで動じていなかった。

渚「けれど、そんな私でも、今出来ることがあるって分かったの。総一君をこのゲームに勝たせる為には」

その後の言葉は最後まで続かなかった。代わりに、別の言葉が告げられる。

渚「だからあなたを殺すの。あなたが、総一くん達を殺す前に」

その表情に迷いは微塵も感じられなかった。

手塚「やっぱり気付いていやがったか。だが、いいコトを聞いちゃったぜ」

手塚の表情から笑みが消え始め、代わりに冷酷な本性をかもしだす。

手塚「いささか無分別な行動だったようだな、ああ？」

手塚は吸っていた煙草を投げ捨て、身構えた。

渚「無駄って言ったはずよ？殺されなくなったら、今すぐここを離れることね」

渚のその表情には、普段の様子からは想像もつかない威圧感が、ありありと浮かんでいた。

かつて大切だった人を筆頭に、沢山の人の命と、心の内の『何か』を犠牲にして、得た殺しの器量……。

皮肉にも、それが総一達を守ることに使われようとしていた。

手塚「どうだかな？確かに、銃を構える隙を逃すアンタじゃねえわな」

手塚は身構えているものの、そこから動こうとはしなかった。

手塚「だがなあ、俺の手には今『コレ』があるんだぜ」

渚「……………」

手塚は銃を構えるではなく、ずっと手元に持っていたPDAを、渚の死角になる形で、片手で素早く操作した。

手塚「やっぱりアンタは冷酷になりきれていねえ。ごたくを並べずにさっさと俺を殺しておけばよかったものをよお」

そして、手塚はPDAをさっと口元に持っていく。

しかる後に、大きく息を吸う。

手塚「御剣！！渚に殺されそうになってる！助けてくれ！部屋の外にいる、今も銃で狙われている！！」

手塚はPDAに向けてまくし立てる。

渚「えっ！？」

手塚のあまりにも意外な行動に、一瞬啞然とする。

その後すぐに、部屋のドアが勢いよく開かれる。

総一「て、手塚さん！？」

そこには、総一の姿があった。

渚「そ、総一くん！？」

そこに至った時点で、渚は手塚の意図に気付いた。

そう、彼が使ったのは、PDAの通信機能。

今まで行われたゲームの中でも、この通信機能を使って相手を出し抜こうとした例はいくつかある。

だが、銃を突きつけられているという切羽詰った状況で、大胆にも通信機能を使うということは、さすがに渚も想定していなかった。

いや、それとも手塚が言うとおり、彼らの『絆』に触れ合ったこと

で、冷酷さを失ってしまったのかもしれない。

渚は動揺していた。

手塚に1本とられたことに対してではない。

他ならぬ総一に、自身が人殺しをしようとした瞬間を見られた、その事に関してだった。

手塚は、渚の隙を瞬時に見抜き、さらに煽った。

手塚「気をつけろ！御剣！コイツ、俺たちを皆殺しにする気だ！」

総一「な・・・」

総一は、突然の状況に、完全に戸惑っていた。

総一「そ、そんな、ほ、本気ですか！？渚さん！？」

渚は今も、銃口を手塚に突きつけたままだ。

その事に気が付いた渚は、慌てて銃の構えを解く。

渚「ち、違うのよ！？私は・・・！」

その後の台詞が続かない。渚が手塚を殺そうとしていたのは、紛れもない事実だったからだ。

その慌てぶりは、総一を前にして、純真無垢な少女に戻ってしまっただかのようだ。

手塚はその隙を突き、腰に下げていた片手用の小型拳銃を、密かに渚に向ける。

わざわざ小型の拳銃を使った理由は2つある。

小型の銃の方が、構えて撃つまでのタイムロスが少なくて済むから。

もう一つは、渚に向けたその銃は、ちょうど総一から見て死角だったことだ。

渚「!？」

銃を向けられた渚は、反射的に手元にあった銃を構えてしまう。

その頭によぎったのは、渚自身の命の危機ではない。

自身が倒れた後の、他ならぬ総一の身の危機だった。

総一「渚さんっ!？」

総一の叫びに、渚はビクンと反応する。

ガーン!!

だから、銃から弾が吐き出されたのは、渚の銃ではなく、手塚の銃だった。

渚「きゃ!あ、うつ!」「いぶっ・・・!」



銃を持つ手から力が抜け、下に落ちる。

手塚が放った一発は、無情にも渚の心臓を貫いていた。

そして、ゆつくりとその身体が力なく倒れていく。

やったぜ！このまま御剣のヤツも始末して・・・。

ガチャン！

手塚「ん？」

渚の身体が床に投げ出された瞬間、聞きなれない音が通路上に響いた。

それを疑問に思った手塚だったが、それはすぐに打ち切られた。

総一「なっ！手塚さん！なぜ撃つたりしたんですか！？」

総一は、あまりの展開にしばらく呆然としていたが、手塚が渚を撃ったことを大声で責め立てた。

それを打ち消すかのように、手塚は声を荒らげる。

手塚「馬鹿か、お前は！このまま俺が撃たれたら、次は御剣、お前の番だったんだぞ。そうなりや、部屋の中に居る嬢ちゃん達は誰が守る？」

総一「そ、それは・・・」

手塚の剣幕に、総一は返す言葉に詰まる。

総一とて、手塚を非難したいわけではない。ただ、人の命が失われた。その事実には憤慨していたのだ。

手塚「仲間を守りたければ、時には覚悟を決めなくちゃならねえ。それに、だ」

そう言つて、総一から目を離れた手塚は、もはや動かなくなつた渚に近づき、身体のおちこちを調べ始めた。

総一「で、手塚さん、一体何を・・・」

手塚「ホラ、コイツを見てみる」

手塚は渚のスカートの部分を軽くめくりあげた。すると、そこには腰から太ももにかけて、いくつもの機材の様なものがぶら下がっていた。

そこからケーブルがいくつも接続されている。

手塚「コイツは、監視カメラか？こつちは、無線機か何かか？」

総一「こ、これは一体・・・？」

総一も続いて渚に近づき、そこに備え付けられている機材に目を剥く。

手塚「事情はよく分かんが、恐らく俺たちを監視する為のものだ

ろくな」

手塚は総一の方を振り向いてそう言った。

総一「ま、まさか、それじゃあ」

導き出された答えは一つ。

手塚「コイツは、間違いなく誘拐犯の一味、という事になるな」

手塚の発言に、総一はただただ呆然とするばかりだった。

手塚「ただ、腑に落ちねえこともある」

総一「え・・・？」

思考が半ば止まっている総一に対し、手塚は冷静に今の状況を整理している。

手塚「なんでコイツが、わざわざ俺たち同様に首輪をしているのか。いや、違うな。なぜ首輪の解除条件を満たそうとしていたのか」

総一「そ、それは一体どういう・・・？」

状況が飲み込めない総一に、手塚はある一点を指す。

そこには、渚の身体に隠れる形で、一つのPDAが床に落ちていた。

総一「こ、これは！」

それを見た総一は、驚きに顔をこわばらせる。

手塚「俺を殺そうとした理由は、恐らくはコレだ」

そのPDAは『3』の数字が描かれていた。

総一「そ、そんな！だって、渚さんは『J』のPDAを持っていて・  
・・！」

総一の疑問はもつともだ。

その疑問に手塚が答える。

手塚「あくまで推論だが、この『J』の本来の持ち主は、陸島、と言ったな。ヤツのPDAだったんじゃないか？」

総一「え！？」

総一は意外な答えに、驚きを隠せなかった。

手塚「で、陸島をこの渚が殺した。その後、何食わぬ顔をしてお前達の仲間のフリをしていた、ってのはどうだ？」

手塚「そうすりゃ、最初の頃に陸島がお前らと行動を共にしていた理由も、このアマが俺たちを殺そうとした理由も説明がつく」

総一「……………」

そこで、手塚は一旦話を打ち切り、『3』のPDAと渚のポケット

に入っていた『J』のPDAを取り出し、自身のポケットにしまいこんだ。

手塚「つまるところ、信じるだの情だのなんてのは、自身を盲目にさせるだけの、ただの戯言にしか過ぎねえってコトさ」

いまだ呆然とする総一をよそに、手塚はそう締めくくった。

くくくつ。そう、まさにそう言うわけよ。

手塚は内心総一のコトをあざ笑っていた。JOKERを『3』に偽装して作り話をする。とっさの思いつきとはいえ、これほどまでにうまくいくとは思わなかった。

ここまでくると、お人好し転じて、ただのおめでたいヤツだと、手塚はそう思ったからだ。

さてと、これからどうするか。

手塚は心の内で、次の行動を考えていた。

当初は、人の位置を感知するソフトを探す為にヤツラを泳がせていたわけだが。

邪魔者がいなくなり、怪我人が居る以上、さっさと始末して一人で探す方がかえって手間が省ける。

それじゃ、目の前に居る御剣に、更なる絶望を味あわせてやるとしますかねえ。

手塚は、壁に立てかけていた銃を手に持ち、総一の方に振り返った。

だが、手塚のその目論見は、達成せぬまま終わってしまうのだった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

### 第13話「渚の決意」（後書き）

いよいよ総一達を裏切ろうとする手塚とは裏腹に、最終局面が間近に迫っていることに、彼はまだ気付いていなかった。

次回は第14話「向けられた牙」壮絶な攻防戦が起ころうとしています。一体誰と誰が対峙し、そして命を落としてしまうのか・・・？  
乞うご期待

# 第14話「向けられた牙」

第14話「向けられた牙」

作・桐島成実

【残りの生存者数・・・8 / 13人】

現在の状態

PDA

状態

手塚

との関係

「グループA」

手塚 義光

(10)

健康

御剣 総一  
普通

(A)

健康

「グループB」

姫萩 咲実

(Q)

足を負傷

普

通

葉月 克己

(4)

腕を負傷

普

通

「グループC」

高山 浩太

(?)

健康

険悪

長沢 勇治

(?)

健康

敵対



矢幡 麗佳 ( ? ) ? ?

郷田 真弓 ( 5 ) ? ?

綺堂 渚 ( J ) 死亡

敵対 色条 優希 ( ? ) 死亡

漆山 権造 ( 7 ) 死亡

敵対 陸島 文香 ( ? ) 死亡

知らない 北条 かりん ( ? ) 死亡

手塚「さてと、そろそろ始末をつけるとするか」

手塚はそう言い、手に持った銃を、いまだ呆然と渚を見つめる総一の背後から狙いを定めようとした。

だが、それは突如起こった。

ガラガラガラ・・・

手塚「！なんだっ！？」

総一のさらに向こう側の通路から、突如防火シャッターが降りてきた。

呆然としていた総一も、その轟音を耳にして、ようやく我にかえった。

ガシャン！！

そして勢いよくそれが床に到達する。

手塚「ちっ、また誰かが何か仕掛けやがったな」

手塚は総一から目を離し、反対側の通路へと目に向けた。

そこには、遠方から対峙している、2人の人影が見えた。

手塚「あれは、大将か！？もう一人は・・・長沢だっ！？」

ちっ、大将のヤロウ、思い切ったことをしやる。

総一「あ、そっだ！咲実さん達は！？」

総一も、何者かが迫っていることを瞬時に把握し、慌ててドアの方

へと駆け寄る。

ガチャガチャ！

ドアノブをまわそうとした総一は、そこでドアに鍵が掛かっていることに気付く。

手塚「どうした、御剣！？」

手塚は銃を前方に構え、戦闘態勢を取る。

総一「ドアが開かないんです！鍵がかかって！」

それを言いきったところで、更なる変化が訪れた。

シュウウウウウ・・・

それは高山が撒いた煙幕弾だった。それはちょうど高山達と手塚達の真ん中ぐらいで静止し、勢いよくあたりに煙を撒き散らした。

そして、あっという間に高山達、そしてすぐ近くに居るはずの、総一の姿までもを覆い隠してしまった。

手塚「おい、御剣！聞け！お前のPDAにドアコントローラーって機能があつたら！あれを使い！」

手塚は大きな声で聞こえる様にそう言った。

恐らく大将達も、同じ機能を使って防火シャッターと、ドアにロックをかけたのだろう。

そのせいで、完全に通路の一角に閉じ込められ、出入り出来るのは高山達が居る方の通路だけだった。

だが、そこをそのまま突破するのはあまりにも無謀だ。

そうすると最善なのは。

手塚「防火シャッターの方を開ける！」

すると、煙で見えないが、総一の叫び声が返ってくる。

総一「でも、咲実さん達が！」

手塚「バカ言え！ここで俺たちが部屋に入ったらヤツラの思いつばだ！嬢ちゃん達には俺の通信機能を使って知らせるから、早く開ける！」

手塚には見えないが、総一は自身のPDAを操作し始める。

だが、目先にあるはずのPDAさえ見ることは困難だった。

総一「そうだ！床に近ければ煙は薄いかも」

総一は前かがみになりながら、なんとかPDAを操作する。

だが

ズドオオン！！

遠くから、銃声が聞こえてきた。

ザシュッ!!

総一「ぐわあっ!!」

その銃弾は、PDAを操作しようとした総一のわき腹を貫いた。

総一の悲鳴を聞いた手塚は、総一が高山達にやられたことを認識した。

手塚「ヤロウ、一体どんな手を使いやがった!」

高山達からしてみても、煙で視界を塞がれて狙い打つことが出来な  
いはずだった。

だが、自ら視界を塞いだのだから、何かがあると思っていたが。

いずれにしても、このままじゃやられるのがオチだ。

そう思い、なんとか手探りで総一からPDAを奪い、自身で操作し  
ようとするものの、その手は空を切る。

.....

長沢「よしっ!当たった!」

長沢は、大型のライフルに備え付けられた特殊なスコープ越しに、  
狙いをつけた人物が倒れるのを目撃していた。

高山「その調子だ、続ける」

高山は再び煙幕弾を取り出し、それを前方に放り投げる。

長沢が覗いているスコープは、前に麗佳が使っていた通常のタイプのものではない。

それは人間に体温などを感知する、サーモグラフィ式のスコープだった。

本来なら夜間など、人間の目で見る事が出来ない場合に使用するもので、それはこの一面煙だらけの場合でも同様だった。

長沢はライフルに次弾を送り込み、もう一人の健在な方に狙いを変え、再び狙う。

ズドオオン！！

しかるのちに、ライフルから2発目が発射される。

ヒュン

ガキーン！

空を切る音とともに、遠くから壁に着弾した音が響く。

長沢「外したか。まあいいや、どうせ袋の鼠なんだし」

長沢は構わず再び装填を開始する。

高山も次の煙幕弾を取り出し、ピンに指をかける。

弾の装填が完了した長沢は、再びスコープに目をあてて的を狙おうとするが、的がせわしなく動いているらしく、なかなか狙いが定まらない。

長沢「動くなつての！　ったく、もう1人殺せばゲームクリアだつてのに」

長沢はそう愚痴をこぼす。すると、それに紛れて何かが転がるような音が通路に響いた。

カン、カン、カラララ……

高山「！？」

それは、高山が投げた煙幕弾の音ではない。何かがこちら側に向けて投げられたのだ。それも後ろから。

空気が跳ねるような、独特の軽い金属音。これは……！

それにいち早く気付いたのは高山だった。

高山「長沢っ！　手榴弾だ！　避けろっつ！　！」

高山は身を翻し、煙が充満する中、記憶を頼りに通路の曲がり角へと避難する。

長沢「えっ……？」

だが、狙いをつけることに集中していた長沢は、突然の事に状況が飲み込めなかった為、とっさに行動に移せなかった。

その遅れが、命取りとなった。

ズウウウウン！！

手榴弾は、ちょうど長沢の前で爆発した。

長沢「うわあああああつ！！」

長沢は、何が起こったのか分からないまま絶命した。

通路に逃げ込んだ高山は、薄れていく煙の中、手榴弾を投げた人物の姿を垣間見た。

高山「なるほど、お前だったのか、お嬢ちゃん」

高山の目に映ったのは、ツインテールの金髪の髪。

麗佳「・・・自分達が狙われるということ、もっと考慮しておいた方が良かったわね？」

麗佳は冷たくそう言い放つ。

実はこの2人、以前にも戦った経緯があった。

その時は引き分けに終わっていたのだが、こうして再び合間見えることになったのだった。



高山「手塚達だけでなく、もつと周りを警戒しておくべきだったか？だが、しかし首輪の検索ではそれらしい反応が無かったはず・・・」

いや、首輪やJOKERの検索用ソフトがあるならば、それを妨害するソフトがあっても不思議はない。

高山「厄介なことになったな」

高山は壁際に身を潜め、持っていた銃を構えた。

対する麗佳も、それに応える。

そして、

ガーン！！ガーン！！

壮絶な戦いは、今もなお続くのであった。

・  
・  
・  
・  
・

ガラガラガラ・・・

銃でわき腹を撃たれた総一は、最後の力を振り絞ってPDAを操作し、なんとか防火シャッターを開けることに成功した。

手塚は素早く防火シャッターを潜り抜ける。そして、後ろに居るで

あろう総一の方に振り返った。

手塚「オイ！防火シャッターを閉めるぞ！ボヤボヤしてっと、またヤツラに狙われるぞ！」

手塚の耳には手榴弾が爆発した音は聞こえていた。

それが何を意味するのか、手塚の居る位置からは判別することができなかった。

手塚「オイ！御剣！」

総一「……………」

だが、力尽きたのか、総一の返答はなかった。

手塚「ちっ、くたばりやがったか……」

瞬時にそう判断した手塚は、急いできびすを返す。

本当なら渚と総一、2つの首輪を作動させれば首輪が外れるのだが、今回ばかりはそんな悠長なことは言っていない。

高山の恐ろしさを一番感じ取っているのは、他ならぬ手塚だったからだ。

手塚「じゃあな」

手塚はそう吐き捨てると、通路の奥へと姿を消したのだった。

残された総一は、もうすでに事切れる寸前だった。

臓器を貫いた総一の身体からは、相当な量を出血していた。

意識が途切れるその時に頭に浮かんでいたのは、死に別れた恋人の姿。

総一「これで・・・やっと・・・あえ・・・る・・・ゆ・・・う・・・き・・・」

そこで言葉は途切れた。総一は恋人に再び会えることに、少なからず喜びを感じていた。

息のつまるような日常を過ごす必要は、もうないのだから。

総一は安堵の表情を浮かべながら、息を引き取ったのであった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

高山達から奇襲を受けた場所から、ある程度離れた所で、手塚は背後を振り返った。

手塚「どうやら、追っ手はなし、か」

防火シャッターが開いた際に、高山達が居る場所あたりから、爆発音が聞こえたのを、手塚も耳にしていた。

あの時、第3者の介入があった、と見て間違いはないだろう。

それを裏付けられるかのように、手塚の持つPDAからアラームが聞こえてきた。

手塚はPDAをポケットから取り出し、画面に触れる。

手塚「生存者数が残り6人、2人死んだか」

PDAの画面には、さっきまで8人と書かれていた生存者数が、6人へと変わっていた。

恐らくその2人の内1人は御剣だと、手塚はそう考えていた。

煙で確認できなかったものの、高山達の銃撃を受け、何らかの怪我を負ったのは間違いない。

そして、手塚が逃げる際に、他に足音がなかったことから、御剣は今もあの場に留まっているのだろう。

意味もなく、あの場に留まる必要などはない。と、すれば……。

手塚「いや、もしかすると、防火シャッターを開けた後に、部屋の方のロックを解除して、オッサン達の方に逃げ込んだって可能性もないとは言えねえか」

手塚は、それを確認する為、さっそくPDAを操作して、再び通信機能を使用した。

そして、それを携帯電話のように耳元にあてる。

手塚「オイ！聞こえるか！？聞こえてるんなら返答しろ！」

しばらく後、PDA越しに返答があった。

咲実『あ、手塚さん、ですか？あの、一体何が・・・？』

相手の主は咲実のようだ。通信機能のソフトは手塚と咲実のPDAにそれぞれインストールしたのだから当然なのだが。

手塚「おう、お前ら、そっちに御剣のヤツが来てないか？」

咲実『御剣さん？いえ……。あの、部屋の外から銃撃が聞こえたので、慌てて部屋を出ようとしたんですけど、ドアが開かなくて・  
・』

手塚「ああ、そりゃそうだろうな」

咲実『あの・・・、御剣さんは、その・・・、御剣さんと渚さんは無事なんですか？』

不安そうな声で咲実は尋ねてくる。銃声を聞いたというのだから、御剣の悲鳴も聞こえているはずだ。

だからだろう。心なしか声も震えている。

手塚「あの女は死んだ。・・・恐らく御剣のヤツもな。そう考えて間違いねえだろうな」

手塚はそう言い放つ。

ガチャン！

PDA越しに、PDAを落としたような音が聞こえた。

相当なショックを受けただろうことは、容易に想像できる。

やがて、PDAから今度は葉月の声が聞こえてきた。

葉月『もしもし、僕だ！手塚くんか！？一体何が、何があったというんだ！？』

咲実のただ事でない様子を見たのだろう。葉月も良からぬ予感が頭をよぎったのだろう。

手塚「ゆつくり状況を話している場合じゃねえ。お前ら、今も部屋の中に居やがるのか？」

葉月『あ、ああ。部屋を出ようとしたんだが、なぜか鍵が掛かっていてね。仕方なく反対側のドアから外に出たんだ』

手塚「それで？」

葉月『僕だけでも手塚くんの所へ向かうべきだと思って、外に出たのはいいが、煙が辺り一面に充満していて、とても手塚くんの所に進める状態じゃなかったんだ。仕方なく戻ってきた所に君から通信が、というところだ』

葉月の問いに、手塚は考え込む。

もし、俺たち全員を狙っているのなら、葉月達が逃げられないように、部屋の2つのドア両方をロックするはずだ。と、すると大将の狙いはあくまで俺、ということか。恐らく長沢のガキも。

大将はJOKERを求めている。そして俺が首輪を外して下の階に避難すると、大将は首輪を外せずオダブツになる。

だからこそ、是が非でも俺を始末する、といったところか。

なるほど、こりゃ急ぐ必要があるな。

人を感じするソフトの搜索は、下の階に降りてからじつくりと探せばいい。

そうと決まれば、さっそく・・・。

手塚「とりあえずお前ら、その部屋から早く脱出しろ！俺もすぐに合流する」

葉月『わ、わかった』

葉月の通信が切れた事を確認すると、その顔には笑みがこぼれるのであった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

#### 第14話「向けられた牙」(後書き)

咲実達の心の支えであった総一の死。残された彼女の運命は!?!?そして高山、麗佳、そして手塚は、今後どうなっていくのでしょうか?

次回は第15話「血塗られた殺戮」もう、誰にも止められない。すべての決着がつくまでは……。



## 第15話「血塗られた殺戮」

第15話「血塗られた殺戮」

作・桐島成実

【残りの生存者数・・・6 / 13人】

現在の状態

P D A

状態

手塚

との関係

手塚 義光

(10)

健康

「グループA」

姫萩 咲実

(Q)

足を負傷

普

通

葉月 克己

(4)

腕を負傷

普

通

高山 浩太

(2)

健康

敵対

矢幡 麗佳

(?)

健康

敵対

郷田 真弓

(5)

??

敵対

[illegible]

いまだ煙が充満する中で、通路の角を間に挟む形で、高山と麗佳は対峙していた。

高山「まさか、あらかじめ逃げ道を塞いでいるとは、ずいぶんと手際がいいな」

高山が逃げ込んだ通路には、高山達がPDAを使って下ろした防火シャッターとは別のシャッターが降りており、高山の退路を完全に断っていた。

恐らく麗佳も、ドアコントローラーのソフトを持っているのだろう。

麗佳とは以前引き分けたとはいえ、やはり素人だと甘くみたことを高山は後悔していた。

麗佳「あなたが、その通路に逃げ込むことぐらい、見抜いていたわ」

麗佳は、隙を狙って単に高山達に奇襲をかけただけではない。

高山達が居る位置関係を計算して、シャッターをあらかじめ下ろしていたのだ。

しかも、狙いを定める必要のない手榴弾を使用したことも同様だ。

高山「戦略の組み立てに関しては、目を見張るものがあるな」

これらをとっさに行ったことに、高山は素直に感服していた。

高山「このシャッターを開けることは無理か・・・」

ドアコンントローラーのソフトを持っていたのは、高山ではなく長沢の方だった。

そして、その長沢は麗佳の手によって葬り去られてしまった。

高山「そういえば、まだ名前を聞いていなかったな」

高山と麗佳は、以前に戦ったことはあるものの、会話するのはこれが初めてだった。

高山「俺は高山、お前は？」

通路の角の向こう側に居る麗佳に向かって、そう名乗る。

麗佳「・・・麗佳、矢幡麗佳」

しばらく考慮した後、麗佳もそれに答える。

高山「では矢幡、一つ提案があるのだが」

麗佳「・・・」

高山「俺と手を組む気はないか？俺は手塚という男を始末するつもりだ。それ以外には興味がない」

通路の角に隠れていても、麗佳の表情がこわばっていくのが読める。

麗佳「そんな誘いに乗ると思って？私は誰も信じない。こんな状況で、誰も信じられるものですか！」

高山の誘いに、麗佳は突っぱねる。

高山「敵は少ないに越したことはないと思うんだがな。そうだろうか？」

麗佳「命乞いのつもり？残念ね。私は勝ってみせる。たとえ誰を犠牲にしようとも！」

麗佳の意志は堅い。それを裏付けるかのように、矢継ぎ早に麗佳の銃声が飛ぶ。

ガーン！ガーン！！

高山「・・・そうか、残念だ！」

高山は麗佳の狙い打つ箇所を見切り、素早く身をかわす。

麗佳の撃った2発の弾は、高山には当たらずそのままシャッターに食い込む。

高山は身をかわしつつ、まだ手元にあつた煙幕弾を、通路の角に向けて放り投げる。

それは、更なる追い討ちをかけようと狙いを定める麗佳の前に落ち、瞬く間に煙を吐き出し、あたりを覆いつくす。

麗佳「くっ、小賢しい真似をつ！」

麗佳は、煙に視界を奪われた隙を狙われる事を嫌い、通路の角から少し身を引いて距離を取る。

麗佳「どうせ、逃げられはしないんだから・・・」

私を倒さない限り、この袋小路からは逃げられない。

持っている手榴弾は、さっき使った1発のみ。

なら下手に攻めるよりも、持久戦に持ち込めばいずれあの男の煙幕弾も底をつく。

撃つのはそれからでも遅くはない！

ウイイイン

その時、モーターが回るような音が背後から聞こえてきた。

麗佳「！」

麗佳は顔だけ背後を振り向く。

だが煙の影響でよく見えない。これは

ガガガガッ！！

麗佳「なっ　！？」

煙に隠れているそれは、突如銃撃を放ち、麗佳の身体を横一線に貫く。

その正体に気付いたのは、その時だった。

麗佳「こ、こんなものでっ……！」

煙が薄まっていく中、姿を見せたのは、銃を装備した自走ロボットだった。

これは、高山があらかじめ用意していたもの。

長沢と共に襲撃する前にこしらえたもので、長沢の狙撃だけでは攻めが不十分だと感じて用意していた保険だった。

麗佳「ご、ごふっ……」

弾丸を3発貫いた身体から、勢いよく血が拭き出す。

瞬く間に白いワンピースを赤く染めていった。

高山「周りは常に警戒せよ。俺が言えた台詞ではないが、その通りになったな」

何時の間にそこに来たのか。麗佳の身体に銃を突きつける高山の姿があった。

高山「悪く思っな」

高山は、それを最後に銃の引き金を引く。

麗佳「くうっ、こんな……ところ、で……」

ガーン！！

無情にも、その銃から弾が放たれたのであった。

・

・

・

手塚「ここらへんで間違いはないはずだが」

手塚は周りを警戒しつつ、PDAを地図を確認する。

彼が向かっているのは、葉月達と合流する為に指定した区画だった。

通路を慎重に進むつつ、部屋を一つ一つ調べていく。

そして、通路の曲がり角の所に来たところで、呼び止める声が聞こえた。

葉月「！手塚くん、無事か！？」

手塚は、その声が聞こえた方を振り向く。



手塚「おう、なんとかな」

手塚の顔から笑みがこぼれる。

葉月「君だけでも無事でよかった。・・・ともかく、何があったのか聞かせてもらえるかな？」

葉月も周りを警戒していたのだろう。両手に持っていたサブマシンガンを下ろし、手塚に近づく。

手塚「ん？そう言や、嬢ちゃんの姿が見えないようだが？」

今この場に居るのは、手塚と葉月の2人だけだ。

すると、葉月の表情が悲しげな表情に変わる。

葉月「・・・総一くんが亡くなったと聞いた時から、ずっと塞ぎこんでいてね。なんとかここまで引つ張ってきて、その部屋に連れてきたんだが」

手塚「なるほどねえ。気持ちは分かんでもないが、こんな状況で塞ぎこんでいる場合じゃねえとは思うんだがな」

手塚はやれやれといった表情を浮かべる。

これは偽りではなく本心だった。手塚も人の気持ちが分からないわけではない。ただ、それを踏まえた上で、非情な振る舞いをしていくのだが。

葉月「そうかもしれないね。・・・恐らく彼女にとって、総一くん

は無くてはならない人だったんだろうね」

手塚「ふうん、そんなもんかね」

葉月「ともかく、君が無事な姿を見れば、少しは励みになるかもしれない」

葉月はそう言って、咲実が居るであろう部屋へと足を向ける。

手塚「いや、そうはならないだろうぜ」

手塚はキツパリとそう言いきる。

そして、ごく自然な動作で拳銃を引き抜き、葉月へと向ける。

手塚「励みになる前に、死ぬことになるからさ」

ガーン！！

葉月「な！！？」

葉月は突然の出来事に、何が起こったのか理解できなかった。

手塚が自身を撃った。それを知ったのは、手塚が構えている銃が視界に飛び込んだ時だった。

葉月「て、手塚くん。なっ、なんてことをっ・・・！」

撃たれた事に気がついた時既に、葉月はまるで無抵抗なまま、その場に倒れこむ。

手塚「嬢ちゃんは部屋の前だったな」

手塚は葉月の身体を乗り越え、その部屋のドアノブの手をかける。

葉月「ぐ、ま・・・まで・・・！」

葉月はなんとか食い止めようと、手に持っていたサブマシンガンを構えようとする。

手塚「無理するもんじゃねえよ。銃弾は心臓のすぐ近くを貫いたんだ。ジツとしてりゃあ、いずれお迎えがくる」

手塚はあざ笑いつつ、銃を持つ葉月の手を足で思い切り踏む。

すると、その手から銃が零れ落ちる。

葉月「ぐおっ！？・・・」

呻く葉月を無視して、部屋のドアを開ける。

部屋の中は、木箱やダンボールやらが大量に置かれた雑多な部屋だった。

その奥の壁際に、ひっそりと座り込んでいる咲実の姿があった。

咲実「・・・・・・・・」

咲実を手塚が入ってきたことに、まるで反応しなかった。

手塚「やれやれ、ここまで人は変わるもんかねえ？」

その姿にはまるで生気が感じられず、一刻前に見た彼女の姿とはまるで別人だった。

手塚はゆっくりと近づいていく。

手塚「まったく、しっかりしろよ。嬢ちゃん」

まるで無反応の咲実に対して、そつと肩に手を添える。

ガッ!!

咲実「・・・！」

肩に添えたはずのその手は、口を塞ぐ形で顔を得さえつけていた。

わずかに反応を見せた咲実だったが、壁と手塚の手に阻まれ、身動きが出来ない。

手塚「じゃあな」

それが別れの挨拶だった。

左手で咲実の動きを封じ、右手にはナイフを持っていた。

手塚「ナイフの方が、より確実にあの世にいけるぜ」

そして、まるで躊躇もせず、ナイフを軽く振りかぶった後、そのまま振り下ろす。

ザシュッ！！

ナイフの刃先は、咲実の首輪の上の喉の部分を、真横に突き刺した。その勢いのまま抵抗もなく、ナイフが刺さったまま、身体は真横に倒れていく。

死んでゆくその表情には苦しさは浮かんでいなかった。恐らく何が起こったのかを理解せぬまま、事切れてしまったのだろう。

その様子を確認した手塚は、ふっと口元を緩める。

手塚「おい、御剣よお」

それはもはや死んでいるであろう、総一の名を呼んだ。

手塚「てめえが必死で守った『クイーン』は、ちゃんとお前の元へ送り届けてやったぜ。クックック」

もはや絶命しているであろう咲実の死体を前にして、手塚は喉の奥から笑っていた。

当初の自分の狙いが、今ここで達成したことを愉快に感じていたのだ。

手塚「さてと、首輪は無事だな。じゃあ、さっそく」

咲実の身体を動かし、首輪の端子部分が見えるようにする。

そして、自身のPDAをそこに差し込む。

【あなたは解除条件を満たすことが出来ませんでした。15秒後にパネルティが開始されます】

手塚「これで4人、あとは葉月のオッサンで終わり、か」

そして未練もなく、その部屋を後にする。

部屋を出たところに、葉月は先ほどと変わりなく、床にうつぶせの状態で倒れていた。

葉月「う・・・く・・・」

どうやら、まだ息はあるらしく、かすかに呻いているのが耳に入ってくる。

手塚「なんだ、まだ生きてたのか。もっと楽に殺してやればよかったなあ？」

手塚は葉月の背中を足で踏みつけ、銃を心臓のある部分に密着させる。

手塚「今すぐ楽にしてやるぜ。感謝しろよ」

そのまま引き金を引こうとしたが、その手がふと止まる。

そしてなぜか銃口を葉月から外す。

手塚「やれやれ、そう簡単には逃がしてくれねえか」

さっさとケリをつけて、ゲームを抜けるつもりだったんだがな。

手塚はやりきれないという感じを、銃を持ったまま両手を挙げて表現した。

手塚「そこに居るんだろ、大将？」

通路の角に隠れているであろう、その人物に向けてそう言った。

高山「やはり貴様は、危険極まりないヤツだったようだな」

通路の角から姿を現したのは、麗佳との決着を終えた、高山の姿だった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

## 第15話「血塗られた殺戮」(後書き)

激戦を生き抜いた2人。いよいよ最後の決着をつける時が訪れたのでありました。

次回は第16話「頂上決戦」相對する2人。果たして生き残るのはどちらなのか・・・?乞うご期待



第16話「頂上決戦」

第16話「頂上決戦」

作・桐島成実

【残りの生存者数：・4 / 13人】

現在の状態

PDA

状態

手塚

との関係

手塚 義光

(10)

健康

葉月 克己

(4)

瀕死

敵対

高山 浩太

(2)

健康

敵対

郷田 真弓

(5)

??

敵対

手塚「やっぱりこうなっちまうか……。最初に会った時からアンタは油断ならねえとずっと思ってたんだよなあ」

手塚は、今しがた姿を見せた高山に対し、彼なりの賞賛の言葉を浴びせる。

高山「それはお互い様だ。致し方ない」

高山は通路の角から身を少し出し、銃を構える。

それに合わせて手塚も銃を構える。

高山「貴様を殺して、糧としよう」

そう言い切った高山は、かつて戦場で見せていた威圧感溢れる顔つきに変わった。

手塚「やれるもんなら、やってみな」

一方の手塚も、いつもの余裕を崩さず、それでも油断のない鋭い視線を浴びせる。

一刻の沈黙のち、それは始まった。

ズドォーン!!

ガガガガッ!!

2人が放つ銃声は、ほぼ同時に通路に木霊した。

高山が持っている銃は、単発ではあるものの、殺傷力は非常に高い大型の銃で、たとえ急所に当たらなくとも致命的となりかねない。

一方の手塚は、前からずっと所持していた連射式のアサルトライフルだ。

連射が利くものの、狙い定めることが難しく、高山の素早い動きもあってか、弾は数発しか発射されなかった。

双方の撃つ弾は、ことごとく空を切り、壁や床をえぐり、傷をつけていく。

ガガガガガッ！！

ズドォーン！！ズドォーン！！

2人は、通路の角を2つ挟んで、角から身を乗り出しては銃撃、そして引くを繰り返していた。

だが、身を乗り出すのはほんの一瞬である為や、2つの角の間には、かなりの距離がある事も相まって、互いの銃撃は相手に当たることはなかった。

手塚「どうした、大将。このまま戦争ゴッコを続けるかい？」

高山「その口の軽さ、生きる上では損だぞ」

手塚「くくくつ、その方が俺らしいってな！」

手塚は余裕の受け答えをしているが、その間もずっと次の手を考え

ていた。

妥協は一切出来ない。それは重々承知しているからだ。

手塚「さあ、どうするよ。それとも先に弾切れした方が負けってコトかい？」

手塚は再度挑発する。

高山「いや、そうはならない」

手塚「あん？」

高山のその言い切りに、手塚は警戒感を覚えた。

それは当たっていた。

ウィーーン

遠くから、手塚の耳にモーターの音が聞こえてくる。

手塚がちらりと目線を向けると、通路の中央を走るロボットらしきものが目に飛び込んだ。できた。

手塚との距離は、ロボットの射程範囲より少し離れていた。

手塚「あれで俺を仕留めるつもりか？反吐がでるぜ！」

手塚はそう言いつつ、アサルトライフルを片手に持ち替え、空いた右手で腰にぶら下げている拳銃を取り出した。

こうすれば、隙が生じることもなく銃撃出来るからだ。

手塚「ロボットで挟撃するつもりだったらしいが、残念」

右手の銃の狙いを定める為、視線をロボットに向けた時、気付いた。

手塚「なにっ　!？」

ロボットの本体から出る形で、小口径のサブマシンガンが見える。

注目すべきはその銃口の先端だ。

先端には、鎖で固定された小型爆弾が取り付けられていた。

そこからは当然弾が発射される。

すると、どうなるか。

手塚は、その結論のたどり着く前に行動を起こしていた。

ガーン!!ガーン!!

放った銃撃は、ロボットの本体とキャタビラをそれぞれ貫く。

キャキャキャキャ・・・

片方のキャタビラが故障したのだろっ。前に進めなくなったロボットはバランスを崩してそのまま倒れこむ。

だが

高山「王手だ！」

ガガガガッ！！

倒れこむ瞬間に、ロボットが銃撃を開始していた。

その狙いは、まるで手塚とは違った方向を向いていた。

そして放たれた弾は、真っ直ぐの軌道のまま、爆弾のど真ん中を貫く。

ズウウウン！！

ロボットは、自爆と言える行為を躊躇なく行った。

瞬く間に爆風、そして飛び散る破片は、ロボット、そして手塚を巻き込む。

手塚「ぐおおおっ！！」

爆風に押され、手塚の身体はそのまま吹き飛ぶ。

チィッ！まさかロボットを特攻に使いやがるとは……。

手塚はこの時、高山の真の恐怖を身をもって知らしめられた。

そして爆風の勢いに流されたまま、床に叩きつけられる。

手塚「がはっ!!」

手塚は一瞬意識が飛びそうになったが、高山がこの隙を狙って追撃することは目に見えていた為、無理やり意識を繋ぎとめる。

手塚「ぐうっ!やべえな、こりゃ」

怪我の程度は見ずとも、全身に痛みが走った為に、それが軽い傷ではないことを示していた。

だが致命傷になっているわけではない。その証拠に、まだ身体に力が入る。

手塚にとって幸運だったのは、ロボットが進行を変え、倒れた瞬間に爆発したことだ。

その影響で、爆弾の爆発を手塚が受ける前に、ロボットが爆弾を覆う形で、飛び散った爆風と破片の大半をロボットが受け止めたのだ。

一身に爆撃を受けたロボットも木っ端微塵になってしまったが、爆弾自体の爆風はある程度弱まった。

その為、まだ動けなくなる程の怪我は負っていなかったのだ。

手塚「とは言うものの、大ピンチであることに変わりはないな」

手塚は平静を保ちつつも、床に倒れている自身の身体を必死で起こそうとした。

すぐに高山がこちらにやってくる。それは明白だ。

だから早く体勢を・・・。

その時、手塚の目にあるものが入ってきた。

葉月「・・・・・・・・」

それは床に倒れこんでいる葉月の姿だった。その様子からは、既に生きているようには見えなかった。

手塚「コレだ！」

手塚は体勢を立て直しながら、ポケットからPDAを取り出した。

・  
・  
・  
・  
・

高山「まだ生きているのか、しぶとい男だ」

手榴弾の爆風が収まり、通路の角から様子を伺った高山は、立ち上がろうとする手塚を目撃して、そう呟く。

高山「だが、虫の息なのは確かなようだな」

高山はそう言いつつ、再び銃を構える。



そして銃を撃ちつつ、通路の角から飛び出した。

ズドォーン！！

だがその銃撃を撃つ直前に手塚が再び動き出す。銃撃はその手塚のすぐ横を通り過ぎた。

手塚「うわっ！？あつぶねえ！」

手塚はよろけながらも勢いよく立ち上がり、再び通路の角に身を隠す。

高山「ほう、まだ動く力が残っているのか！」

高山は追撃をやめ、再び通路の角に戻っていこうとした。

ガガガガガッ！！

手塚が反撃する。だが今にも意識が飛びそうな中、狙いがうまく定まらない銃撃は、高山に当たることはなかった。

そのまま高山は再び通路の角へと身を潜める。

高山「無駄な悪あがきを・・・」

くたばるのは時間の問題。そう判断した高山は、じつくりと通路の角から様子を伺った。

タッタッタッタッ・・・

だが、通路の向こう側から反響してくるのは、手塚の出す靴の音。

高山「！逃がすか！？」

戦いを放棄した。そう判断した高山は、通路を全力で駆け抜けた。

そして、手塚が居た側の通路の角の前まで来た時、葉月がそこで倒れているのが目に入った。

高山はそれには目もくれず、あくまで手塚を捕らえようとしていた。

角の向こう側の様子を伺おうとして、通路の壁にぴったりと身を寄せる。

どうやら手塚とは、結構な距離が空いているようだった。それは反響してくる足音からそう判断した。

高山「逃げ切れると思っているのか？」

高山は通路の角を曲がろうと、再び足を前に出そうとした。

その時、聞きなれない声が、床の方から聞こえてきた。

【あなたは解除条件を満たすことが出来ませんでした。 15秒後にペナルティが開始されます】

高山「むっ！」

それは葉月の首輪から発せられている合成音声だった。

その意味する事柄に気がついた高山は、瞬時に追撃をやめて反転し、もと来た道を戻り、葉月から離れる。

そして幾分か後退した後、それは起こった。

ガガガガガッ！！

突如、壁から4基の銃が表れ、一斉に銃撃を開始した。

それはすべて葉月に向けられていた。

そして放たれた銃撃の嵐は、瞬く間に葉月の身体を引き裂く。

高山「一步間違っていれば、俺まで巻き添えだったな」

後ろを振り返りつつ、そう呟く。

高山の言う通り、逃げ出すのが数秒遅れていたら、葉月と同様の運命を辿っていたことだろう。

だが、それで終わりではなかった。

ボッシュウウウウ！！

突如、通路上に何かが撒き散らされる。

それに気付いた時は、すでに事が発生した後だった。

高山「うおっ！ごほっ！こ、これは、催涙ガスか！？」

強烈に刺激に、高山はたまらず通路にうずくまる。

葉月の身体から噴出したそれは、まぎれもなく催涙ガスだった。

それは他ならぬ手塚が仕込んだものだ。

以前、階段にて麗佳の待ち伏せを突破する際に総一から手に入れた、催涙ガス弾の残りだった。

それを葉月の身体に隠した後、首輪をPDAで作動させたのだ。

そして降り注ぐペナルティの銃撃の嵐。

それが催涙ガス弾をも貫き、その衝撃でガスが爆発したのだ。

だから、葉月とはある程度の距離をとっていた高山も、それを逃れることは叶わなかったのだ。

高山「手塚のヤツの狙いは、銃撃ではなく、これだったとは、な・  
・」

高山は咳き込みながらも、状況を分析し、次の行動に移そうとする。

催涙ガスが収まりはじめ、なんとか立ち上がった高山だったが、手塚の次の手は既に始まっていた。

ガラガラガラ・・・

高山が逃げようとした通路の先に、突如防火シャッターが降りてきた。

ガシャン！

それは通路を完全に塞ぎ、高山の行く手を阻んだ。

高山「手塚の仕業か！？・・・だが、その手は俺には通じん！」

高山は咳き込みつつも、ポケットからPDAを取り出した。

そこに描かれていた数字は『8』。

高山が取り出したPDAは、先の戦いで麗佳から奪ったものだ。

そのPDAにはドアコントローラーのソフトが組み込まれているのは、先の戦いで明らかなる事。

高山は画面を呼び出し、素早く操作する。

すると、通路を遮断していたシャッターが、ゆっくりと上昇し始める。

高山「俺をペナルティとシャッターで袋小路にしたかったらしいが、残念だったな」

高山の背後では、いまだ銃撃が鳴り止むことも無く続いている。

もはや、原型をとどめていないほどの銃撃を、葉月は受け続けてい

た。

恐らく俺を閉じ込めておいて、その隙に下の階に逃げ

手塚「ああ、残念だったなあ？」

高山「なんっ！！？」

手塚は逃げたわけではなかった。葉月が居るすぐ近くの部屋に入り込んでいただけなのだ。

手塚は部屋のドアから身を乗り出した状態で、そう叫ぶ。その声には機転がうまくいった事への喜びが感じられた。

今、手塚の手に持っているのは、両手でガッチリと抱え込んでいる木箱だった。

その蓋の隙間から見えるのは、大量の小型爆弾だった。

手塚「部屋ん中から、すぐにコレを見つけた俺の幸運に感謝するぜ！」

そして、いまだペナルティの嵐が止まないところめがけて、爆弾の山を木箱ごと投げつける。

手塚「逆王手、ってな！」

間髪置かずに、すぐに部屋のドアを閉め、部屋の壁の方へと身を潜める。

投げ出された複数の爆弾は、大きく弧を描きながら、銃撃の嵐の前を通過する。

木箱は一度床に叩き付けられて、そのまま前にひっくりかえる。

ガラングラン

木箱の勢いに押され、爆弾が木箱から零れ落ちる。

そして

ズウウウン！！ゴゴゴゴゴ！・・・

弾が貫通した事により、それは勢い良く爆発し、他の爆弾を瞬時に誘発させた。

高山「ぐおおおおっ！？」

その爆発は、その場に留まっている高山に直撃した。

高山にとって不幸だったのは、シャッターの上昇が、下降よりもずっと遅かったこと。

その為、爆発を喰らった時、ほとんどシャッターは開いていなかった。

その影響で、逃げ場を失った爆風が跳ね返り、そこに複数の爆発により発生した爆風が四方八方に霧散し、高山の身体に容赦なく襲い掛かった。

天井まで届いたのではないかというぐらい飛ばされた拳句、そのまま床に叩きつけられる。

高山「ぐうつ！がはっ！？・・・」

高山と手塚は同じ小型爆弾の爆撃を受けた。最大の違いは、置かれた状況だった。

その為、高山は深手を負い、動くことが出来なくなっていました。

・  
・  
・  
・  
・  
・

爆風が収まったのを、部屋の揺れから感じ取った手塚は、自身から出血することも構わず、再び銃を構えた。

部屋のドアは爆風で吹き飛んでいた。手塚はドアのあった場所まで行き、そつと外の様子を伺う。

もう既にペナルティの銃撃は止んでいた。さっきまでの喧騒が嘘のように、あたりは静けさを取り戻していた。

手塚「だ、だが、大将のことだ。息を潜めているだけかもしれない・・・」

手塚は慎重に通路を進む。その動きは緩やかで、先ほどまでの俊敏に動きは微塵も感じられなかった。



ポタツ、ポタ、ポタツ・・・

手塚の身体から血が滴り落ちる。このまま放置しては、彼の命も危ういだろう。

本当にヤベエな。頭がクラクラしてきやがった・・・。

手塚は眩暈をなんとか堪えつつ、通路の角の前まで来て、その向こう側の様子を伺う。

そこに見えたのは、幾多もの銃撃でひどく抉れた床。かつて葉月だったもの。そしてその先には。

高山「ぐうつ、く・・・」

そこには、身動きがとれずに床に倒れこんでいる高山の姿だった。

それを確認した手塚は、通路の角から身を乗り出し、銃を構える。

手塚の息遣いは荒い。

手塚「へへっ、こ、こう言つのを、詰んでいるって、言つのかねえ・・・？」

手塚は最後まで取り乱すこともなく、自分自身のスタイルを貫いた。

そして銃を構え、かすむ目で狙いを定め、引き金を引く。

ガガガッ！！

弾から吐き出されたのは、ほんの数発。銃の反動に身体が耐えられず、引き金から指を離してしまったのだ。

だがそれは、もはや動くことが叶わぬ高山の身体に、ことごとく突き刺さった。

高山「無念ッ・・・」

その言葉を最後に、2度と高山が呻くことはなかった。

手塚「く、くくくっ、や、やったぜ・・・！！」

手塚の意識はそこで途切れた。

倒れ行く彼の身体は、そのまま床へと崩れ落ちた。

意識のない彼の耳には届いていなかっただろう。

彼が勝利者となった証を。

【あなたは5個の首輪を作動させ、見事首輪の解除条件を満たしました！】

・  
・  
・  
・  
・  
・

## 第16話「頂上決戦」（後書き）

高山との戦いで、辛くも勝利を手にした手塚。さて、その後の彼は  
どうなったのでしょうか？

次回は第17話「手塚のエクストラゲーム」最後まで、そしてこれ  
からも彼らしいエンディングを迎えます。乞うご期待

## 第17話「手塚のエクストラゲーム」

### 第17話「手塚のエクストラゲーム」

作・桐島成実

ゲームという名の激戦を乗り越えた手塚は、気がつく、壁が白い部屋の一室らしき所にあるベッドの上に寝かされていた。

手塚「ここは・・・どこだ？」

どうやらここは病院のようで、かつて居た敵の姿も戦いの痕跡も、跡形もなく姿を消していた。

最初はぼんやりしていた手塚だが、瞬時にさっきまで起こっていた記憶が、頭を駆け巡った。

手塚「そ、そうだ！あれから、一体どうなった？」

緊迫した状況を思い出し、慌てて身を起こした。

手塚「うおっ、いつつ・・・」

その時全身に駆け巡った痛みに、おもわず両手で自身の身体を押さえる。

押さえた手を見て気がついた。全身に傷を受けていたはずの箇所には、あちこち包帯が巻かれており、きちんと手当てされていたのだ。

手塚「終わったのか・・・？」

手塚は辺りを見渡す。

すると、ベットの真横にポツンと、黒いアタッシユケースが置かれていることに気がついた。

気になったので、痛む身体をなんとか動かしつつ、そのケースを自身の寝ているベッドの上に置く。

そして、慎重にロックを外す。

手塚「どうやら、鍵は掛かっていねえみてえだが」

ケースはあっけなく開いた。

その中にあるものを見て、手塚は自身が勝利したことを認識した。

手塚「やれやれ、本当によこしやがるとはなあ」

そこにあったのは、札束の山。ざっと見ただけでも数億あるのは間違いない。

手塚はその内の一つを手に取り、ふっと口元を緩める。

手塚「しかし、なんで俺を生かしておいたんだろうな？」

あのままゲームが続けば、終了の時間を迎える前に、手塚は死んでいたことだろう。

実の所、ディーラーの采配により、手塚を勝利者とすることにしたのだそうだ。

ゲームマスター以外誰も勝利者がいないとなれば、結末としては面白くなく、カジノの客が納得しないからである。

それを知ってか知らずか、いつしか手塚は自然と喉の奥から笑っていたのだ。

手塚「いずれにせよ、俺を生かしておいた事、いずれ後悔するコトになるぜ」

クッククック

手塚の目は、目先にある札束でなく、ずっと遠くの方を見ていたのであつた。

思いをはせる彼の表情は、妙に楽しそうだった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

そして、5年の年月が流れた。

モニターやらコンソールやらが並ぶ部屋の一室に、数人の姿があった。

ディーラー「観客の集まりは今日も盛況、と」

そう呟いた男、ディーラーは、自身が居るコントロールルームの窓から、その向こう側にあるカジノの様子を見下ろしていた。

郷田「そう。それは良かったわね」

ディーラーの後ろに座っていた郷田は、至極落ち着いた表情で、そう返答する。

カジノには豪華な衣装を身にまとった資産家達が集まり、賑わいを見せていた。

ルーレット・スロット・ダイスやカードのゲーム。

そんな賭博の道具が、カジノには設置されていた。

この客達の今回の目当ては、定期的開催されるショーを目当てに訪れていたのだ。

オペレーター「ショーの開始時刻まであと20時間後。そろそろスタンバイの方をお願いします」

するとそこに、オペレーターから準備を促す声が飛んできた。

郷田「あら？もうそんな時間」

郷田は振り返り、モニターに表示されている時間を確認する。

ディーラー「今回のゲームは郷田さんがゲームマスターですからね。何かあったら問題ですし」

郷田「そうねえ。ショーの会場はここから遠いから、なるべく早く行くことに越したことはないわね」

郷田はそう言い、さっそくイスから立ち上がる。その間の動作や仕草は至極ゆったりとしていた。

ディーラー「相変わらずですね。それがベテランの余裕というものですか？」

郷田「あら？あなただって十分ベテランでしょう？」

ディーラーの問いに、郷田はあっさりと受け流す。

そんな2人のやり取りは、いつもの日常の会話と変わらない。

ゲームの運営は、今も変わらず続けられている。そして、それは自分達が引退するまでずっと続くであろうと、この2人は信じて疑わなかった。

それが途切れたのは、カジノの方から聞こえてきた、ざわめいた声だった。

ディーラー「ん？」



その騒ぎにいち早く気がついたディーラーは、再び窓の方へと目線を移す。

郷田「何かあったのかしら？」

郷田もそれに気がつき、運んでいた足を止め、ディーラーの元へと行く。

そこで起こっている事態に、2人は目を丸くした。

入り口のある大きな扉。コントロールルームからは正反対にあり、遠くから見る形となっているのだが、そこに、カジノの観客とはまるで違う数人、いや数十人もの人が、カジノの方へとなだれ込んできたのだ。

ディーラー「これは、一体!？」

ディーラーは驚きを隠せなかった。

だが驚いてばかりもいられない。ハッと思い出したかのように、オペレーターへと指示を出す。

ディーラー「すぐに警備隊を派遣しろ！」

警備隊とは、カジノでの非常事態に対応する為のグループだった。

どこのカジノでもありうることだが、大小様々なトラブルはつきものだ。

特にここは規模が大きく、そういったトラブルが発生することも決して珍しくはなかった。

それらに対応し、丸く治めるのが警備隊の主な役目だ。

もつとも、客を目の前にして、銃などの武器を振り回すわけにもいかない為、目立った武器など所持していないのだが。

オペレーター「そ、それが、先程からコールしているのですが、なぜか連絡がつかず・・・」

警備隊と連絡をとっていたオペレーターは、うろたえてそう報告した。

ディーラー「何い！？くっ・・・ならば、すぐに上層部に連絡を！」

・  
・  
・  
・  
・

カジノへとなだれ込んだ集団は皆、皆一様に銃などで武装していた。

それは統制の取れた動きで、まるで扉を塞ぐ形で一列に整列し、銃を前方に構えた。

客A「な、なんだ！？何のさわざだっ！？」

客B「きゃああっ!!」

客C「き、君達は一体誰だ!!? ええい! 運営側は何をしているのだ!?!」

カジノの客達は、一斉に銃を構える集団を目の当たりにして混乱する。

その混乱は波のように、次第に広がっていった。

するとそこに、集団の後ろから、ゆっくりとした動作で1人の男が現れた。

??「よおし、じゃあまず、挨拶がわりといくか」

その男が勢いよく前方に手をかざして号令をかける。

それを合図に、謎の集団達は一斉に銃撃を開始する。

ズガガガガカツ!!!

一斉に放たれる銃撃は、瞬く間に狙いを定めていたカードゲームの台を木っ端微塵にする。

銃声と破壊の音が響き渡り、カジノの客達は慌てふためき、四方八方に散っていく。

??「よし、止め!」

男の号令と共に、銃撃が止む。

すると、逃げ惑う客達の元に、数人の人が近づいてきた。

郷田「なっ！？あなたは、確か・・・」

郷田達は、目先に居る人物を見て、驚愕する。

手塚「おう、久しぶりだな。・・・まさかアンタがゲームの関係者だったとはな！」

手塚はさも面白おかしそうに喉の奥を鳴らす。

郷田「一体どういいうつもりなの！？こんなことをしてただで済むと・・・！」

郷田の怒鳴り声を、手塚が遮る。

手塚「あー、言つとくが、テメエらの親玉に助けを求めようとしても無駄だぜ」

郷田「え・・・？」

手塚「ヤツラは今頃、三途の川を渡っている最中だからなあ」

手塚はそう言つてあざ笑う。

ディーラー「なん、だと・・・？」

郷田の隣にいたディーラーはそう呟く。

手塚「それで？『こんなことをして、タダで済む』のかい？え、オバさんよお？」

手塚の挑発に、郷田以下ゲーム関係者は、驚きのあまり言葉を失う。

郷田の答えを待たずして、手塚は部下が運んできたスピーカーのマイクを取りだす。

手塚「ようこそ！手塚主催のエクストラゲームへ！」

そしてまるで気取ったような口調で、その声を張り上げる。

手塚「俺たちは何も、アンタら客を殺そうって魂胆じゃあねえ」

手塚は身振り手振りをまじえながら、わざとらしく振舞う。

手塚「むしろ助けてやろうってんだ！俺ってば優しいなあ」

その口調やしぐさは、まるで『スミス』そのものだ。

手塚「だが、その為には条件がある。今からそれを発表してやろうじゃねえか！」

手塚は心の底から笑っていた。そして、その表情の輝きは一段と増す。

手塚「いいか！俺の近くにショーを運営する連中が居る。コイツらゲームの関係者の首を切り取って、俺の元へ持ってこい！」

郷田「なん、ですつてえ・・・！」

郷田や他の関係者は一様に青ざめる。自分達がゲームの運営側だったことも忘れてしまったかのように、さっきまでの余裕は完全に失われていた。

手塚「ただし！それが出来なかったヤツは失格だ。期限は1時間。それを超えちまったら、この辺一帯を爆弾で吹き飛ばす！！」

そして、それを裏付けるかのように、カジノの隅の方の天井付近が、突如爆発する。

ズガアーン！！パラパラ・・・

客D「うわあぁっ!？」

天井から瓦礫が落ち、もうもうと立ち込める煙と共に、客達のいる下へと落ちていく。

手塚「ありゃあ、一つ爆発しちまったか。なんてな」

これは手塚の演出だった。

手塚「言っとくが、さっき言った爆弾はこんなもんじゃねえ。さっきも言ったが、この辺一帯を吹き飛ばす、だ」

手塚のテンションは格段に上がっていく。

手塚「それから、外部への連絡及び退路は寸断させてもらった。つ

まりは、だ。ここは完全に外部から隔離されたってわけだ」

そして、手塚は最後に言い放つ。

手塚「じゃあ、そろそろ初めるとするか。せっかくだから俺が盛大に盛り上げてやるっじゃねえか！」

手塚の再度の号令と共に、配下の銃撃は続く。今度の狙いは天井で、あえて客や関係者に当たらないように威嚇した。

手塚「くくく、はははははははっ!!」

もはや手塚を止められるのは、この世に誰一人としていなかった。

手塚「さあて、次は何をどうしようかねえ？」

そして彼は、さらなる躍進を続けることになるのであった。

～END～

## 第17話「手塚のエクストラゲーム」（後書き）

いかがだったでしょうか？エピソード『5』とはまるで違ったエンディングを迎えましたが、満足いただけただでしょうか？

さて、次のエピソードは、一体どのような物語が始まるのでしょうか？

エピソード『7』も掲載しておりますので、そちらも閲覧いただけたらと切に願います



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2448m/>

---

シークレットゲーム      KILLER QUEEN      ~ エピソード6 ~      【手塚編】

2010年10月8日22時17分発行